

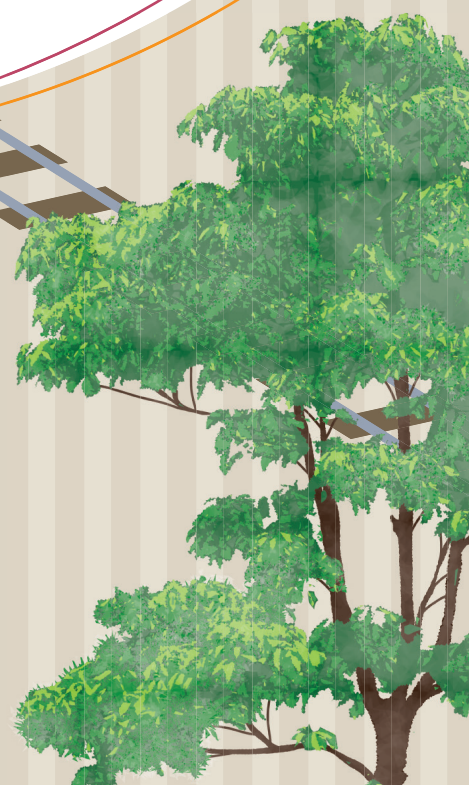
大会テーマ からだとことば

～ 問い直し、こわし、つくる ～



Japanese Association of Qualitative Psychology

日本質的心理学会 第14回大会 in 東京



日時

2017年 9 月 9 日(土)～ 10 日(日)

会場

首都大学東京荒川キャンパス
(東京都荒川区東尾久7-2-10)

<http://www.jaqp.jp/>

開催のご挨拶

日本質的心理学会第 14 回大会は、首都大学東京荒川キャンパスで開催されます。開催日程は、2017 年 9 月 9 日（土）、10 日（日）です。

本キャンパスは、「荒川」と名がつく通り、東京の下町、そして、並行して流れる隅田川と荒川の近くに位置しております。正門の周辺には背の高い葉の茂った高木が立ち並び、校舎の方へと歩を進めると、小高い丘と真っすぐ空に伸びる木々が見え、その間を小道が通っています。都内であることを忘れてしまいそうなのかな風景です。

キャンパスを出ると、その先数分で、かつて「天才たけしの元気がでるテレビ」で取り上げられた「はっぴーもーる熊野前商店街」に到着します。入り口では恰幅のよい猫が出迎えてくれ、喫茶店などでは時間を忘れてくつろぐことができます。時々、撮影などをしていることも。この商店街をそのまま突き進んでいくと、その先にも、花屋からスーパー、果物屋、酒屋、レストラン、居酒屋等々が立ち並ぶ「おぐざんざ商店街」へ。レトロな雰囲気にもみ込まれ、ここでも時間を忘れられます。

キャンパス近くには、路面電車（都電荒川線）の熊野前駅があります。東京都の路面電車は明治 33 年に作られたようですが、この線は、他線がなくなってしまうと、そんなことはお構いなしに今ものんびり走っています。是非、乗車してみてください。この電車の中では、足元が不安定な「おばあちゃん」が乗ってくると、乗客みな「おばあちゃん」「おばあちゃん」と言って、あるいは支えて席へと促します。この中ではそれが当たり前なのです。

第 14 回大会は、質的心理学を再度、問い直す機会といたく思っております。十数年にわたって行われてきた日本質的心理学会の活動、そして多分野で取り組まれている質的研究は、社会に、学問に、そして私たちの暮らしに、いかなるインパクトを与えてきたのでしょうか、そもそも“質的”に何を目指してきたのでしょうか、その目的に手は届いたのでしょうか。そして、今後いかなる方向に向かっていこうとしているのでしょうか。学際的な研究活動を進める本学会は、明確な一つの目的のみに向かっているわけではありませんが、多様性とそこに生まれる差異は、質的研究の新たな方向性を生み出すエネルギーとして私たちの背を押してくれるに違いありません。

場所と時間を忘れさせられるこの首都大学東京荒川キャンパスで、参加者の皆さんと充実した議論ができることを期待しております。そして、その成果が、質的心理学が向かうべき未来の方向とその道筋を照らし出すものとなることを希望します。

日本質的心理学会 第 14 回大会 実行委員長
西村ユミ

目次

1. 大会参加者へのご案内	1
2. 大会企画概要	1
3. 交通アクセス	4
4. 会場案内	5
5. 大会スケジュール	8
6. 大会プログラム・抄録	
(1) 大会メイン企画 特別対談	11
(2) 大会企画シンポジウム	12
(3) 委員会・会員企画シンポジウム	14
(4) ポスター発表	
9 日午前 (9 : 30～10 : 30)	46
9 日午後 (14 : 30～15 : 30)	65

1. 大会参加者へのご案内

1) 大会概要

大会テーマ「からだとことば～問い直し、こわし、つくる～」

第14回大会 HP : <http://www.shitsushin14.jp/index.html>

日本質的心理学会 HP : <http://www.jaqp.jp/>

第14回大会メールアドレス : shitsushin14@gmail.com

会期 : 2017年9月9日(土) 10(日)

場所 : 首都大学東京荒川キャンパス

2) 大会参加について

受付場所 : 校舎棟(新棟1Fホール)

受付時間 : 両日ともに8:30～

① 大会参加事前申し込みの方

入金済みの方には事前に大会抄録、参加証と領収書が発送されています。受付でネームホルダーを受け取り、各会場へお越しください。未入金の方は、当日受付にてお支払いください。

② 大会当日参加申し込みの方

当日参加の方は受付にてご記名後参加費をお支払ください。参加費、懇親会費は下記の通りです。

大会参加費(当日)	一般会員・非会員	6000円	学生会員	3000円
-----------	----------	-------	------	-------

懇親会費(当日)	一般会員・非会員	5000円	学生会員	3000円
----------	----------	-------	------	-------

*学生会員の方は学生証をご提示ください。聴講生、研究生は学生に含まれます。

*大会初日の開始時刻前後は、受付が混雑することが予想されます。時間にはゆとりをもってお越しくださいようお願い申し上げます。

*大会期間中のお知らせや変更は、受付の掲示板にてお知らせいたします。

*期間中、日本質的心理学会デスクが設置されます。入会等の各種問い合わせはこちらにお願いします。

3) クローク

大会期間中、1階にクロークを設け、皆さまのお荷物をお預かりいたします。ご利用の際には必ず係員より番号札をお受け取りください。なお、貴重品についてはお預かりできませんので、個人で管理していただきますようお願いいたします。〔 9/9 8:30～18:30 9/10 8:30～16:30 〕

4) 学内無線LANの使用について

大会期間中、申請頂いた方のみ学内無線LANを無料でご使用いただくことが可能です。ただし人数に限りがあり、場所によっては繋がらない場合がございますのでご了承ください。ご利用の際は、受付でその旨をお伝えください。

5) 懇親会について

大会 1 日目の 18 時より首都大学東京荒川キャンパス学生食堂にて懇親会を開催します。多様な研究領域の仲間を見つける機会となります。おひとりでの参加、仲間を誘っての参加、学生会員の参加いずれも大歓迎です。当日申込みも可能ですので、ふるってご参加ください。

6) 昼食について

首都大学東京荒川キャンパス内および門前付近には、飲食店・コンビニがほとんどありません。学会当日は、学内の食堂の営業もございません。昼食は、事前参加登録フォームよりお弁当を申し込まれていない方は、各自でご用意の上ご来場いただくことをお勧めいたします。

9 日（土）、昼弁当の事前申し込みをされ、期日までに入金頂いた方には、抄録集と一緒に弁当申し込みの「**弁**」チェックが印字された名札を同封しております。同様に、10 日（日）の総会参加者の昼弁当も事前申し込みをされた方の名札には「**総**」チェックが印字されております。お弁当受け取り時にご提示下さい。尚、9 日（土）の弁当は、12 時～13 時、食堂にてお配りします。

7) 飲食・喫煙に関するご注意

お食事会場は、食堂をご利用ください（食堂の営業はございません）。なお、ゴミにつきましてはなるべくお持ち帰り頂きますようお願いいたします。また、喫煙場所は駐輪場脇にございます。地図をご覧ください。喫煙は、喫煙場所以外ではできませんので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

8) 会員控室について

本大会では、食堂を休憩室としております。2 階ホールではコーヒーサービス、作業所による洋菓子販売がございます。ご自由にご利用ください。

9) クッキー、パウンドケーキの販売について

9 日（土）に社会福祉法人トラムあらかわ「荒川ひまわり第 2」、「荒川ひまわり」のクッキーとパウンドケーキの販売があります。大変おいしく、人気がある商品ですので、お早めにお買い求めください。

<荒川ひまわり第 2> ♪荒川キャンパスのご近所♪

住所：東京都荒川区東尾久 3-20-10-2 階

TEL&FAX：03-3895-6149

URL：<http://www006.upp.so-net.ne.jp/tram/>

10) 書籍の展示・販売について

書籍販売、ソフトの展示があります。学会特別割引もありますので、ぜひ書籍コーナー（186 大視聴覚室前）にお立ち寄りください。

2. 大会企画概要

第 14 回大会では、メイン企画対談「からだとことば」、シンポジウム、ポスター発表を下記の通り企画しております。

【メイン企画】9月10日（日）9：30～12：00 一般公開

大会メインテーマである「からだとことば～問い直し、こわし、つくる～」とリンクし、詩人谷川俊太郎氏と細馬宏通氏による対談を企画しております。こちらは一般公開になりますので、ご関心のある方がいらっしゃいましたら、是非お誘いあわせの上、ご来場ください。

【シンポジウム】

本大会では、大会企画シンポジウム 1 企画、委員会企画シンポジウム 3 企画、会員企画シンポジウム 11 企画を開催いたします。それぞれのテーマ、開催日時、場所につきましては、大会プログラムをご参照ください。

＜企画者の皆様へ＞

会場には、マイク、プロジェクター、PC 入力端子が設置されております。パソコンを利用される場合は、各企画者が持参してください。

【ポスター発表】

ポスター発表は初日 9 日の午前（9：30～10：30）、午後（14：30～15：30）の 2 部構成で開催します。2 階 282・283 講義室、2 階廊下、3 階 384 講義室、3 階廊下が会場となります。発表者は、各自の演題番号を確認し、該当する会場にて準備・対応をお願いします。午前発表の方は、同じ場所で午後発表が開催されますので所定の時間までにポスターの撤去・回収をお願いします。撤去されていない場合は、大会事務局で撤去させていただきます。

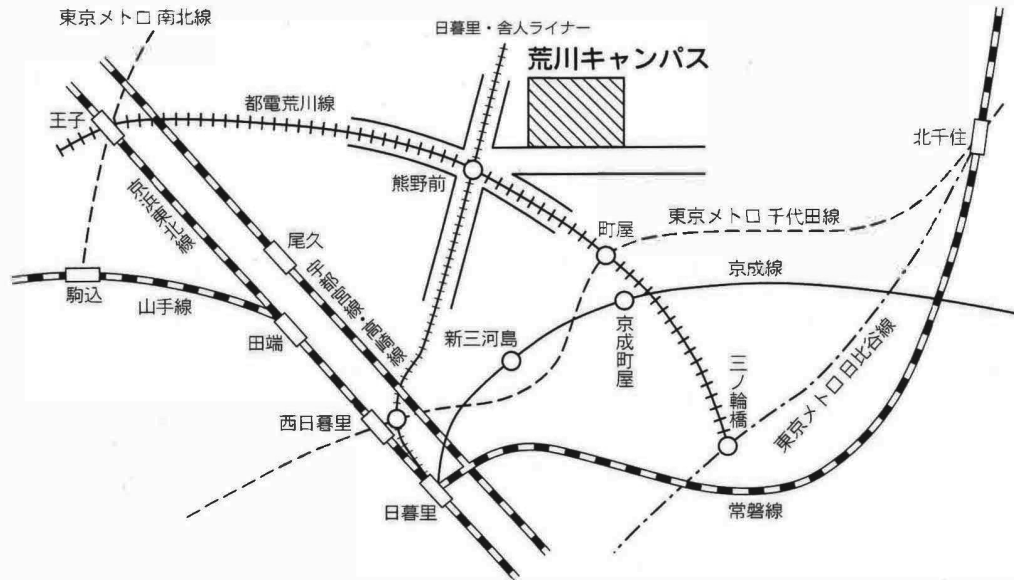
午前発表		午後発表	
9：00～	ポスター貼付	13：00～	ポスター貼付
9：30～10：30	ポスター発表	14：30～15：30	ポスター発表
12：00	ポスター撤去・回収	17：00	ポスター撤去・回収

*所定スペース内でポスターが貼れる範囲は、縦 160cm×横 90cm（A3 版横の用紙なら 10 枚程度入ります）です。貼付方法は、大会事務局で準備したテープをご使用ください。演題番号は事務局で事前に貼付してあります。

＜優秀ポスター賞＞

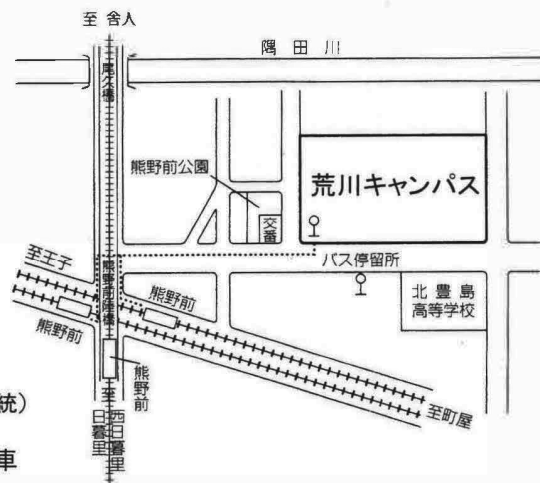
午前、午後それぞれ 1 件ずつ選出され、初日 9 日（土）18 時から開催されます懇親会で表彰式を行います。

3. 交通アクセス

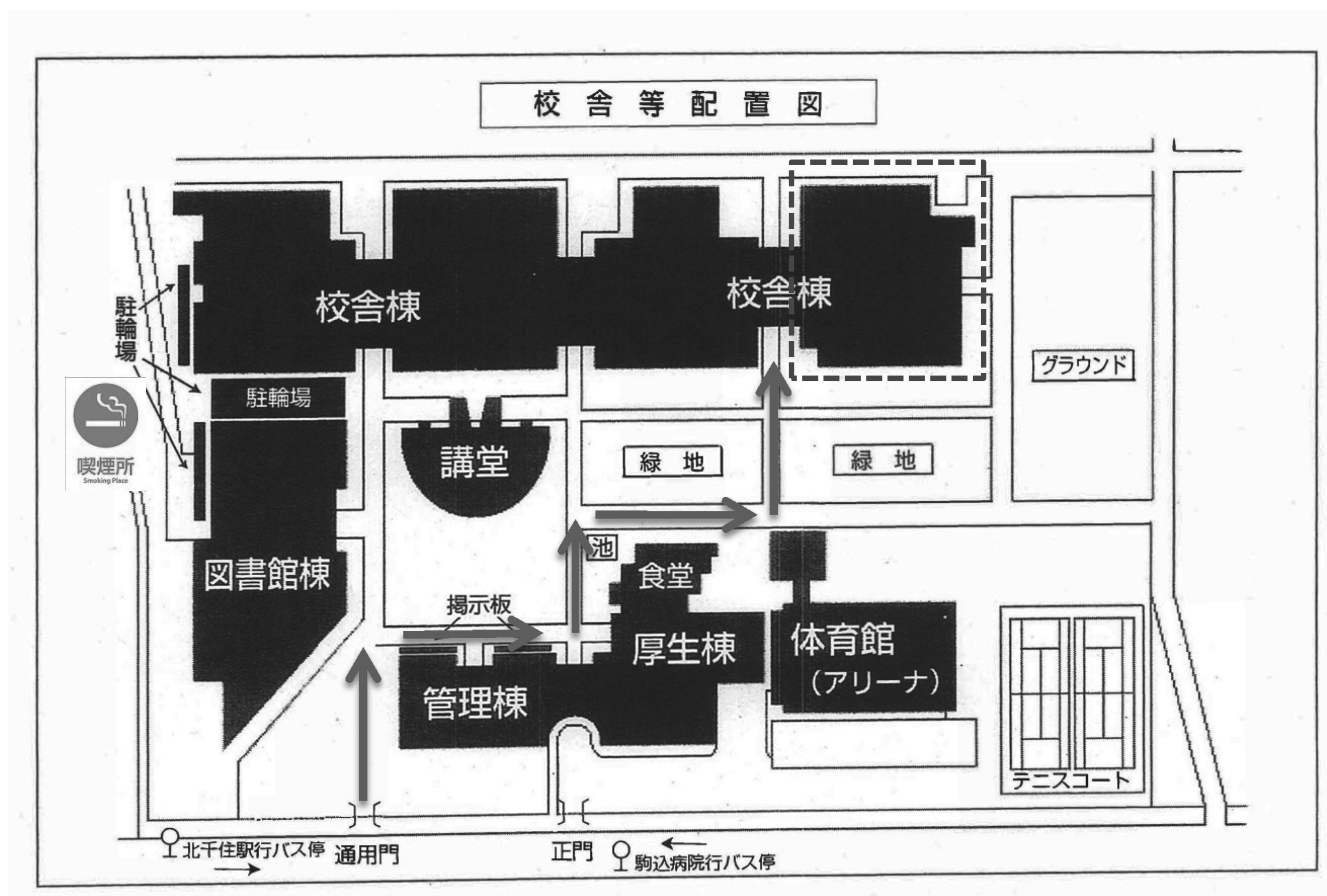


★交通

- 日暮里・舎人ライナー「熊野前」駅下車徒歩約5分
- 京浜東北線王子駅
東京メトロ南北線王子駅 } から都電荒川線「熊野前」
東京メトロ千代田線町屋駅 } 下車徒歩約5分
京成線町屋駅 }
- 山手線・京浜東北線田端駅前から都バス（端44系統）
北千住駅前行「首都大荒川キャンパス前」下車
- 常磐線・東武伊勢崎線 } 北千住駅前から都バス（端44系統）
東京メトロ日比谷線 } 駒込病院前行
東京メトロ千代田線 } 「首都大荒川キャンパス前」下車



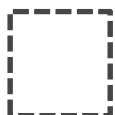
4. 会場案内（首都大学東京荒川キャンパス）



→ …順路



…喫煙所



…使用校舎（新棟）

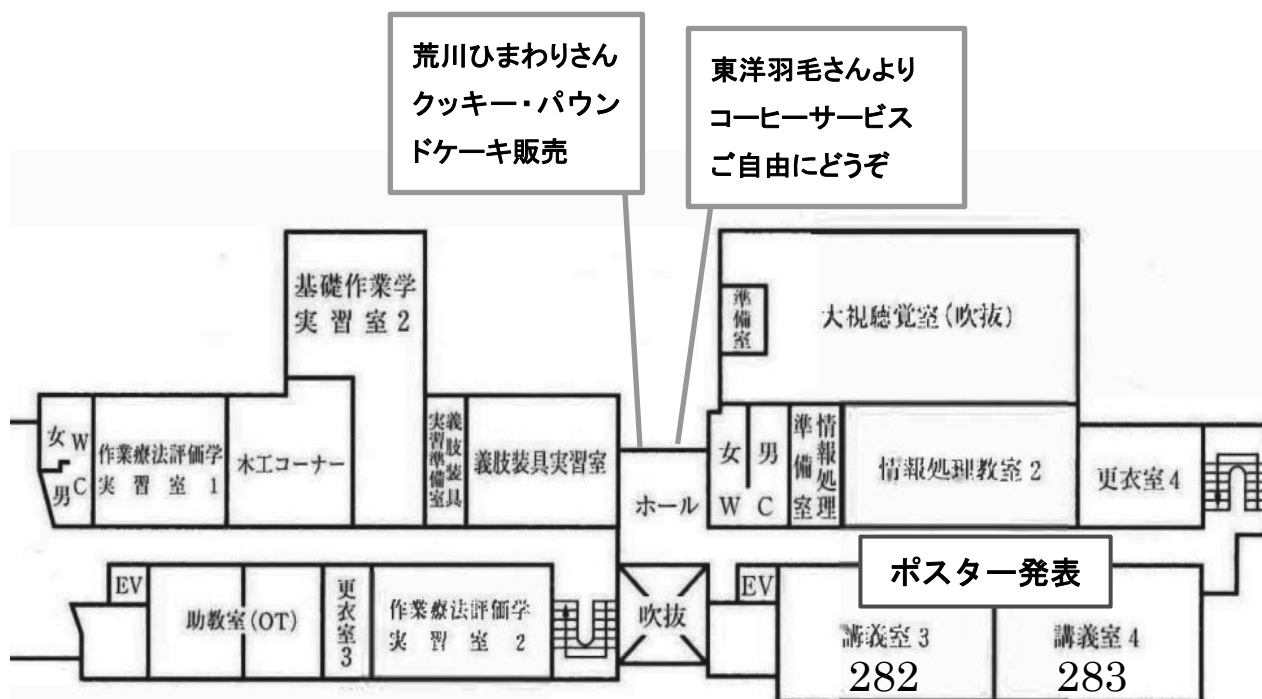
講堂 …9月10日（日）メイン企画，大会企画シンポジウム，総会会場

食堂 …9月9日（土）昼弁当の配布会場

【1 階】シンポジウム会場



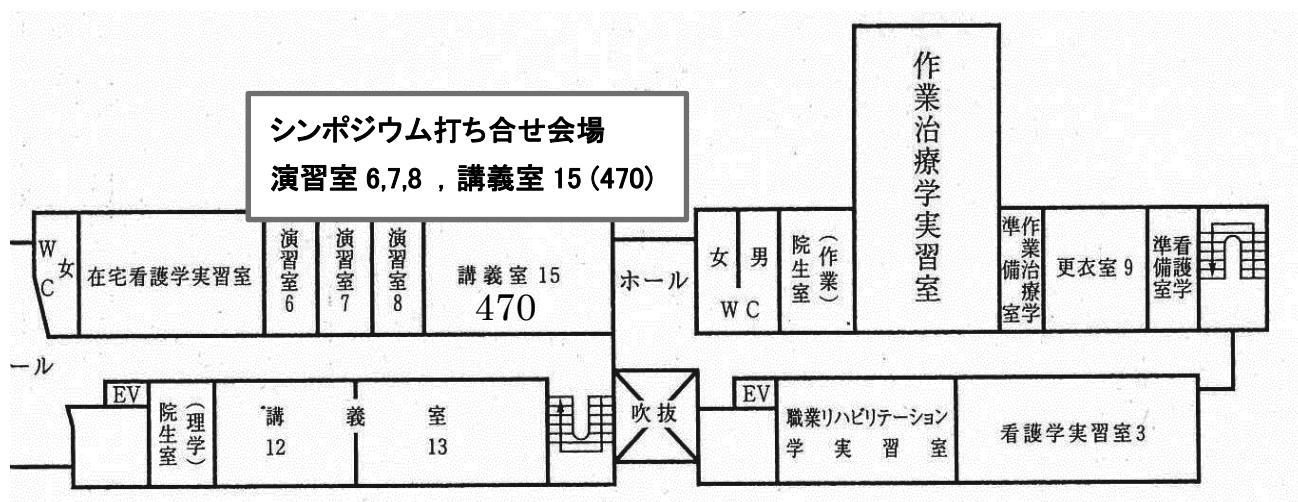
【2 階】ポスター会場



【3 階】シンポジウム・ポスター会場



【4 階】シンポジウム打ち合わせ会場



5. 大会スケジュール一覧

【大会 1 日目】

大会プログラム

シンポジウム				ポスター発表
186 教室	182 教室	183 教室	382, 383 教室	282・283・384
10:30-12:30				9:00 ポスター貼付
				9:30～10:30
				ポスター発表（午前）
【A1】 ゲームによるインターローカリテ ィのデザインーコミュニケーションの越 境・横断と対話の場の創出— （企画者：石田喜美、岡部大介）	【A2】 多様なナラティブ・データ分析手法の 可能性を問う ―質的心理学と文学・ 文体論との邂逅― （企画者：保坂裕子）	【A3】 からだやことばで「表現されるこ と」・「表現されないこと」とそれら の受けとめや解釈について考え る（企画者：河原智江、西村ユミ）		12:00 ポスター撤去
13:30-15:30				13:00 ポスター貼付
【B1】 編集委員会企画「身体を見る・身 体に触れる・身体を感じる」 （企画者：好井裕明、宮内洋）	【B2】 当事者とその周囲の関係をこわし・ つくる 精神科デイケア通所者、ラン スジェンダー者、自閉症スペクトラム 者の妻から （企画者：町田奈緒子）	【B3】 医療、介護領域の職種間連携の アクションリサーチ、 ーリフレティ ング・プロセスの導入の試みー （企画者：清田敦彦）	【A1】 383教室 カードゲーム解説 公開時間 13:30～17:00	14:30～15:30 ポスター発表（午後）
15:45-17:45				
【C1】 フォーラム編集委員企画、「立場を 異にする者同士のかかわりの質 的研究」（企画者：平本毅、谷 美奈、川島理恵）	【C2】 当事者と倫理と研究者：医療分野に おける質的研究の貢献 （企画者：福田茉莉）	【C3】 人生 100 年時代のキャリアデザ イン （企画者：豊田香）	【C4】 382 教室 「治癒せざるものの治療のため に」ー病い経験を捉える新しい 概念生成に向けて （企画者：坂井志織）	17:00 ポスター撤去
懇親会@ 食堂 18:00～20:00				

【大会2日目】

シンポジウム				
講堂	182 教室	382 教室	383 教室	384 教室
9:00 開場 9:30～12:00				
大会メイン企画 対談「からだ と ことば」 谷川俊太郎, 細馬宏通 対談	182 or183 中継会場			
12:30～13:30				
総会				
14:00～16:00				
大会企画シンポジウム 質的研究評価基準への展望— 「Sage 質的研究キット」と APA における議論を手がかりに— (能智正博, 鈴木聡志, 大橋靖史, 柴山真琴, 上淵寿, 永田素彦)	【D1】 研究交流委員会企画 質的心理学は「越境する知」たり えるか: 理論という視点から考え る (企画者: 東村知子, 宮本匠)	【D2】 ライフストーリーの映像化 ～ビジ ュアル・ナラティブとしてのメモリア ル・アニメーションの可能性～ (企画者: 家島明彦)	【D3】 「TEM で広がる社会実装」の 可能性 (企画者: 豊田 香)	【D4】 ブルーナー文化心理学の射 程: フォークサイコロジーと行為 理解に係る「規範」の問題 (企画者: 横山草介)

6. 大会プログラム・抄録

【大会メイン企画】 特別対談 テーマ「からだ と ことば」 一般公開講座

谷川俊太郎（詩人）×細馬宏通（滋賀県立大学教授）

司会：西村ユミ（大会長）

日時：9月10日（日） 9：30-12：00

場所：講堂

大会のメイン企画では、谷川俊太郎さんと細馬宏通さんに対談をして頂きます。

「普段気づいていないことが突然言葉として現れる」、「自分の中から何かがポコッと出てくる」のを待ち、「何か通常の意味ではないところに行く」ことを試み続ける詩人と、「当事者の意識からも逃れるような、ごく当たり前に見える『日常』の記述」によって、世の中が「案外、ちょっとしたタイミングで動いている」ことを分析する研究者とのデュオは、私たちに、新たなタイプの“ことば”をもたらしてくれるかもしれません。そんなステキな瞬間に、“からだ”ごと巻き込まれてみませんか。

谷川俊太郎（たにかわ・しゅんたろう）

1931年東京生まれ。詩人。

1952年第一詩集「二十億光年の孤独」を刊行。1962年「月火水木金土日の歌」で第四回日本レコード大賞作詞賞、1975年「マザー・グースのうた」で日本翻訳文化賞、1982年「日々の地図」で第34回読売文学賞、1993年「世間知ラズ」で第1回萩原朔太郎賞、2010年「トロムソコラージュ」で第1回鮎川信夫賞など、受賞・著書多数。詩作のほか、絵本、エッセイ、翻訳、脚本、作詞など幅広く作品を発表。近年では、詩を釣る iPhone アプリ「谷川」や、郵便で詩を送る「ポエメール」など、詩の可能性を広げる新たな試みにも挑戦している。（HP：谷川俊太郎*com「プロフィール」より）

細馬宏通（ほそま・ひろみち）

滋賀県立大学人間文化学部教授（コミュニケーション論）。2006年から介護現場での観察研究を始め、利用者やスタッフの会話にあらわれる身体動作を観察してきた。

著書に「浅草十二階一塔の眺めと“近代”のまなざし」青土社、「ミッキーはなぜ口笛を吹くのか—アニメーションの表現史」新潮社、「今日の『あまちゃん』から」河出書房新社、「うたのしくみ」ぴあ、とその関心は幅広く、ジャンルを横断した“目利き”として知られる。（医学書院 WEB マガジン「かんかん」より <http://www.shc.usp.ac.jp/hosoma/>）

質的研究評価基準への展望

—「Sage 質的研究キット」と APA における議論を手がかりに—

企画・話題提供・司会	能智 正博	（東京大学大学院教育学研究科）
企画・話題提供・司会	鈴木 聡志	（東京農業大学教職・学術情報課程）
企画・話題提供	大橋 靖史	（淑徳大学総合福祉学部）
話題提供	柴山 真琴	（大妻女子大学家政学部）
指定討論	上淵 寿	（早稲田大学教育・総合科学学術院）
指定討論	永田 素彦	（京都大学大学院人間・環境学研究科）

企画趣旨

質的研究の広がりとともに、質や評価基準に関する議論も持続的に行なわれてきた。例えば 2016 年から日本でも質的研究の教科書シリーズ、「Sage 質的研究キット」（新曜社、全 8 巻）が翻訳・出版され始めたが、本シリーズには研究の質を問う Flick の巻が含まれているほか、それぞれの巻においても様々なかたちで評価に関わる問題が論じられている。一方 APA（アメリカ心理学会）では 2014 年から専門学術誌 *Qualitative Psychology* が刊行され、それに呼応して論文の評価基準への関心も高まっているようであり、*American Psychologist* 誌に評価基準を発表する方向で準備が整いつつある。一方、評価には質的研究に共通の部分があれば、同時に、方法論により異なる部分もある。指標を作成すること自体の問題もしばしば指摘される。本シンポでは、「キット」の訳者の何人かが、おのおの得意とする方法論と「キット」の記述を参考に、APA の論文評価基準に関する議論を紹介する。その上で、『質的心理学研究』における論文査読の実際にも照らしながら、質的研究論文の評価のあり方について議論する。

発表内容

研究デザインの視点から（鈴木聡志）：U. Flick 著『質的研究のデザイン』における質的研究の質の問題を紹介し、これと比較することで APA 基準を検討する。彼は質的研究の質の問題について 1 章を使い、研究の計画、実行、報告の 3 つのステップに分けて説明している。その内容を概説すると、計画の段階では、研究課題やリサーチ・クエスチョンや住民についての既存の知識を考慮して特定の手法やデザインを決定すること（適用）と、特定の手法やデザインが研究課題とフィールドに合っているかを何度もチェックすること（適切性）と、多様性に関わっていることが質を向上させる。実行の段階では、厳密性と創造性、一貫性と柔軟性、基準と方略の緊張の中でフィールドと向き合うことで質が発展する。報告の段階では、透明性、フィールドからのフィードバック、結果を届ける読者のためにどのように書くか、が重要である。彼の議論では質的研究のデザインを通じた質の向上に関心があり、明確な基準のようなものは示されていない。彼は、読者にはアカデミックな読者と実践的な状況にいる読者がいて、それぞれに向けて書く際書き方のスタイルが異なることを指摘し、前者に向けた論文やレポートには何らかの基準が必要だが、読者が後者の場合はより簡略で柔軟な書き方が望ましいとしている。APA 基準は前者向けの論

文の書き方を論じているが、後者向けのレポートの基準も必要かもしれない。

ナラティブ研究の視点から（能智正博）：S. Kvale 著の『質的研究のための「インター・ビュー」』と比較しつつ APA での議論を紹介する。本書において研究の質は、インタビュー自体の質、文字起こしの質も含めた多層的なものと考えられており、研究論文の質はそれらいくつかの面が統合された結果である。インタビュー研究は、職人が自分の作りたいもののイメージを念頭になるべくよい素材を調達し、その素材を生かしながらイメージを調整し、工芸品（craft）を完成させていく過程に類比される。より具体的には、たとえばテキストに照らして問いを明確化・精緻化していくこと、研究過程全般を通して多様な面から確認を重ねること、自分の理論的立ち位置を明確化してそれに即した見方や方法を工夫することなどが含まれる。これらは必ずしもすべてが、伝統的な研究論文の評価基準とは重ならず、ナラティブ研究の射程の広がりもそこに反映しているだろう。今回の発表ではそうした広がり、APA の基準に関する議論においてどういうふうに生かされているかという点を含めて考察していきたい。

ディスコースの心理学の立場から（大橋靖史）：T. Rapley 著『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』を参照しながら、APA 基準を読んでみたい。会話分析やディスコース分析では、リサーチ・クエスチョンを立て、それに基づき分析材料を収集し、データを書き起こす、あるいは、アーカイブを作成するプロセスを経ていく。こうしたプロセスがこの種の質的研究においては中核的な作業となる。プロトコルやアーカイブを作成していく中でどれだけテキストを読み込めるかが、研究の質を決定することになる。コード化を含め、元のデータに何度も立ち戻りつつ、次第に分析を深めていくことが大切になる。そして、そうした深化のプロセスを経たうえで、これまでの研究や多様なケースとの比較検討を通じ、分析の妥当性について検討し、論文を作成することになる。この点において、会話やディスコースの分析のアプローチは基本的には、他の質的研究アプローチと共通するものと言えよう。今回の発表では、会話やディスコースの具体的な分析を踏まえ、APA の基準に関する議論をどのように捉えればよいか、また、今後それらをどのように生かしていけばよいかについて検討してみたい。

エスノグラフィー研究の視点から（柴山真琴）：本発表では、M. Angrosino 著『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』を拠り所にして、APA の論文評価指標に関する議論を検討する。同書では、エスノグラフィーを「観察、インタビュー、文書分析を主要な技法とする多角的なデータ収集法」として捉え、特に観察をエスノグラフィーの中核的な技法として位置づける。その上で、複数の章にまたがる形で「研究の全過程で妥当性を絶えずチェックすること」の必要性を強調する。具体的には、(1)観察段階：「トライアンギュレーション」により複合的なデータを収集すること、(2)記録段階：組織化されたフィールドノートをつけること、(3)分析段階：「記述的分析」と「理論的分析」を行い、「イーミック」と「エティック」の視点の間を往復すること、(4)執筆段階：迫真性のある首尾一貫したナラティブとして表現すること、が妥当性の担保に寄与すると指摘する。さらに「厳密に書くこと」と「豊かに書くこと」の間で生じる問題にも言及する。当日の発表では、エスノグラフィー研究に要請されるこれらの諸点が APA の議論にどのように盛り込まれているのか、両者間に見られる記述の濃淡の違いに着目しながら、比較検討する予定である。

ゲームによるインターローカリティのデザイン —コミュニティの越境・横断と対話の場の創出—

企画者 石田喜美（横浜国立大学教育学部）・岡部大介（東京都市大学メディア情報学部）
話題提供者 石幡愛（一般社団法人オノコロ）・李勇昕（京都大学防災研究所）
石田喜美（横浜国立大学教育学部）・寺島哲平（常磐大学人間科学部）
名城邦孝（常磐短期大学キャリア教養学科）・関敦央（常磐大学心理臨床センター）
宮崎雅幸（常磐大学アドミッションセンター）
指定討論者 岡部大介（東京都市大学メディア情報学部）・矢守克也（京都大学防災研究所）

近年、ゲームを様々な社会領域に応用することで、現実上の問題解決を図ろうとするゲーミフィケーションが着目されている。質的心理学の領域では、矢守(2010)が、ゲームという媒体の意義を、インターローカリティの観点から意味づけてきた。本シンポジウムでは、話題提供者による 2010 年代以降の実践報告をもとに、コミュニティをつなぐ媒体としてのゲームの可能性について議論したい。

1. 解釈の余地のあるゲームを媒介とした境界横断による学習：『としまアートステーションYのつくりかた』（石幡愛）

地域資源を活用した創造拠点・活動の立ち上げを疑似体験するカードゲーム「としまアートステーション Y のつくりかた」（右図）は、としまアートステーション構想による、民間の遊休スペースを活用した創造活動の拠点づくりに関するプロジェクト（としまアートステーション Y、以下、Y）の記録集であり、地域資源を活用した創造拠点・活動のつくりかたを学ぶツールとして、制作されたものである。参加者は、指定されたテーマ



にそって、素材となる地域資源カードを収集し、それらを組み合わせて創造拠点・活動をプランニングし、互いに発表しあう。なお、Y の経緯についてよく知る者が進行役を務め、実際のエピソードなどを語って聞かせることもあった。このゲームを通して、参加者は Y をつくる過程で起きた出来事を擬似的に体験することとなる。また、共通のテーマに対して、全員が異なる地域資源カードの組み合わせでプランをつくるため、テーマや地域資源カードに対する解釈や、ゲーム中では定義されておらず参加者の想像によって補われる文脈の多様性が明らかとなる。

本発表では、このゲームのプレイ中の発話の分析、および、事後アンケートの結果を報告する。参加者は、①特定のカードやゲームの進行状況をきっかけに、類似の経験や記憶を想起し、②普段属するコミュニティの価値観を、ゲームを進めるための方略として持ち込んだ。また、③その価値観は、他の参加者の発話やプランを聞くことによって相対化された。さらに、④普段扱っている問題等に対して、このゲームをどのように活かしようかについて言及する参加者もいた。これを、異なる状況間での知識の参照が個人内・個人間で行われることによって、それぞれの状況に対する意味付け自体が変化していく学習と捉え、そのような学習が生じる条件について議論する。

2. Yes と No を越えて～防災ゲーム「クロスロード：大洗編」の実践から～（李勇昕）

本発表では、東日本大震災の被災地である茨城県大洗町の住民自身が、カードゲーム形式の防災教材「クロスロード：大洗編」（右図）（以下「大洗編」）の作成と実施に参画するプロセスを報告する。「クロスロード」とは、1995年阪神・淡路大震災の際、災害対応にあたった神戸市職員へのインタビューを基に開発された防災教材である。「クロスロード」ゲームの参加者が、二者択一の設問にYES またはNO の判断を選択し、参加者同士で意見を交わす。また、「クロスロード」は「一般編・神戸編」以降、「市民編」、「災害ボランティア編」...など続々と開発されてきた。

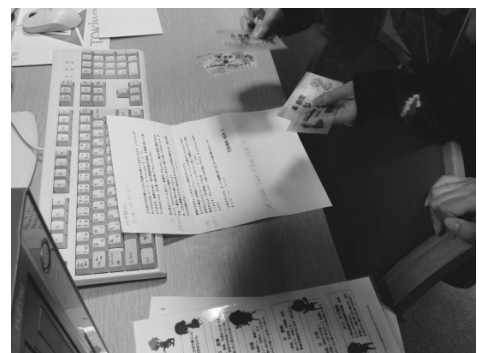


筆者は、2014 年から、大洗町の役場の職員、観光業者、宿泊業者、商店街の店主、漁師、消防団員、ライフセーバー、主婦、小中学生、地元の学生ボランティアとともに、東日本大震災に関する、避難行動、風評被害、復興への取り組みなどをテーマにし、「大洗編」を作成した。また、筆者がコーディネーターとして、2014 年から 2016 年まで、大洗町で「大洗編」の防災ワークショップを 8 回開催した。「大洗編」というゲームはこれまでの「クロスロード」とは異なり、ローカル（大洗町）でローカルな設問（大洗町の震災経験）をプレイすることが特徴である。

「クロスロード：大洗編」のもう一つの特徴は、当事者がその体験を「クロスロード」の設問としてつくるだけではなく、その設問を作成した理由、経験、ジレンマ、反省点などを解説する動画がつくられた点にある。本研究ではこの動画を「当事者動画」と呼ぶ。「当事者動画」は、当事者本人と他者とが「対話」できるツールとなっている。本発表では、ワークショップの際に、設問を作成した当事者が出席し、ほかのワークショップの参加者と自身の「当事者動画」を鑑賞した後に、設定していた Yes と No の判断を越えて新たな答えを導きだした事例を紹介する。そして、このような新たな答えが、当事者自身および地域にとってのどのような意味を持つのかを検討する。

3. ゲーム・デザインの導入による文化的に不透明な人工物の可視化：RPG 型図書館利用教育プログラム「Libardry(リバードリイ)」(石田喜美)

本発表では、大学図書館の図書館利用教育にロール・プレイング・ゲーム(RPG)のデザインを施した「Libardry (リバードリイ)」の事例から、ゲーム・デザインの導入による、越境としての学習の可能性について議論する。図書館は閲覧・借用を軸とした出版物の流通形態をもつ一方、若年層の図書館利用者および潜在的図書館利用者の多くは、購買を軸とした流通形態に触れる機会が多い。そのため、図書館利用経験の少ない人々は、これまでほとんど触れることのなかった新たな実践にアクセスする必要がある。本発表では、「Libardry Stage-1」の参加者たちが行ったグループ・ディスカッションでの会話を分析した結果を報告する。「Libardry」の改善点について問われた参加者たちは、ゲームというコンテキストに基づき、自身の経験を語り合う中で、大学図書館におけるアクセス困難な人工物の意味を変容させた。この意味の変容によって、参加者が日常的に接する実践コミュニティとは異なるコミュニティへと接合する可能性がひらかれる。



多様なナラティブ・データ分析手法の可能性を問う ー質的心理学と文学・文体論との邂逅ー

企画・司会：保坂 裕子（兵庫県立大学）

話題提供：奥田 恭士・内田 勇人

寺西 雅之・井上 靖子

糟屋 美千子（兵庫県立大学）

企画趣旨（保坂裕子）

質的心理学のみならず、多くの人文社会科学の領域で研究手法としてのナラティブが注目されている。ナラティブそのものをどのように捉えるかについての議論がある一方で、その多くは発話を文字化したデータを分析の対象としており、その分析手法についても議論の余地がある。

そこで本シンポジウムでは、ナラティブの分析手法について、その可能性を問う新たな試みについての報告と議論の場を企画し、質的心理学と文学および言語学による学際的ナラティブ研究の可能性を追究したい。

話題提供者からは、同一の文字化された発話データを、異なる着眼点と手法によって分析した結果について報告する。具体的には、心理学、ディスコース分析に加え、文学論や文体論を機軸とした分析結果を提示する。これらの分析結果は、ナラティブ分析の視点を問い直し、整理するうえで、重要な出発点となるのではないだろうか。とりわけ、ナラティブをテキストとみなすとき、文学や文体論の観点から分析を試みたことで、それぞれの共通点と相違点、新たな視点を見出すことが可能と考えられる。本シンポジウムではそれらの成果発表を中心に、ナラティブ・データ分析手法の新たな可能性について検討したい。

話題提供1 なぜ今ナラティブか？ーその現状と背景についてー （奥田恭士）

「ナラティブ」という言葉が最も顕著に見られる領域は、医学・心理を中心とする臨床現場である。しかし、同時に教育・社会・経営をはじめ、美術・建築、あるいは映画やゲームといった領域でも幅広く使われている。なぜ今これほどにナラティブなのか？表記と定義は分野によってさまざまだが、その現象自体に実は大きな意味がある。本発表では、その現状と背景を概観し、物語論の立場から「ナラティブ」とは何かについて考察する。

話題提供2 介護老人保健施設入所者のライフレビューのテキスト分析ー語り手と読み手の心理に焦点を当ててー （内田勇人・寺西雅之・奥田恭士）

本発表は、介護老人保健施設入所者による語り（＝ライフレビュー）を対象とし、内田が健康科学の視点から、寺西が文体論の視点から、奥田が物語論の視点から、それぞれ考察したものである。

①「研究参加者における心身の機能の特徴」

施設入所高齢女性3名におけるベースライン調査時の介護度、健康度自己評価、老研式活動能力指標総得点（手段的自立得点、知的能動性得点、社会的自立得点）、高齢者うつ尺度 15 項目短縮版

(Geriatric Depression Scale-15, GDS-15、以下 GDS) 得点の現状、並びにライフレビューを 1 カ月間実施した際の実施前後の Mini Mental State Examination (MMSE)、長谷川式認知症スケール (HDS-R) 各得点の変化態様について、対照群 (4 名) との間で比較分析する。(内田)

②「認知文体論的考察」

今回の分析で用いる「認知文体論」の定義・目的を説明し、引き続きライフレビューのテキスト分析例を紹介する。認知文体論は、実際にナラティブと向き合う「読み手」がテキストデータを処理する際の心 (mind) の働きに焦点を当てた質的な分析手法であり、テキストデータの数量的な正確さを重視するコーパス言語学などの量的分析とは異なる。本発表では特に人称代名詞 (「私」と「私たち」) の用法に絞り、テキストに反映されている語り手の意識的および無意識的な傾向を分析・推察する際に、認知文体論による質的アプローチが有効である点を明らかにしたい。(寺西)

③「物語論から見た Summary の意味」

物語論の視点から、寺西とは異なるライフレビュー事例 (Summary) を対象とし、ナラティブの「再構成」が持つ意味を考える。Summary を「テキスト」と見なし、聞き手が「要約」という形式を用いて「語り直す」とき、主体と客体の間にどのような現象が生じるかについて例示したい。また、併記される観察記録が「パラテキスト」の役割を果たす点にも言及する。(奥田)

話題提供 3 児童養護施設経験者の語りについての考察ー心理臨床・ディスコース分析の視点からー (井上靖子・糟屋美千子)

本発表は、児童養護施設経験者 A さんの語りを、井上が心理臨床の視点から、糟屋がディスコース分析の視点から、それぞれ考察したものである。

①「児童養護施設経験者の心理と支えについての一考察ー「語られない語り」への関わりの観点から」

これまで心理療法において、親子関係に傷つきを抱く人々の語りに耳を傾けてきた。そのため多様な育ちの背景を抱えた人々の支えとは何かに関心を抱いた。そこで育ちの場としていた児童養護施設を退所せざるを得ない人々を支えていく力とは何か、拠り所となる関係性や内界を知り、心理的支援の在り方を探ることを目的として、ナラティブを聴きに行くという調査に取り組んだ。そこで本発表では、心理臨床の視点から、対象者の語りとどう向き合い、理解しようとしたのか、さらに質的研究として KJ 法を用いた意義について検討する。(井上)

②「児童養護施設経験者の人生の物語における考え方の枠組みのディスコース分析」

児童養護施設経験者 A さんの自らの人生についての語りを、ディスコース分析の手法で分析し、A さんがどのように現実を捉えているか、その考え方の枠組みを明らかにすることを試みた。本発表では、どのような視点や手順で、A さんの考え方の枠組みを明らかにしていったのかを述べたうえで、言語は人々の考え方を反映するだけでなく、人々の考え方を形作る働きをしているという立場に立ち、A さんが特定の考え方を持つようになった社会文化的要因・認知的要因を検討し、別の見方を再構築するためのヒントを考察する。(糟屋)

**からだやことばで「表現されること」・「表現されないこと」と
それらの受けとめや解釈について考える
～当事者と対人サービス専門職に焦点をあてて～**

企画：河原 智江（共立女子大学大学院看護学研究科）

西村 ユミ（首都大学東京大学院人間科学研究科）

司会：河原 智江（共立女子大学大学院看護学研究科）

話題提供者①：認知症高齢者の家族介護者

話題提供者②：在宅療養児の家族介護者

話題提供者③：鈴木 清美（公益財団法人藤沢市保健医療財団藤沢市保健医療センター）

話題提供者④：有本 信安（株式会社ケアシップ）

指定討論者：南山 浩二（成城大学社会イノベーション学部）

＜企画主旨＞

対人サービス専門職が支援ニーズのある対象者とのかかわるときに、「ことばで表現されるからわかるのか？表現されないからわからないのか？」ということを考えると、企画者らは、「果たして、対人サービス専門職は、対象者から表現されていることのどのくらいを理解できているのか、そして、対象者から表現されていないことであっても理解できることはあるのではないか」などという疑問が沸いてくる。とりわけ、対人サービス専門職は、対象者の「からだ」と「ことば」から、ニーズの把握や対象者自体を理解していこうとする。そのため、対象者の「からだ」と「ことば」に対する対人サービス専門職の捉え方、受けとめ、あるいは、解釈は、対象者と対人サービス専門職の関係性と支援に多大な影響を与えると考える。

対象者として、例えば、重度の障がいを持ちながら療養しているこどもや認知症が進行してことばを用いることがほとんどできない高齢者の場合、対人サービス専門職は、対象者の「からだ」と「ことば」をどのように捉えているのだろうか？

一方、家族も、日常の生活の営みの中で、そのこどもや高齢者の「からだ」と「ことば」をどのように捉えているのだろうか？また、そのこどもや高齢者に対する対人サービス専門職のふるまいや理解（解釈を含む）について、どのように感じているのだろうか？

別の対象者はどうだろうか。

健康づくりの支援ニーズのある青・壮年期、高齢期の対象者の場合、プログラムによって、継続的な支援をするというよりも、初回の面接のみでニーズを把握し、1回のみの支援で終了ということも多い。

本シンポジウムでは、対象者の家族とともに、家族及び対人サービス専門職が、対象者の「からだ」と「ことば」をそれぞれどのように受けとめ、それを解釈しているのかということとを踏まえたのちに、その受けとめや解釈の妥当性と課題について議論したいと考えている。

なお、本シンポジウムでは、対象者、その家族を含めて当事者と言うこととする。

話題提供者①／話題提供者②

認知症高齢者の家族介護者／在宅療養児の家族介護者

話題提供者①、②は、家族であり、いずれも 10 年程度の在宅介護の経験がある。

「ことば」を用いて表現することが難しい認知症高齢者、あるいは、在宅療養児が療養生活を送る中で、家族がそのことをどのように感じているのか、また、「ことば」で表現されなくても認知症高齢者、在宅療養児のその時々状況や気持ちをどのように捉えているのかということについて、エピソードを交えて述べる。また、認知症高齢者、在宅療養児が、「からだ」で表していることについて、それをどのようなことを感じているのか（どのようなことが感じ取れるのか）ということについても、合わせて述べていく。さらに、話題提供者①、②は、対人サービス専門職とのかかわりも多くある。そのため、対人サービス専門職の支援の実際と結果から、認知症高齢者、在宅療養児に対する彼らの受けとめ、理解の程度等について、家族の捉えていることとのギャップも含め、家族の立場からの評価を試みる。

話題提供者③ 鈴木清美（公益財団法人藤沢市保健医療財団藤沢市保健医療センター）

話題提供者④ 有本信安（株式会社ケアシップ）

対人サービス専門職である話題提供者③（保健師）、④（主任介護支援専門員・介護福祉士）からは、対象者が「ことば」で表現することができてもできなくても、あるいは、表現してもしなくても、そのことから何を感じ取っているのかということについて述べていく。そして、そのときに「からだ」をどう捉えているのかについても、可能な限り、追究したいと考えている。

指定討論者 南山浩二（成城大学社会イノベーション学部）

南山は、ナラティブアプローチという観点から、「ことば」で表されること・表されないことについての意味を解説する。また、家族社会学の立場から、本シンポジウムのテーマを踏まえた家族と対人サービス専門職との関係性を分析する。

『質的心理学研究』編集委員会企画シンポジウム

身体を見る・身体に触れる・身体を感じる

企 画：好井裕明（日本大学）、宮内洋（群馬県立女子大学）

司 会：宮内洋

話題提供：前田拓也（神戸学院大学）

細馬宏通（滋賀県立大学）

増田展大（立命館大学ほか非常勤講師）

指定討論：好井裕明

第32回オリンピック競技大会および東京2020パラリンピック競技大会の開催年、すなわちオリンピック・イヤーである2020年に発行予定の『質的心理学研究』第19号の特集は「身体を対象にした、あるいは、身体を介した/通した質的研究」と決定している。この特集の責任編集を務める好井裕明氏と筆者、宮内洋が、本企画シンポジウムを、本学会誌第19号特集と連動させて企画した。今年度の日本質的心理学会第14回大会のテーマは「からだとことば」であるが、これとも連動・呼応している。

学会誌特集の企画趣旨で述べたように、日本質的心理学会も規模が大きくなり、会員も多様性に富むことから、会員同士の専門的なコミュニケーションが困難になっている側面も散見される。そこで、最大公約数として「身体」というテーマを打ち出し、異なるディシプリン、異なる研究視角および方法論から、「身体」に関する研究について、学会大会の場で刺激的な議論を展開することを念頭に置き、学会員のみに関せず、開かれたかたちで本シンポジウムを企画した。（文責：宮内洋）

「自立する障害者」と介助者の身体

前田拓也

地域で「自立生活」——施設を出て、家族による介護にも依らずに暮らす——を実践する身体障害者たちがいる。そして、かれらの日々の暮らしをアシストする「介助者」という存在がある。

介助者にとっての仕事は、まずは障害者たちの日常的な「必要」をもとにした指示を聞き取り、それに可能なかぎり忠実に従い、実現しようとするところからはじまる。（ときに「重度」の）障害者たちの多くは、日々の「自立」した暮らしのなかで、これまでしばしば他者——健常者——に無視されたり先取りされたりしがちであった自分の意思や意向が尊重され、実現されることを重視する。そんな障害当事者たちの自立生活にとって、介助者はあくまでも「黒子」的存在なのであって、可能なかぎり後景に退くべきであり、そこに健常者としての意思が入り込んではいならない。こうした理念は、ときに「介助者は障害者にとっての手足の延長である」（「介助者手足論」）といったかたちで表明される。もちろん、そう「見なす」ことをすれば実現できるといった単純なものはなしではないし、そのようなことが現実的に可能なのかということそれ自体にも、当然検討の余地は常にあるのだが、原則としてまずはそうになっている、そこからスタートしてみるということである。

一方で、「自立生活」という実践と、介助者としてそれにかかわるということ自体が、あくまで障害者運動の一貫であるという観点からすれば、介助者が、ただ透明なメディアとして「生活をアシストすること」のみを求められているわけではかならずしもない。介助者/健常者が、介助という経験を通

して求められているのは、それ以前には「あたりまえのもの」としてあったはずの、自身の身体性の変容を経験することである。

では具体的に、「自立する障害者」との関係性において、介助者/健常者の身体は、どのようなことが求められているのか。とくに報告者自身の「介助者としての経験」を検討することを通して、その一端を考察する。

身体動作を分節化するー再生装置としての ELAN の可能性ー

細馬宏通

身体動作研究においては、身体動作を細かく分節化し、その時間構造をコーディングする作業がほとんどの研究において必須となってきた。そのプラットフォームとして代表的なものに ELAN がある。この発表では、音声と身体動作を分節化し、断片を何度も再生するという作業が動作研究に何をもたらしつつあるのかについて紹介するとともに、この方法の問題点を考える。

身振りはどのように見えるのか——映像史の観点から

増田展大

本報告では「身体を見る、感じる」ことについて歴史的な観点から、とりわけ映像史との関連において再考してみたい。

身体を映像に記録する実践は、1895 年の映画の登場にさかのぼることができる。それと前後して、同時代の科学者たちは、人間の基本的な身振りを写真や映画のフィルムに記録するという作業に熱狂的なまでの態度を示していた。というのも、一秒以下の露光時間を可能にした瞬間写真は、それまでには見たことのない姿勢やポーズの人々を映し出すことに成功したからである。このことが連続写真をはじめとして、映画というメディアの直接の起源となったことはよく知られている。だが、フランスに限ってみても、興味深いことに、J.M.=シャルコーや E.=J.マレーらによる著名な事例のみならず、M・モースや G・タルドなど、医学や生理学、人類学や心理学などの分野を問わずして、映像技術がアスリートや労働者たちの身振りを分解する科学的な分析手段として採用されていた。

つまり、身体の動きをめぐる研究が領域横断的な位置付けを獲得するにあたって、映像技術が果たした役割は決して小さくなかったと言える。では、こうして身体の運動とその映像による分析が結びついたとき、人々の身体に対する認識にはいかなる変化が生じたのであろうか。映像に媒介された身振りを歴史的に検討することから、現在に身体を見たり、感じたりする私たちの実践を再考するきっかけとしてみたい。

文献

細馬宏通 2014 『うたのしくみ』 ぴあ

細馬宏通 2016 『介護するからだ』 医学書院

前田拓也 2009 『介助現場の社会学』 生活書院

増田展大 2017 『科学者の網膜：身体をめぐる映像技術論:1880-1910』 青弓社

当事者とその周囲の関係性をこわし・つくる
—精神科デイケア通所者、トランスジェンダー者、自閉症スペクトラム者の妻の語りから—

企画・司会：町田 奈緒子（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

話題提供者：近藤 真帆（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

話題提供者：町田 奈緒子（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

話題提供者：出口 奈緒子（東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科）

指定討論者：沖潮 満里子（湘北短期大学 生活プロデュース学科）

指定討論者：大倉 得史（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

＜企画主旨＞

近年、「当事者」や「当事者研究」という言葉が頻繁に見かけられるようになった。それまで「当事者」にまつわる従来の研究は、各疾患の診断の迅速化や対応の体系化などには貢献したが、彼らやその周囲の人々が、日々どのようなことを感じながら実際に生活を送ってきたのかに関しては明らかにされてきたとは言い難い。しかしながら、彼らの豊かな生を支えるにあたり、個々の体験世界の様相を描出することは重要であろう。

また、当事者は一人で生きているわけではなく、家族や友人、支援者といった他者あるいは、過去の自分との関係性の中で生きている。そして、その関係性は時にダイナミックに変容したり、解体したりする可能性をも有した力動的なものである。

そこで、本企画においては、当事者およびその周囲の体験世界に迫った研究を、それぞれの登壇者が紹介する。その報告をもとに、各々の重要な関係性がいかにこわれ、またつくり出されたかを考察したい。最終的に、当事者とその周囲に関わる質的研究の可能性や課題点、展望について、フロアも交えて議論する。

＜発表要旨＞

精神科デイケア通所者における＜つくる＞と＜こわす＞の循環

—らせん状の変化について—

近藤 真帆（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

精神障害者支援がもっぱら就労支援になりつつある現在、かつて退院患者の受け皿となったデイケアは不十分な機能として縮小化されつつある。既存のデイケア研究や実践は自らの復権をかけ、政府が要請する数値的治療効果（再入院防止率や就労移行率）の提示に邁進してきた。そしてその過程では、数字で測ることのできないもの——つまり、複雑でとらえがたい当事者のありようやささやかな変化は、不十分な証拠としてそぎ落とされてきた。しかし本来、そうしたもののの中にこそ、豊かで重要な当事者の変化が表れるものではないか。

本報告では、あるデイケアαに通う当事者の語りとエピソードについて提示する。語られた素朴な実感や日常に表れたのは、当事者がデイケアにおける＜つくる＞活動を経て、自らの抱えた病んだ関係を＜こわし＞、今度は自らすこやかな関係を志向し＜つくる＞過程であった。そしてその過程は循

環し、当事者のらせん状の変化に繋がっていく。当日はその豊かな様相の一端を描出・考察することを試みたい。

トランスジェンダーを生きる体験とは：対話的自己エスノグラフィをもとに

町田 奈緒子（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

トランスジェンダーとは、出生時に割り当てられた性別とは一致しないジェンダー・アイデンティティを持つ状態を指す。

従来のトランスジェンダーに関する研究は、量的・悉皆的な調査が中心であり、実際にその状態を日々生きている当事者の実感については十分に掘り取ることができていない。

その課題点を念頭に、筆者は、当事者の語りをもとにトランスジェンダーを生きることの本質を探ることを目的とし、これまで研究を行ってきた。その中で、協力者の体験を真に了解するためには、その分析を行う調査者がどのような存在であるのかを明らかにする必要性に至ったことから、筆者は自身のトランスジェンダーとしての体験を、対話者に語るという形式を取る対話的自己エスノグラフィを実施した。シンポジウムでは、その一端の報告を通じて、トランスジェンダーを生きる体験に伴う、こわし・つくるという側面をあぶり出すことを試みたい。

自閉症スペクトラム（ASD）の夫と結婚した妻の語り

出口 奈緒子（東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科）

これまで ASD 者は対人関係が苦手とされ、結婚生活を営む ASD 者の存在は十分認識されてこなかった。近年、高機能の ASD 者の多くは男女間のロマンチックな関係性に関心を持つことが明らかになり、彼らの約 1 割が既婚者との報告もある。今や彼らにとっても恋愛関係や結婚生活がうまくいくことは重要な人生の課題となっている。

しかし ASD 者の障害特性は長期的な恋愛や結婚といった親密な対人関係の継続に不利に働く可能性がある。実際に ASD 者の妻の結婚満足度の低さを量的に測定した研究や妻の困難を描いた著書が増加している。

シンポジウムでは、ASD 当事者と結婚した妻 15 名の語りを修正版グランデッド・セオリー・アプローチにより分析した結果を報告する。目的は、妻が結婚から現在に至るまでに夫に対してどのような認識の変化があったのか、そのプロセスを明らかにすることである。妻が夫に対して感じる魅力や危機に直面するプロセスの検討を通じて、関係性を「こわし・つくる」といった面に光をあてた考察を試みたい。

医療、介護領域の職種間連携のアクションリサーチ ーリフレクティング・プロセス導入の試みー

企画者名：清田 敦彦

発表者名：清田 敦彦

シンポジウム登壇者名：清田 敦彦

所 属：①京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程

②清田クリニック

役 割：話題提供

抄録本文：

【背景】近年、わが国では、急速な高齢化に対応すべく、医療、介護、福祉を包括した地域のケアシステム構築が整備されつつある。その包括的支援の実現のためには、医療、介護の専門職が一堂に会して話し合い、円滑な運営を目指す必要がある。しかし、現実には、医療、介護、福祉の3者間においては、情報の非対称性、共通言語の不備、認識の違い等が原因となっており、コミュニケーション不全が起り易い状況にある。【目的】このような現況を踏まえ、医療、介護、福祉の異なる分野の専門家の間で率直に多様な意見を出し合えるよう、「リフレクティング・プロセス」(Andersen, 1987)というナラティブセラピーの一種である心理療法を援用した。リフレクティング・プロセスはノルウェーの精神科医で、家族療法家でもあるトム・アンデルセン等によって提唱された家族療法をベースに持つ、心理療法の一つである。従来の家族療法では、ワンウェイ・ミラーの背後にチーム（スーパーバイザー達で構成）がいて、セラピストとクライアント等の面接過程を観察する。リフレクティング・プロセスでも、ワンウェイ・ミラーの背後にチームがいて、面接過程を観察する。そして、セラピストとクライアントがしばらく面接を行った後、チームメンバー同士が面接について話し合いを始め、それをセラピストとクライアント等がともにワンウェイ・ミラーの背後から観察する（これを「リフレクション」と呼ぶ）。我々はこの半構造化された面接法を、医療現場での多職種連携のための会話に実践応用して、その臨床効果を確認することとした。【方法】対象は70歳代、男性の独居透析患者である。2型糖尿病による腎不全で、脳梗塞の後遺症により呂律困難、歩行障害、認知症があり、要介護2である。透析歴は約6年で、現在、週3回の外来通院にて、一回3.5時間の維持透析を施行中である。最近、インシュリンの打ち忘れや、内服薬の飲み忘れが目立つようになってきた。また、ふらつきがひどく、特に透析後は帰宅してから転倒する事が度々あった。本症例に関わっている医師、看護師、ケアマネジャー、ヘルパー等のスタッフは一致して、もう独居の限界で、安全のためにも施設入所が望ましいと考えていた。そこで、患者の本心や、関わっているスタッフ各々の考え方の違いをみんなが共有し、受け入れることができるよう、リフレクティング・プロセスの実践を行った。まず、本症例の担当の医師、看護師、訪問看護師、ケアマネジャー、ヘルパー等の医療、介護の専門家が一つの部屋に集まり、医師と患者グループ（C）と、多職種で構成するチーム（A）の二つに分かれた。そして、CとAの間に衝立を置き、互いの話は聞こえるようにするが、視覚情報は遮断した。まず、患者の現状を医師が聞き出し、それをAがじっと聞いた。具体的に医師は患者に、何か困ったことはないか、あるいは、今後どのように暮らしたいと思っているのか、といった事を尋ねた。次に、AがCの会話についてのコメントなどを自由に話し、その間、Cはじっと静かにその会話を聞いた。このような会話を2往復繰り返した。なお、本研究を開始するに当たり、対象患者及び本研究に関わる多

職種関係者に対して、研究の趣旨と内容について文書と口頭にて説明した。その上で、研究協力の同意を得て、同意書への署名を得た。協力は任意で、いつでも辞退は出来る旨、説明している。【結果】半構造化された会話により、本症例の本音、即ち自分としては絶対に施設入所は嫌で、ずっと自分の家で暮らしたい、という思いがあらためて、医療、介護者にもよく分かった。一方、医療、介護者の患者を思う気持ちが患者にも伝わり、普段、介護者に見せないような従順な一面を見せるようになった。また実践後に施行した参加者へのアンケート結果から、参加者同士の考え方の違いについての理解が、リフレクティング・プロセスにより、互いに深まったと思われる。多職種チームの各当事者が一堂に会して発言することにより、日頃の思いを関係者の前で発露することが出来た。そして、このような半構造化された面接法により、患者の積極的でポジティブな発言の端緒になり得るということが見出せた。さらに、参加者の多様な考え方を、各々が改めて知ることが出来、多職種メンバーが互いを受け入れ易い環境が醸成された。今回の症例において、多職種チームの会話を間近で聞くことにより、患者は今まで気づかなかった、医療、介護スタッフの自分に対する心配、思い遣りに気づいた。すなわち、医師－患者グループと多職種チームの間での会話の往還にともない、患者の認識に変化がみられ、問題解消に向けて事態が前進していることが確認出来た。【考察】リフレクティング・プロセスは従来の家族療法とは異なり、介入によって変化を導こうとしないのが特徴である。クライアントがセラピストと会話をしたり、リフレクションを聴いたりする中で、クライアント自身が様々なコメントを心の中に取り入れ、熟考し、そこから新しいアイデアを得ることで、クライアントがみずから変化の引き金を引くと想定されている。本症例においてもみずから、安否確認のためスタッフが訪問する時間帯には在宅すると宣言し、我々周囲のスタッフを驚かした。なお、リフレクティング・プロセスの先行研究から、その臨床的意義を5点に整理できる。第一に、話題の肯定的な方向への「リフレーミング」が期待出来るということである。話し手は聞き手を目前にしているのも、その存在を意識し、聞き手に対する敬意を表するために、話し手が話題の内容を、肯定的にリフレーミングして発話するのである。第二に、新しい視点が得られ、「メタ・ポジション」の効果が期待できる。リフレクティング・プロセスにおいては、観察する側とされる側の交代という、構造の変化それ自体が、参加者に新しい視点を生じさせるということである。その新しい視点が「メタ・ポジション」と呼ばれるものである。第三の意義は、「内的会話と外的対話の往還」による内省の深化である。リフレクティング・プロセスでは、会話というものを、聞き手となることによって起こる自分の内面との対話（内的会話）と、話し手となることによって起こる外側にいる他者との対話（外的対話）の2つに区分して捉え、その間の両者の行き来を意味する言葉として、リフレクティング・プロセスと表現している。この臨床的意義のポイントとなるものは、内的会話と外的対話の往還によって、複数の視座が生まれ、そして内省が深まり、そこから問題の解決に寄与する、様々なアイデアが生まれるということである。第四の意義は、「ストーリーラインの変化」である。これは会話の主題が1つに収斂して、膠着状態になることの回避が期待出来るということである。第五の意義は、固定されがちな役割や関係性の変化である。本症例においては、これらリフレクティング・プロセスの五つの臨床的意義のうち、第一から第四までが確認出来たが、医療と介護の相互理解と連携に、この心理療法の応用の有用性が示唆された。

『質的心理学フォーラム』編集委員会企画シンポジウム

立場を異にする者同士のかかわりの質的研究

企画者：平本毅

谷美奈

川島理恵

発表者：五十嵐素子（北海学園大学）

高梨克也（京都大学）

岩隈美穂（京都大学）

谷美奈（帝塚山大学）

平本毅（京都大学）

司会者：川島理恵

企画趣旨：

わたしたちは、たいいていの日常の出来事を経験するにあたって、自分とは立場を異にする人々と交わる。通勤電車の中で高齢者や妊婦に席を譲り、駅からの途上で立ち寄ったコンビニエンスストアでは店員と言葉を交わし、職場では上司や部下と共に働き、喫茶店で取引先の社員と打ち合わせ、帰宅すれば家族の誰かを相手に仕事の愚痴をこぼす、といったように。一方で、こうした立場を異にする人同士の関係を調整したり、間をとりもったりすることが、しばしば解決すべき社会問題として世間に認識される。移民の受け入れ体制の整備が議論されたり、多世代交流型の住宅が注目を浴びたり、女性専用車両が作られたり、といった具合である。本シンポジウムでは、研究あるいは実践上「立場を異にする者同士のかかわり」に携わっている研究者を集めることを通じて、これに適切な「質的な」一記述を与える。「教師-生徒」「医療ボランティア-医療従事者」「多職種混合チームにおける職種間」などの「立場の違い」や、そうした「立場を異にする」人々の間をつなぐ「居場所」などの実践の事例が報告され、議論が行われる。議論の焦点となるのは、①「立場を異にする者同士のかかわり」はどのように行われているか、②「立場を異にする者同士のかかわり」を生じさせる活動にはどのようなものがあるか、③「立場を異にする者同士のかかわり」からどんな価値が生じるのか、の三点である。この議論の積み重ねを通じて、現代社会における人々の「立場の違い」をめぐる実践の一端に輪郭を与えることが、シンポジウムの目的となる。また、「立場を異にする者同士のかかわり」を記述するにあたってどの方法が適するか、方法論の議論も行う。

「何をどう学ぶか」をデザインするためのエスノメソドロジー研究の視点

——「対話的な学び」はいかに「立場の違い」を通じて生まれるのか

五十嵐素子（北海学園大学）

発表者は、社会学の理論であり質的研究方法の一つであるエスノメソドロジーを専門とし、学校教育における学習活動の成り立ち方について関心を持ってきた。本発表では、まずはエスノメソドロジー研究の立場から、学習活動の成り立ちかたを理解するための視点として「学習課題を遂行する主体」を誰に設定しているのか、また学習活動における「生徒の役割行為」がどのように配分されているのか、という視点を紹介する。またこれらの視点を踏まえ、いかなる教育的ねらいのもとで「立場の違い」が生じており、またそこで新学習指

導要領で目指されている学びの一側面である「対話的学び」がどのように生み出されているのかを検討し、学習活動のデザインに関してより理解を深めることを試みたい。

多職種チームにおける協働のための工夫と困難
—日本科学未来館展示制作チームのフィールド調査から

高梨克也（京都大学）

「立場を異にする者同士のかかわり」の事例として、科学館における展示制作のための多職種チームを対象としたフィールド調査を紹介する。多職種チームは「諸刃の剣」である。一方で均質なメンバーだけでは達成できないであろう目標を達成できる可能性が期待されるものの、他方では異なる背景や価値観をもつメンバー間でのコンフリクトやディスコミュニケーションなども生じやすい。そのため、今回の多職種チームにおいては、こうした潜在的な問題を回避するため、メンバー間での「懸念」や「想像」の共有を図るためのさまざまな工夫が用いられていることが明らかになってきた。しかし、こうした実践上の工夫にもかかわらず、やはり多職種間でのコンフリクトを完全に避けるのは難しい。そこで、本発表では、コンフリクト場面におけるメンバーのやり取りを対象に、技術レベルや組織レベルでの「異文化」コミュニケーションという観点からの考察を行っていく。

「どのように立場の異なる人々が医療にかかわるか、についての一考察：
『第三の立場』としての病院ボランティアの役割と貢献に着目して」

岩隈美穂（京都大学）

今日では「ボランティア」という言葉はすっかり日本社会で市民権を得ており様々な種類があるが、医療専門職者たちに交じって活動をする「病院ボランティア」もその一つの形態である。本研究では医療者と患者（とその家族）を中心に語られがちな医療をめぐるコミュニケーションの中で、非医療者である病院ボランティアに焦点を当てた。20年以上続いているNというボランティアグループの立ち上げ、継続の秘訣や今後の課題、病院ボランティアが医療者でもなく患者でもない「第三の立場」から医療に関わり、患者（やその家族）を支える様子をエスノグラフィーとインタビューを通して明らかにした。またとかく病院という環境の中では後回しにされがちな「遊び」や「楽しみ」が医療に与える影響や貢献の可能性について考える機会としたい。

地域の居場所と「立場を異にする者」同士の交流

谷美奈（帝塚山大学）・平本毅（京都大学）

「立場を異にする者」同士を結びつける社会的な試みとして、各種の地域の「居場所」（コミュニティカフェ、まちの縁側、地域の縁側等々とも呼ばれる）が増えてきている。「居場所」は高齢者、若年者、子育て中の親、精神障害者などの地域住民が集まり、自由な時間を過ごしつつ交流する場所である。多様な背景をもつ人々が集まるために、居場所ではしばしば、「立場を異にする者」同士を結びつける工夫がなされる。あるいは、「立場を異にする者」同士が関わったために、新たな居場所のサービスや価値が作り出されたりもする。本報告では居場所の現状と歴史、調査結果の紹介を行なった後で、具体的な居場所における「立場を異にする者」同士のかかわりの事例を報告する。

当事者と倫理と研究者：医療分野における質的研究の貢献

企画者：福田茉莉（島根大学医学部）

司 会：日高友郎（福島県立医科大学医学部）

話題提供者：渡邊卓也（東京大学医学部）

松島 淳（佐賀大学医学部）

日高友郎（福島県立医科大学医学部）

福田茉莉（島根大学医学部）

指定討論：サトウタツヤ（立命館大学）

【企画概要】

本企画は、「当事者」と「倫理」をキーワードに医療分野で活躍する若手研究者に話題提供をしてもらい、医療分野における質的研究の位置づけを探索するものである。昨今では、医療看護分野における質的研究を用いた研究実践が社会的にも要請されており、当該学問領域にて、質的研究を実践する研究者が増加している。重大事件の発生や研究倫理の進展により、大学・研究機関において倫理に関するガイドラインの厳密性が高まるなか、臨床研究に関する信頼性の回復のためには、倫理指針の遵守だけでなく社会的受容の観点からも議論が必要とされている。とりわけ、医学系研究に関する倫理指針は、職業倫理を大前提とし、研究対象者へのリスクとベネフィットの配分、インフォームド・コンセント、社会的弱者への配慮、研究の質および透明性の確保等が重要な課題となっている。だが一方で、質的研究による研究実践は、侵襲を伴わない、あるいは深刻な健康被害や有害事象を引き起こす可能性が低いと見られるため、研究者の不正行為に関する事項（ねつ造、改ざん、盗用）等、研究一般に関するものを除き、研究倫理が積極的に議論される機会は少ない。

本企画では、質的研究の理論的中核をなす現場性や当事者性の重視と倫理の関連性について、先生方に自由に議論してもらい、これらの知見から医療看護領域における質的研究の可能性とその貢献について再考する。指定討論者にはサトウタツヤ氏（立命館大学）を迎え、心理学史および科学社会学の立場からコメントを頂戴する。

【話題提供者について】

渡邊卓也氏（東京大学医学部）：

所属機関の研究倫理審査に携わるひとりとして、研究倫理審査の最新動向を報告する。いわゆる医学系研究は、時に研究対象者への身体的な侵襲を伴い、医学的妥当性が未確立な介入が施されることもある。当然ながら、研究対象者への倫理的配慮はたいへん重要とされる。一方、人文・社会科学を含む非医学系研究では、研究対象者の個人情報保護やインフォームド・コンセントの適正さのみが、研究倫理審査の論点となりやすい。医学系と非医学系どちらの研究倫理審査にも携わった経験から、双方の相違（質的研究の取り回しの違いなど）にも触れる。

松島淳氏（佐賀大学医学部）：

心理臨床の実践において、まず考慮しなければならないことは職業倫理である。専門業務に携わる専門家として個人が自己規律的に真摯に対応しなければならない。さらに、臨床実践を研究として社会

に広く発信する際には、専門家としての倫理と研究者としての倫理の双方に配慮し、クライアントと向き合う必要がある。カウンセラーでありながら、研究者として臨床実践に携わる日々の取り組みについて「倫理」の観点を組み込みながら報告する。

日高友郎氏(福島県立医科大学医学部)：

神経難病者と協働しての研究と実践を展開する中で生じてきた、困難や疑問に焦点を当て、「倫理」の観点から話題提供を行う。重篤な神経難病である筋萎縮性側索硬化症とともに生きる病者に密着し、ライフの厚い記述を蓄積することは、「当事者だから語れること(語れないこと)」と「研究者だから語れること(語れないこと)」についての考察を深める機会ともなった。これらは研究理論・方法論に関わる問題であると同時に、研究倫理に関わる問題でもある。本報告では適宜、具体的な事例を提示しながら、「質的研究と倫理」についての議論を深めることを試みたい。

福田茉莉(島根大学医学部)：

医師をはじめとする医療従事者と患者との関係性は必ずしも対等とは言えない。医療機関での共同研究において、患者を対象としたニーズ調査を実施する場合には、調査結果をフィードバックすると同時に、調査協力者の権利を擁護し、不利益が生じないように最大限の配慮をする必要がある。特に、社会的マイノリティを対象とする実践では、個人的な問題あるいは社会制度やシステム上の問題と認識されることが強く、調査協力者に利益が直接的に還元されるに至るのが困難なケースがある。本報告では、医療機関と共同で実施した生活困窮を抱える地域住民を支える医療に関する研究実践から、医療者と患者と研究者という三項関係における「倫理」について議論したい。

人生 100 年時代のキャリアデザイン

企画・司会者：豊田香（東洋大学・非常勤）

話題提供者 1：大井葉月（東京大学大学院・博士後期課程）

話題提供者 2：市川章子（一橋大学大学院・博士後期課程）

話題提供者 3：豊田香（東洋大学・非常勤）

指定討論者 1：牧野篤（東京大学）

人生 100 年時代の長寿化社会における職業選択や働き方の選択など、当事者視点のキャリアデザインについて本シンポジウムでは考えてみたい。人生 100 年時代においては、一般的に 20 歳前後でスタートする職業キャリアは、約 45 年から約 55 年へと 10 年以上伸びるものと予想される。その間には、第 4 次産業革命（IoT、AI、ロボットなど）による産業構造の変化やグローバル化に伴う働き方の変容が予想される。このような社会において、人が人らしく、心身ともに健康で、職業にやりがいを見出しつつ、幸せに高齢者へと年を重ねる職業キャリアのあり方とはどのようなものなのだろうか。従来までの「学校―就労―余暇」という 3 ステージのフロントエンドモデルにかわる、「人生 100 年時代のキャリアデザインモデル」のようなものが必要だとすれば、それはどのようなものなのだろうか。このような問題意識にたち、本シンポジウムでは、個人の職業選択や働き方の選択について、TEA 分析を用いた個別具体的な 3 つの事例からこのテーマにアプローチしてみたい。

話題提供者 1、大井葉月氏はタイトル「転職をした女性のキャリア選択プロセス―働くことの意味に注目して―」について発表する。研究背景には、働く若手女性が新たな労働資源として注目されているものの、結婚・出産女性による就業継続断念は未だ数多く、女性が働きやすい環境整備が依然必要な状態であることがあげられる。就職後 3 年前後で離転職を行った女性たちの語りからは、転職理由を、挫折やミスマッチといったネガティブなものではなく、自らの成長のためのものと肯定的に捉え、理想としていた働き方を諦めることは、妻・母の役割を果たすために必要であったなどと、その選択に意味付けが行われていた。その職業選択の経路は、パートナーとの関係や子育てをしたいという願いに影響を受けながら、働くことを通した自己実現と、女性役割を果たす働き方に自らを合わせていくことを行ったり来たりすることが示唆された。柔軟な職業選択や働き方選択が今後のキャリアデザインにとって重要ではないかということ述べる。

話題提供者 2、市川章子氏はタイトル「越境する人々のキャリア形成を考える」について発表する。昨今、留学生受入れの推進や日本での就職促進プログラム等の環境支援が進められている。本研究は、実際に日本企業に就職した 3 名の外国籍社員が日本企業に定着する・定着しないプロセスを TEM によって明らかにすることで、外国人留学生の就職をめぐる支援可能性を探るものである。3 名の語りからは、①母国系企業への転職、②日本企業への転職、③現状維持の三つのモデルと、境界線のないキャリア形成観、日本企業での差別体験、未知の日本企業文化への遭遇という特徴が見いだされた。日本で教育を受けた高度人材が企業に定着するためには、日本人社員とは異なる文化資源や価値観を有する人材であることと、外国籍社員の長期的なキャリアデザインにもっと意識を向ける必要があるのではないかということ述べる。

話題提供者 3、豊田香氏はタイトル「大学院リカレント教育によるトリプルループ学習」について発表する。一定の職業経験を積んだ多様な職種や年代のホワイトカラーの社会人が、大学院の専門職課程（修士課程）と博士課程を経て科学技術の専門知識を知的資源とすることで、職業キャリアを組

み替えていくという「トリプルループリカレントモデル」というキャリアデザインについて述べる。具体的には科学技術（理論や思考法）を学ぶことで、これまでの働き方の問い直しがおき、科学技術を吸収しつつそれを共同体に還元することに喜びを覚え、そこに新たな職業的アイデンティティを見出すという事例について述べる。

指定討論者には、文部科学省「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会（平成 23 年 9 月－平成 24 年 3 月）」委員で、現在、中央教育審議会生涯学習分科会委員である牧野篤教授（東京大学）を迎える。当分科会では少子高齢人口減少社会における学校改革や高齢者と子どもなどの多世代交流を基本としたコミュニティづくりなどについても議論している。3 名の発表をふまえつつ、社会人が超高齢者へとなるまでのキャリアデザインについて、より広い視点から質的心理学的に議論する上での視座を提示してもらおう。参加者の皆さんともこのテーマを一緒に考えてみたい。

「治癒せざるものの治療のために」―病い経験を捉える新しい概念生成に向けて

企画・司会：坂井志織（首都大学東京）

話題提供者：鈴木智之（法政大学）

細野知子（首都大学東京）

菊池麻由美（東京慈恵会医科大学）

指定討論者：やまだようこ（京都大学）

企画趣旨

近年、疾患の早期発見や治療効果の高い薬剤による生存率の向上、再生医療などの医療革新にとともに、治ることはないが生涯付き合う疾患が増えている。完治を目指す「治癒」とは異なる、疾患との共生が進む疾病構造の変化は、患者の経験も多様化・複雑化させている。他方で、それを的確に捉える概念は医療分野においていまだ構築されておらず、従来の「治る―治らない」という視点で議論されることが多い。適切な概念がないことが、医療者の視点を固定化させ、医療者―患者間の理解を妨げていることも指摘できるだろう。

そこで、本シンポジウムでは治癒をゴールにしない医療の在り方を提唱している C.Marin の思想を社会学者の視点から提示する。次いで、疾患を生きる具体的な事象として、糖尿病の患者経験と筋ジス患者・看護師の経験を示す。これらの話題提供から、「治る―治らない」とは異なる意味生成を当事者の視点から立ちあげ、新たな概念の生成に向けての議論を展開したい。それにより、治らない疾患へのケアの方向性を転換させる動きを作りたい。

話題提供 1 病いの語りにみられる固有の時間性 ―「時間と持続」：鈴木智之

病いの語りは、しばしば、「真実が顕わになった」という感覚を抱かせる。それまで覆い隠されていたこと、あるいは経験されていたがはっきりと言葉にされていなかったことが、「病いの現実」を契機として、私たちの前に明らかにされようとしている。病いの経験が呼び起こす、この「真実性の感覚」とは何だろうか。フランスの哲学者であり、自らもまたリューマチ性の多発性関節炎を伴う自己免疫疾患を患うクレール・マランの著作を読んだとき、あらためて私（鈴木）に突きつけられたのはこの問いであった。彼女の闘病記と言ってよい『私の外で』、および臨床哲学の書である『熱のない人間』の翻訳を通じて、私は、ここに露出しようとしている「真実」はいったい何なのだろうと考えていた。まだクリアな答えが出ているわけではないのだが、ひとつの手がかりは「時間性」にあるのではないかと思い始めている。「健康」とはひとつの時間表象であり、それはそれである種の現実性を帯びているのだとしても、生の実相のほんの一面しかとらえきれていない。そして、病いに対処する技術としての医療も、健康な人の時間感覚の中で思考され、実践されているあいだは、病む人の生に寄り添う技にはなりえない。そのことを、病いの語りは、その固有の時間性とともに訴えかけているのではないだろうか。

「病いは新しいリズムを呼び込む」、「病いが生活を加速させる」。「生活は綻びていくだけである」、「別の生が現れる。(…)それは過去のしるしを消していく」という言葉（『私の外で』より）。なんということもなく書き込まれたこれらの言葉が何を伝えようとしているのか。それは「健康」という名の「時間」を生きている者には、容易に想像できない。そして、困ったことに、医療実践もまた、このもうひとつの生の様相を顧慮しきれぬまま、健康な人の尺度をもって患者の時間を計ってしまう。「回復の時間は統制しえない。体と魂は固有の時間を必要とする。その時間を数量化したり規格化したりすることはできない」とマランは

言う（『熱のない人間』より）。「治療」を「治癒という目的」から解放せよという彼女のメッセージは、生の時間性を根本的に別様のものとしてとらえ返せという訴えとして受け取ることができる。本報告では、「時間と持続」の問題に焦点を絞って、クレール・マランの言葉を紹介する。

話題提供 2 糖尿病外来診療場面にみられる病い経験の現象学的分析：細野知子

生活習慣病でもある2型糖尿病の治療は“生活そのもの”とも言われる。食事・運動を中心に生活習慣を改善して維持しなければならないが、自覚症状が乏しいため診断されても病識を持ちづらく、治療中断者も多い。糖尿病が進行すれば重篤な合併症を引き起こすため、医療者は患者教育を通じて日々の“自己管理”の重要性を説いている。しかし、理解していても治療を実行し続けることは難しい場合も多く、医療者—患者間には齟齬が生じやすい。そのため、“治癒せざる”2型糖尿病の“治療”のためには、両者間にある齟齬を超えてその病い経験を捉える新たな視座が必要である。

2型糖尿病患者の外来診療の場面では、患者—医療者間で、専門的知識と生活経験とが対立したり、すり合されたりしてさまざまな関係を結んでいた。そして、定期的な外来診療のやりとりは、患者のその後の病い経験を意味づける一つの出来事になっていた。本発表では、定期的な外来診療における専門的知識と生活経験を媒介したやりとりに着目し、そこから見える病い経験の現象学的記述を提示する。両者は互いの立場の違いを踏まえて診療を展開しつつも、習慣化されている定期診察では、時に各自の立場を超えたかかわりや、阿吽の呼吸で進められるやりとりのなかで、専門的知識と生活経験とを駆使しながら治療を実践していた。専門的知識／生活経験、医療者／患者の境界を跨ぎ越したり、その境界がぼやけるような診療場面の開示から、治療実践を“自己”に収斂させがちな糖尿病ケアの方向性を問い直し、その病い経験を眼差す新たな視座を見だしていく布石としたい。

話題提供 3 長期療養病棟において患者と看護師が目指す「元気」：菊池麻由美

本報告では、進行性の神経筋難病患者の長期療養病棟でのフィールドワークの結果を示し、ある病棟の患者と看護師の間で共有されていた「治る—治らない」「good control—bad control」とは異なる指向性を紹介したい。

急性期病院でも勤務したことのある看護師は「今までいたところは病気が、もちろん筋ジスも病気なんです、一応はゴールは家に帰るとか、違う施設に行くとかというのが、私が以前勤めた経験は多いんですが、そのゴールはもうないという言い方は変だけど、ここなわけですね。ここの生活に私たちが合わせているというんですかね」と語った。彼女は「病気」ではない患者の「帰る」「行く」ではないもの、つまり、治癒して、あるいは、病状が回復して退院することではないものを目指して「ここの生活に合わせている」と言う。また、ここの生活をしている、ある患者は「この病気は治らない」と認識し、「このまま現状を維持していく」ことを願って療養していた。彼は「達成感」、[未来に向けて前向きであること]、[充実して自由に生活すること][食べられないものが食べられるようになること]、[いつも、元気でいられること]を大切にしながら生活し、現状を「元気ね、100%」と語った（鳴嶋ら：2017 発表予定）。彼が維持したい「元気」な現状は、必ずしも、医療者の捉える病状管理と同じではない。

ある療養介護病棟の「ここの生活」で、患者や看護師が目指していた「元気」を手がかりにして、療養において指向しうる「病気」の治癒や管理とは異なるものを考えてみたい。

研究交流委員会企画シンポジウム

質的心理学は「越境する知」たりえるか：理論という視点から考える

企画者名	東村知子・宮本匠
司会・話題提供	東村知子 京都教育大学教育学部
話題提供	宮本匠 兵庫県立大学
話題提供	室田信一 首都大学東京都市教養学部
指定討論	南博文 九州大学人間環境学研究院

シンポジウム要旨

質的心理学に携わる研究者は、自らにとって切実な問題を追求する中で、既存の学問領域の境界を越えた「越境する知」（見田，2006）を求め、あるいは切り開こうとしているのではないだろうか。この「越境する知」にとって、「理論」は不可欠であると私たちは考える。私たちが取り組もうとする問題の多くは複合的なものであり、さまざまな理論的視点から捉えなければおそらく解けない。

私たち企画者は、これまで哲学や社会学の理論を学び、そうした視点からフィールドの現象を捉えようとしてきた。しかしそのような研究は、とするとデータを軽視していると見なされ、また自分でも、その理論を使って分析することになんの意味があるのかと疑問を抱くこともあった。そこで本シンポジウムでは、防災、福祉、教育など異なるフィールドに身を置く研究者が、研究における理論の位置付けについて議論することを通して、「越境する知」にとって必要な理論とは何かを、フロアの方々と共に考えていきたい。

質的心理学をめぐる私の問い

東村知子（京都教育大学）

質的心理学には、決まった方法も、誰もが共有している（メタ）理論もない。研究テーマやフィールドもさまざまである。そこが魅力である反面、特有の難しさを生み出しているように感じる。私が学生時代に教員から指導されたのは、哲学や社会学の文献を徹底的に読み込むこと、フィールドに参加することの二つであり、質的なデータをどう分析するかについてはほとんど何も教えられなかった。当然、卒業論文は散々な出来だったが、いま思えば、どんな研究にも適用できる万能な方法なるものは存在せず、方法は自身の問いに格闘する中で自ら生み出さなければならないものなのだということを、身をもって学ぶことができた。では私はどのようにしてデータを「分析」してきたのか。結局私がしてきたのは、データを、これまで読んできた理論の言葉や概念を用いて自分なりに説明する＝語り直すことだったのだと思う。そもそも何かが問題として見えてくるということ自体、そのような理論を学んできたことから切り離すことはできない。ある理論的視点を持ってフィールドに入った研究者が、そこで「問題」を見出し、ある理論を通して考えることで理解できたと感じる。そこまではよいかもしれない。しかしその理解を、同じ理論を共有していない他者に伝えることは可能なのだろうか。たとえ可能だったとして、そうした語り直しはどのような学問的意味を持ちうるのだろうか。本報告では、私自身の経験にもとづき、質的心理学の方法と（メタ）理論、シンポジウムのテーマである「越境する知」について、これまで感じてきた疑問や考えてきたことをお話ししたい。

社会福祉学研究者の立場から

室田信一（首都大学東京）

社会福祉（もしくはソーシャルワーク）とは他の学問の理論を参考にしながら発展してきた学問（ないしは実践領域）と言える。なぜなら学問の前提として現場の実践があり、実践に携わる実践者（専門家）の存在があり、その実践を説明し、解釈し、時には批判し、伝達可能かつ応用可能な知識体系として構築してきたものが社会福祉学として体系化されているからである。したがって、社会福祉学にとっての理論とは、社会福祉独自の理論ではなく、社会学や心理学、哲学、教育学、政治学などの他学問における理論を借用してきたものである。

本報告では、第一に、社会福祉学がこれまでに借用してきた主要な理論を整理し、それらの理論を借用する必要性について、社会福祉の歴史とともに振り返る。社会福祉の歴史は専門性の追求の歴史であり、それは科学性の追求の歴史と整理することもできる（三島 2007）。専門性の低さにコンプレックスを抱き、そのために専門性に固執した結果、相反する理論を借用してきたという矛盾した過去がある。そうした経緯を参考に社会福祉学にとっての「理論」の意味を考える。

第二に、日本の社会福祉学が学問としての固有性を追求してきた歴史を「人名理論」と国家資格化を参考に整理する。日本の社会福祉学は過去の研究者の固有名を冠した理論を伝統的に参照しており、それらの理論が追求した固有性について整理する。また、1985年に国家資格として社会福祉士が誕生したことで、全国で養成カリキュラムに沿った教育が提供されるようになった。そのことが学問に与えた影響について検討する。

第三に、2014年に改定されたソーシャルワークのグローバル定義を参考に、社会福祉における専門知の位置付けについて、新定義から新たに加わった在来知との対比で検討する。

最後に、上記の議論を踏まえて、社会福祉学の固有性と社会福祉学に求められる理論について、報告者の見解を述べる。

アクションリサーチと＜越境する知＞

宮本匠（兵庫県立大学）

社会学は、社会現象のさまざまな側面について、領域横断的に分析し統合する学問、すなわち＜越境する知＞として展開してきたこと。ただし重要なことは「領域横断的」であることではなく、「自分にとってほんとうに大切な問題に、どこまでも誠実である、という態度」であること。それゆえ、「領域横断的」であること、「越境する知」であることを、「それ自体として、目的としたり誇示することは、つまらないこと、やってはいけないこと」であり、「領域横断的」であるのは、本当に切実な問いを追求する結果としてのみあらわれるのだという見田宗介の主張に異論はないだろう。しかし、現象を「知りたい」ではなく、「変えたい」ことを志向するアクションリサーチにおいては、＜越境する知＞は「領域横断的」であるという学問側の境界を越える問題よりも、むしろこれまで知の対象であった人々が知の主体となるという、研究主体と対象の関係における「越境」をどのように捉えるのか、どれだけこの構造に自覚的になることができるのかが重要である。そもそも、人間科学は、人間が人間自身を研究するという広い意味での当事者研究である。人間科学においては、この自己言及の構造のために、「知ること」と「変えること」は不可分の関係にある。だから、人間科学は、多かれ少なかれアクションリサーチとしての性格を有していると言える。このような観点から、本報告では、理論的関心をもった研究者と、現場の実践者がともにリサーチすること、すなわち協働的实践の可能性について考えたい。この協働的实践においては、得られたデータの位置づけ、価値も、「知りたい」をベースに展開してきた従来の科学におけるものとは、全く異なる相貌を帯びることになる。研究主体と対象の関係における「越境」を深く自覚することが、アクションリサーチを賦活する鍵である。

ライフストーリーの映像化 ～ビジュアル・ナラティヴとしてのメモリアル・アニメーションの可能性～

企画・指定討論 家島明彦（大阪大学）
司会・指定討論 やまだようこ（立命館大学）
話題提供 横山隆俊（株式会社サイドピーク）
話題提供 長谷川泰二（株式会社サイドピーク）
話題提供 赤井孝美（米子ガイナックス）

企画趣旨

近年、質的研究における映像化の可能性に対する注目が集まっている。そこで本シンポジウムでは、ライフストーリーの映像化の可能性について検討する。具体的には、人生（ライフストーリー）における大切な思い出をアニメーションの形式で再構成（映像化）する「メモリアル・アニメーション」という試み（プロジェクト）に焦点をあて、その製作過程や実際の作品を紹介しながら、ビジュアル・ナラティヴとしてのメモリアル・アニメーションの学術的な意義や現代社会における可能性について検討する。

この「メモリアル・アニメーション」というプロジェクトは、震災など予測不可能な事態に直面することが多い長寿社会における人生の意味づけ直しの手法開発であると同時に、コンテンツによる地域活性・地方創生の側面も有しており、多くの可能性を秘めている。話題提供者に、発案者の横山隆俊氏、映像化チームを率いる赤井孝美氏、コンテンツビジネスの側面を支える長谷川泰二氏を迎え、「メモリアル・アニメーション」の学術的な意義と現代社会における意義、今後の展望などについて、フロアの参加者も含めた全体議論（パネルディスカッション）を実施する予定である。

話題提供1：メモリアル・アニメーションの概要、現状、今後の展望

横山隆俊（株式会社サイドピーク）

本発表ではメモリアル・アニメーションの概要、現状、今後の展望について報告する。インターネットの普及により、従来は非常に高価であった自伝本の作成が安価になり、ここ数年団塊の世代を中心に流行の兆しを見せている。自伝本は、書き手にとっては、自分が生きた時代や自らの生き方などを後世に残すための手段として非常に有効である。一方、読み手にとっては、若い活字離れ世代が多いこともあり、よほど縁の深い相手でない限り他人の自伝を一冊読み切るといのはなかなかハードルが高い作業となる。そこで長い人生の中で「一番伝えたいこと」を抽出して映像化して伝えることにより、託される側の負担も軽くなり、託す側も本当に伝えたいことを伝えることができるのではないかと考え、メモリアル・アニメーションを考案した。過去の映像化は、実写の場合だと時代設定に伴うセットの用意から行うことが必要になり、非常に高価になってしまうこと、当時の資料が残されていることが少ないことなどから、表現方法としてアニメーションが非常に優れている。わかりやすく物語化することが可能であるため、企業の創業者が自らの経営理念を社員に伝えるためのツールとしても役に立つと考えている。また、退職する大学教授が自らの研究人生の足跡を後進の研究者に伝える手段としても有効であると考えている。自伝と言えば一般的に「活字」を想像することが多く、自分の人生をアニメーションにするという手法は、まだ普及していないため、現在はアニメーションがいかに自分の人生をドラマチックに伝えるかを、まず知ってもらうことに注力して活動している。

話題提供2：メモリアル・アニメーションの制作過程、映像化のコツ

赤井孝美（米子ガイナックス）

本発表ではイラストレーター、企画プロデューサーの立場からメモリアル・アニメーションについて言及する。これまでアニメ、ゲーム、実写映画など数々の映像作品を手がけてきた経験を踏まえて、特定の個人の人生をアニメーション化することの意味や難しさ、コツや注意点などを検討してみたい。また、メモリアル・アニメーションの制作過程についても説明し、写真やインタビューからアニメーションのイラストをおこしていくことについても考察を試みる。



話題提供3：中小企業におけるメモリアル・アニメーションの可能性

長谷川泰二（株式会社サイドピーク）

本発表ではメモリアル・アニメーションが個人のみならず組織（とくに中小企業）にとっても有用である可能性について発表する。一般的に、中小企業の経営者にとって創業の理念が受け継がれていないことは大きな悩みであり不安でもある。経営ノウハウやマネジメント能力と同等、もしくは、それ以上に、強い信念や情熱がなければ、中小企業の経営を継承していくのは難しいからである。故に中小企業にとって人材（後継者を含む）の育成は常に行わなくては重要な課題である。しかし、多くの中小企業では、社員の定着しにくさ、時間的にも資金的にも余裕のない中で思うように人材育成ができないもどかしさをかかえている。とくにベンチャー企業においては顕著だと思われるが、現在の勢いや業績だけを見て入社してくる若者に、どのように創業当時の熱い思いを伝えていけばいいのか、というのは中小企業の経営者が共通に抱える課題である。

そこで、創業当時の具体的なエピソードを交えながら創業者の理念を若い社員に伝える方法として、メモリアル・アニメーションを活用することを提案したい。このときメモリアル・アニメーションは組織（会社）の歴史を個人（社員）の歴史を通して学ぶツールとなる。創業者の想いを物語化することで、企業理念の言葉の裏に人々の笑顔と涙があったことを伝え、会社の歴史を人々の想いの歴史に変えることができるのではないだろうか。所属する組織の長い歴史を短時間で追体験し、創始者の想いに共感し、組織への愛着を形成する手段としてのメモリアル・アニメーションの可能性について、フロアの参加者と一緒に考えてみたい。

「TEMで広がる社会実装」の可能性

企画・司会者：豊田香（東洋大学・非常勤）

話題提供者1：北出慶子（立命館大学）

話題提供者2：伊東美智子（神戸常盤大学）

話題提供者3：大川満里子（東京都中野区立教育センター）

指定討論者1：サトウタツヤ（立命館大学）

指定討論者2：安田裕子（立命館大学）

複線径路等至性モデリング（TEM）という質的研究法が提案されて12年が経過しようとしている。この間にTEMは、多くの領域の研究者により援用され、時間的なプロセスにかかわる新たな質的心理学的な視座を切り拓いてきたように思う。そして、TEMは学术界だけに留まらず、実社会における人々の生活に関わる場面においても活用されるようになってきた。こうした社会的なTEMの実践活用の展開について、具体的事例をまとめたものが、『TEMで広がる社会実装』（誠信書房）である。本発表はその発行を記念し、執筆者3名が、執筆内容を直接解説し、本書では書ききれなかった具体的な実践方法等、TEMで広がる社会実装の可能性について発表する。

話題提供者1、北出慶子氏は、「ネイティブ日本語教師の海外教育経験は、教師の成長を促すのか」をテーマとし、日本語教師教育におけるTEMの可能性について述べる。本事例では、日本語教育課程大学院を修了し、韓国で日本語を教えた後、国内で日本語を教えている2名の日本語教師を対象とした。TEM図を用い、国内外複数の職場経験を通した日本語教師の教師観の長期的変化や成長過程の可視化を試みた。これにより、各職場での葛藤や気づきが累積し内在化する中で教師観の変化が生じる様相が明らかになった。また各職場における葛藤要因について多面的文脈から接近した。これにより、韓国社会における日本語および日本語母語話者というイデオロギーが日本語教師の職場での位置づけや成長にどのように影響しているのかが浮き彫りとなった。今後、留学生や外国人労働者が増加することがみこまれる日本において、本研究が日本語教師のキャリア形成支援や日本語教師教育課程のカリキュラム再考へと展開する可能性について述べる。

話題提供者2、伊東美智子氏は、「社会人経験を経た看護学生の学びほぐし」をテーマとして、専門学校に進学した現役の社会人看護学生（以下、社会人学生）4人が2回のインタビューで語った、在学中の学びや経験について述べる。現役学生よりも年上で社会人経験があるゆえに教育者側は過度な期待をかけてしまう傾向があるが、語りからは、特に元コメディカルであったり介護職であったりする人ほど、実は前職経験の学びほぐしが難しく、人知れず葛藤を抱えていることが分かった。TEM図による分析の結果、在学中のさまざまな出来事や状況が、良くも悪くも彼らの学修や学ぶ姿勢に影響を及ぼしていることが分かった。さらに、卒業生や退学した学生の語りから、社会人学生が本当に目指しているのは、単に看護師資格を得るためだけではないだろうことが見出された。今後増加すると予想される社会人看護職養成において、知識や技能の習得に加えた新たな支援の在り方として、社会人学生との個人面談等でのTEMの活用の可能性について述べる。

話題提供者 3、大川満里子氏は、「がんで配偶者を亡くした人の闘病生活から死別後の心理過程」をテーマとし、実際にがんによる死が家族（介護者）にもたらすものとは何であったのかを提案する。分析の結果、介護者（配偶者）の心理過程が夫婦の共有性の喪失と再構築という関係性の変容の過程であるということがわかった。また、介護者の価値観に変容がみられ、死者は象徴化された存在となり、死者の存在が時間の経過で消滅しないことがわかった。そして、外部要因が大きく影響する時と、外部要因と心の中の内部要因双方が大きく影響する時があることがわかった。これらの結果は、患者や家族（介護者）と彼らに携わる医療関係者やカウンセリング従事者の今後の支援内容を検討するうえでの一助になると考える。また、がんのみならず、事故死や自死などの突然死であっても、遺族の心理過程を TEM で描くことは、生前の配偶者の存在を意味づけする作業と、これから生きることへの動機づけとして遺族を支援する一助となる可能性について述べる。

指定討論者には、本書の編著者であるサトウタツヤ氏と安田裕子氏をむかえ、本書の企画主旨と今後の展開の可能性について論じてもらう。専門職養成や専門的臨床実践者の皆さまからの闊達な質疑を期待したい。

ブルーナー文化心理学の射程：
フォークサイコロジーと行為理解に係る「規範」の問題

企画・司会	横山 草介	（東京都市大学 人間科学部）
話題提供	阿部 廣二	（早稲田大学大学院 人間科学研究科）
話題提供	山本 敦	（早稲田大学大学院 人間科学研究科）
指定討論	山本 登志哉	（一般財団法人 発達支援研究所）

人々が日常生活の中で、互いの行為や心の状態について抱いている素朴理論（folk theory）のことを Bruner（1990）は、フォークサイコロジー（folk psychology）と呼んだ。彼は、フォークサイコロジーは常識（common sense）と呼び替えてもよく、他者との間に共有されたものと見なされることによって、我々の行為に対して規範的（canonical）に機能する主張した。一方で Bruner は常識や規範的な通例性の破壊は新たな意味生成の契機となることを示唆している。この意味生成の行為に際して我々が用いる道具の一つがナラティブであるというのが晩年の Bruner の一貫した主張であった。

さて、以上に要約される Bruner のアイデアを足場にして本シンポジウムで議論を行いたいのは、Bruner が「意味の行為（acts of meaning）」と呼んだ我々の意味生成の行為の発現条件となる常識ないし規範的通例性と、その破壊、そして、事態を再安定化させるための方略の具体についてである。Bruner 自身は、規範的通例性とその破壊が「意味の行為」を発現させる契機となることを示唆し、そこに新たな意味の創出と結びついた可能世界（possible world）の構築の地平があることを強調した。そして、可能世界の構築と共有を媒介するナラティブの機能的側面を積極的に評価した。だがその一方で、（1）常識ないし規範的通例性や、その破壊を具体的にどのような事象と特定して研究をすすめるのか、（2）我々が事態を再安定化させるために用いる方略には具体的にどのようなヴァリエーションがあるのか、といった問題については殆ど何も述べていない。従って本シンポジウムでは Bruner 文化心理学の可能性を探る試みの出発点として、「意味の行為」の実証的探究の糸口を見つけるために、常識ないし規範的通例性とその破壊、そして事態を再安定化させるために我々が用いる方略といった論点に焦点を当て、いくつかの理論的、実証的観点から議論を展開する。

「意味の行為」の発現条件としての常識とその破壊：フォークサイコロジーの規範性
横山 草介（東京都市大学 人間科学部）

我々の日常的なやりとりの過程において、他者の行為が何を指示しているのかを理解するためには、当の行為が位置づくコンテキストを理解する必要がある。対象の意味がその対象の位置づく脈絡に依拠して規定されることは一般に「文脈効果」と呼ばれる。Bruner（1990）は、この文脈効果が他者の行為理解においても重要な役割を果たすことを指摘した。そして、我々の行為理解の参照枠組みとして機能するコンテキストに該当する心的表象をフォークサイコロジーと呼んだ。Bruner（1990, 1996）に従えばフォークサイコロジーは「常識（common sense）」と呼び替えてもよく、我々の日常的な行為の在り方に一定の制約を加えている。この意味においてフォークサイコロジーは規範性を伴っている。ただし、我々の行為はつねに常識の範囲内に収まっているわけではない。時には、常識や想定を越えた他者の行為というものに直面する。この際、我々は当の不測の事態をなんとか理解可能にしようとする。このプロセスを Bruner は「意味の行為（acts of meaning）」と呼んだ。そして我々が「意味の行為」を実行可能にするための心理的道具の一つとしてナラティブを位置づけた。

意味の行為論における「トラブルの発生」の記述可能性

阿部 廣二（早稲田大学大学院 人間科学研究科）

本報告では多人数会話場面におけるトラブルの発生について記述する。「意味の行為」(Bruner, 1990)には少なくとも(1)トラブルの発生、(2)トラブルの修復という2つのフェイズの存在が想定され得る。しかしながら、これらのフェイズを実証的なレベルで記述する方法について Bruner は明確な提案を行っていない。従って本報告では、とりわけ第一のフェイズがどのように記述可能なのかを実際のデータを元に検討する。具体的には、大学生2名と社会人1名が参与する再会場面における(1)発話の組み立て上の遅延と、(2)その遅延を資源として開始される次話者の発話とを一つのトラブルリソースとして記述してみたい。こうしたトラブルは会話における「順番構成単位」(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)の規範性の観点から記述できるように思われるが、この記述は、Bruner の主張するフォークサイコロジー、もしくは意味の行為論とどのように接続することができるのだろうか。以上の作業を通して、意味の行為論に定位した心理学研究の射程について議論を行いたい。

身体的な相互行為場面における「意味の行為」の探究：ピアノレッスンを事例として

山本 敦（早稲田大学大学院 人間科学研究科）

Bruner (1990) の議論においてフォークサイコロジー (folk psychology) の破綻は、新たな意味生成の過程としての「意味の行為 (acts of meaning)」が開始される契機であり、かつ、引続く事態の修復の過程を予示するものである。Bruner の意味の行為は、この過程をナラティブという言語的過程に重ねて考察するものであった。しかし、言語的過程の基盤となっているはずの身体的行為もまた、それ自体で相互行為における意味を成立させているはずである。従って本報告では、具体的な相互行為場面、特に身体的な相互行為場面における「意味の行為」の契機と修復の過程を検討することにより、言語的過程に焦点化した Bruner の「意味の行為」論の拡張可能性を探っていく。具体的には、ピアノレッスンにおける演奏指導場面の相互行為分析から、(1) 身体的相互行為における「意味の行為」の契機がいかに関生するのか、(2) そこから開始される修復の過程はいかなるものとして展開するのか、の2点について究明する。この分析を通して、言語レベルの「意味の行為」と、身体レベルの「意味の行為」との異同を考察し、意味の行為論に定位した心理学研究の射程について議論を行う。

EMSの生成をめぐる揺れ動く社会的行為と規範的媒介項

山本 登志哉（一般財団法人 発達支援研究所）

人間のコミュニケーションはお互いに相手に応答を期待しあう中で成り立つ役割主体が、記号として成り立っているツールを、共同化されたルール（規範）の調整を受けつつ交換する形で展開する、ということが著しい特徴になっています。会話・贈与及び市場交換はすべてこの構造によって成り立つ社会的行為であり、すべての社会システムはその実践によって成り立っています。このあらゆる社会的行為の基礎単位構造を私たちはEMS（拡張された媒介構造）の概念で記述していますが、3歳までにはその基礎が成立するEMSは日常生活の個別具体的な実践過程の中で常にそのつど生み出され、また揺らぎ、その規範的要素（規範的媒介項）によって調整されながら機能していくものです。それが揺らぎ続けるのは、主体間の規範的媒介項にズレが生み出される状態、すなわちディスコミュニケーション状態が常に存在するからであり、そのずれの絶え間ない調整プロセスが人間の行為の文化性や歴史性の獲得・展開、社会的カテゴリーの生成、社会集団の実体化といった現象を生み出します。「差の文化心理学」のそのような議論との対比で、提起された問題を考えてみたいと思います。

会場	演題番号	筆頭者 姓	筆頭者 名	筆頭者所属	発表題目
282	1	池口	佳子	首都大学東京大学院・聖路加国際大学	日本における現象学的看護研究の現況
	2	中村	雅子	東京都立大学メディア情報学部	越境によってコンテンツを生み出す学び：fluid（流動体）としての市民デジタルアーカーライブ活動
	3	仲	沙織	鹿児島純心女子大学	不登校女生徒支援の一事例ー生活臨床における心理職の役割と多職種協働の実際ー
	4	勝尾	栄		乳児は絵本をどのように体験しているのかー前言語期の乳児と絵本の関わり方に注目してー
	5	石盛	真徳	追手門学院大学院経営学部	親族による事業承継に関する事例的研究（1）：3名の承継者のライフストーリーとキャリア選択プロセスのTEMによる分析
	6	神野	由香里	放送大学 教養学部	非正規社員が正社員と同じ職務を担っているのではないかと認識する要因の検討ーパートから正社員へ登用された者へのインタビューからー
	7	木川	智美	昭和女子大学大学院	愛着の安全基盤機能が女子大学生のキャリア発達におよぼす影響についての質的検討（1）
	8	大川	満里子	中野区立教育センター教育相談室	がん患者の心理過程
	9	小沼	豊	東京純心大学	修正版グラウンデッドを用いた男性保育者に対する援助体制についてー職場での人間関係に着目してー
	10	二階堂	千絵	横浜国立大学大学院 環境情報学部	多重的な喪失としてのペットロスー老犬を介護し看取った中高年者の語りからー
283	11	鈴木	美代子	岩手県立大学看護学部	在宅療養超高齢者の老年的超越の意味付けのプロセスー100歳高齢者との対話によるナラティブの分析からー
	12	神崎	真実	立命館大学文学研究科	不登校者の身体表現と教師による呼応ー不登校経験者受け入れ校におけるフィールドワーク
	13	横山	克貴	東京大学教育学研究科	経験の語りにおいて人称代名詞の変化がもたらす語り及び想起の変化
	14	櫻井	由美子	茨城キリスト教大学生生活科学部	ボランティア活動の特性に関する探査的研究
	15	尾見	康博	山梨大学大学院総合研究部	部活における先輩後輩関係規範の成立過程ーBukatsuの文化心理学(3)ー
	16	境	愛一郎	宮城学院女子大学 教育学部	職務内容および職場環境の変化に伴う給食スタッフの苦悩と意識変容のプロセス
	17	董	健	茨城大学大学院人文社会科学部研究科	震災によって身近な人の死別を経験するということー四大地震を主要事例としてPTGの視点からー
	18	植田	嘉好子	川崎医療福祉大学	ソーシャルワーカーの語りにおける専門性の認識ー特別養護老人ホームの生活相談員を例に
	19	小田	友理恵	法政大学大学院人間社会研究科	臨床心理士の実践性と科学性の関連
	20	小沢	一仁	東京工業大学教職課程	竹田による現象学を心理学の概念検討に用いる方法論的検討
283	21	小泉	千尋	青山学院大学社会情報学研究科博士後期課程	サイエンスカフェにおける参与役割
	22	芦田	祐佳	東京大学大学院教育学研究科	児童のネガティブ情動の表出時における教師の意思決定プロセスの類型
	23	石毛	順子	国際教養大学国際教養学部	ピア・レスポンスにおいて日本語学習者が高く評価する点の変化
	24	渡邊	照美	佛教大学教育学部	がんで身近な他者を亡くした人のレジリエンスー面接データを再分析するー
	25	横山	章介	東京都市大学人間科学部	フォークサイコロジーはどのようなナラティブに反映されるのか
	26	福岡	寿美子	流通科学大学 商学部	中国入学者留学生による対話的教室活動におけるルーブリック作成についてー記述的分析を中心にー
	27	香曾我部	琢	宮城教育大学	多様な感情が生起する経験への語りー保育者は離職と再就職を結ぶ感情の変容をどのように語るのかー
	28	町田	佳世子	札幌市立大学	体験イベントの中での雑談の展開要因：聞き手の働きかけに注目して
	29	高森	順子	（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構	アクシヨントリサーチを駆動させる手法としての映像メディアー「名を呼ぶ日」の活動プロセスの報告と検討ー
	30	稲泉	博己	東京農業大学国際食料情報学部	『植物メディア（紅ほっぺ）』を介した正統的周辺参加と、参加者の学習過程の実態
2F廊下	31	川野	健治	立命館大学総合心理学部	自殺を美化するディスココースの分析ー曾根崎心中
	32	中妻	拓也	立命館大学総合心理学部	許容できない事象に対する共感の構造ーコフート理論からみた「死にたい」に対する考察ー
	33	鳥越	淳一	開智国際大学	セクシャルマイノリティの当事者学生における被害容体験プロセス
	34	土元	哲平	立命館大学 文学研究科	「TEM図の描き合い」による「軌機」経験の反省的考察
	35	菅原	圭	京都文教大学大学院臨床心理学研究科	浄土真宗の僧侶におけるアイデンティティ形成の研究ー一世襲制の葛藤を中心にー
	36	堀	智子	藍野大学医療保健学科看護学部	看護専門学校における「社会人学生」像に関する研究ー社会人経験のある看護学生のインタビュの質的分析よりー
	37	今井	多樹子	安田女子大学看護学部看護学科	看護実践能力向上に寄与する主要因子の探求：看護実践における学習行動の観点から
	38	北村	篤司	昭和音楽大学短期大学部	子どもの非行や問題行動をどのように語るかーディスココースとエージェンシーの観点からの検討ー
	39	藤原	瑞穂	神戸学院大学総合リハビリテーション学部	麻痺した「手」が「錆びたはさみ」で知覚する世界ー急性期脳卒中者の語りの分析ー
	40	田村	美子	安田女子大学看護学部	重度心身障害児が選んだ「生きる道」を支える母親の語り
	41	矢吹	理恵	東京都市大学メディア情報学部	国際結婚夫婦の海外移動に伴う夫婦関係の変容（2）ーキャリア形成の観点からー

午前	42	沼田	あや子	首都大学東京 人文科学研究科	発達障害児の母親の迷いの語り ー対話志向インタビューにおける他者の声、身体からの声、つながりの兆し
	43	栗本	綾子	一橋大学大学院社会学研究科	東日本大震災を日本の外で経験するということー震災という共同体験の共有／非共有と経験の語りにくさー
	44	香月	裕介	神戸学院大学	論文内に生じたそれとその要因ーあるケース・スタディ研究の分析ー
	45	稲垣	絹代	聖泉大学看護学部	高齢者の戦争体験の語りから看護学生が学んだこと
	46	勝浦	眞仁	桜花学園大学保育学部	ある自閉症青年との触即体験ー音楽運動療法における身体性ー
	47	藍木	桂子	新潟大学大学院保健学研究科	祖母になった女性の認識ー初めて祖母になった女性を対象としてー
	48	廣瀬	太介	滋賀県教育委員会	越境による「失われた場所」の回復ーカルト体験者の退会後の回復プロセスー
	49	齋藤	凡	東京大学医学部附属病院	現場発看護学の実践知の集積を旨とした事例研究(1)：事例研究の科学性についての検討
	50	吉田	滋子	東京大学大学院医学系研究科	現場発看護学の実践知の集積を旨とした事例研究(2)：現象学との関連
	51	岡本	留美	明治国際医療大学看護学部	妊娠期に予想外の出来事を体験した一夫婦に関する現象学的記述
3F廊下	52	山下	愛実	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科	保育の場における「想定外」ー子どもたちと保育者のいとなみー
	53	富岡	麻由子	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科	親は子どもとの遊びをどのように楽しむのか
	54	佐藤	由紀	玉川大学リベラルアーツ学部	パフォーマンスとしての英語絵本の読み合いの探索的記述：『演ずる』ことで何が生まれているのか
	55	小林	規江	明治大学大学院	非言語的コミュニケーションを言葉にすることの意味ー大学生を対象としたスクリグルの質的分析ー
	56	楠本	和歌子	神戸山手大学	沖縄県離島における包括的心理支援モデル構築に向けた方法論の検討
	57	吉岡	萌	名桜大学人間健康学部看護学科	沖縄の激戦地に生まれ、本土にて労働組合活動をした男性の病気の経験
	58	伊藤	真平	東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科	大学生の就職活動の語りにみる「揺らぎ」と青年期イニエーション体験ー複線径路・等至性モデルを用いてー
	59	篠川	知夏	東京都市大学大学院	大学の就職活動の語りにみる「揺らぎ」と青年期イニエーション体験ー複線径路・等至性モデルを用いてー
	60	金	智恵	東京大学大学院教育学研究科	女性Btセクシャルを生きるー語る内容と語り合う行為の質的な検討からー
	61	司城	紀代美	宇都宮大学大学院教育学研究科	発達障害当事者、保護者、研究者による語りの視点の比較ー研究者が記述したエピソードを手がかりとしてー
昼	62	町田	奈緒子	京都大学 人間・環境学研究科	トランスジェンダーを生きるという体験の「こと」的側面
	99	近藤	真帆	京都大学 人間・環境学研究科	生活をく問い直し、家をくなくおし、家族をくなく、居場所型ダイケアを通してー
	63	塩野入	愛	お茶の水女子大学大学院修了	授業における教師と子どもとのずれ
	64	菊地	ひとみ	東京医療学院大学	参加観察とインタビューの順序性に注目した研究方法の検討ー看護師長の看護実践の分析からー
	65	伊田	裕美	首都大学東京大学院人間健康科学研究科	フィールドノーツとインタビューデータのずれを活かした分析方法の検討ー救命救急センターにおける家族への看護実践の記述に注目してー
	66	村上	優子	首都大学東京大学院	現象学的研究におけるクリティークの視点ー読む、書く、読まれるー
	67	村上	優子	首都大学東京大学院	同じ場面における2つの「データ」が意味することー外傷性脊髄損傷患者についてのフィールドノーツと録音データー
	68	鈴木	清美	藤沢市保健医療センター	夫の海外赴任に同行する妻のキャリア
	69	李	真昕	京都大学防災研究所	「Xがない。YがXです。」の意味とは何かー高知県黒潮町を事例にー
282	70	山田	理絵	西武文理大学看護学部	看護師の直観に基づく意思決定に関する文献レビュー
	71	菅生	聖子	大阪大学大学院人間科学研究科	医学的理由により人工妊娠中絶をした母親の「我が子」への体験のあり方
	72	園部	友里恵	三重大学教育学部	高齢者と非高齢者におけるインプロ（即興演劇）の意味づけの乖離：「ボケ防止」をめぐって
	73	桐谷	麻美	京都大学医学部附属病院	自死遺族が望むように生活できる自分になる過程
	74	松石	真理子	九州大学人間環境学府	幼少期テレビアニメーション視聴習慣についての語りにもみられる「終了」の意味
	75	齋藤	絢子	立命館大学文学研究科	保護司と大学生による更生保護についての交流の場の変容
	76	齋藤	真子	日本赤十字看護大	整形外科看護領域における質的研究の前提とは
	77	荒川	歩	武蔵野美術大学造形学部	インタビュイのインタビュイとしての特性
	78	一條	玲香	東北大学大学院教育学研究科震災こども支援室	結婚移住女性の異文化適応過程におけるライフイベントと保護要因ーTEMを用いて
	79	長尾	宗典	介護老人保健施設国立あおやぎ苑リハビリテーション科	脳梗塞後軽度右片麻痺男性の在宅生活再建プロセスー複線径路等至性アプローチを用いた分析ー
	80	横山	佳奈	名古屋大学大学院教育発達科学研究科	統合保育における自閉症児の対人関係の発達に関する検討
	81	演題取り下げ			
	82	木戸	彩恵	関西大学文学部	メイクアップ動画のナラティブ分析

283	83	鍛冶	葉子	姫路獨協大学看護学部	経営者スタッフから女性性産業従事者へのフォローについて～元スカウトマンへのインタビュから～
	84	杉山	高志	京都大学大学院情報科学研究科	津波災害についての絵画の分析～高知県幡豆郡黒潮町を例に～
	85	相良	好美	東京大学大学院	ニューカマー青年の「移動」経験とアイデンティティ形成過程－エスニシティをめぐる自己アイデンティティの層化的な拡張に焦点を当てて－
	86	石川	清子	東京福祉大学・大学院 心理学研究科	日常生活における日本人大学生の本来性の在り方：折り合うことと心のバランス
	87	高野	恵代	愛知淑徳大学	重度障害者きょうだいの心理的葛藤体験の変容過程：母親と障害者との関係に着目して
	88	叶	好秋	京都大学人間・環境学研究科	中国農村における住民主体地域活性化の切っ掛け－義理人情の若者グループを起点に－
	89	厚澤	祐太郎	上智大学大学院総合科学研究科	父親は息子との「男としての生き方の違い」をどのように体験してきたか－成人した息子がいる父親の語りから－
	90	山本	佳世乃	若手医科医学医学部臨床遺伝学科	NIPT（無侵襲的出生前遺伝学的検査）受検の経験についてのインタビュー調査
	91	小平	朋江	聖隷クリストファー大学	べてるの家の当事者研究における自己病名と研究テーマのテキストマイニング：メンタルヘルスマガジン『こころの元気+』を分析対象にして
	92	松永	妃都美	佐賀大学医学部統合基礎看護学講座	福島第一原子力発電所の事故を契機に被災地を離れ、避難先での生活を継続する母親－複線径路・等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：TEA）－
2F廊下	93	駒崎	俊剛	東京医療保健大学	地域保健活動の運営へ男性が参加する過程における意味づけの変化
	94	増山	由香里	旭川大学短期大学部	保育者の語りから考える絵本を用いた表現活動の意義
	95	潮木	玲奈	大妻女子大学	保育者の大学院進学が子どもを能動的な存在として捉える視点へどのように影響を与えたか～保育場面での葛藤・揺らぎや事例に基づく語りのTAE分析～
	96	小林	恵子	青山学院大学社会学部情報学研究科	文化的透明性の不透明さ：芝居がかったふるまいと逃げるための越境
	97	黄	信者	立命館大学文学研究科	日本の「こころ」についての土着の思想と心理学の土着化
	98	高桑	郁子	横浜国立大学大学院 都市イノベーション学府	ホームレス高齢者のセルフネグレクト化要因に関する一考察－自己防衛手段としての「拒否」－
	100	茂野	賢治	立命館大学	数学教師になる大学生の極限概念認識における学習経験の持つ意味－解釈学的現象学的分析から－
	101	古賀	松香	京都教育大学教育学部	保育実践の熟達とは何か－18名の保育者との対話的ビジュアルエスノグラフィ－
	102	時任	集平	関西学院大学	中等教育から高等教育への学びのトランジションに関する研究
	103	高本	香織	麗澤大学外国語学部	「異文化適応」再概念化の試み－異文化アイデンティティの現象学的分析
384	104	門田	圭祐	早稲田大学人間科学研究科	インタビュー会話における打ち合わせと本番のズレが徹視的に発生する機序に関する研究
	105	福田	律子	名古屋大学大学院教育発達科学研究科	適応的な生きる意味に関する検討－生きる意味への問い、その問いに対する答えに着目して－
	106	福里	翔史	文教大学大学院人間科学研究科・臨床心理学専攻	臨床心理士養成指定大学院の修士論文作成が臨床活動に与える影響
	107	山本	敦	早稲田大学大学院人間科学研究科	一対一のピアノレッスンにおける演奏表現の伝達方法-相互行為資源の構造化への着目-
	108	福岡	咲綾	東京大学教育学研究科	レイプ被害者が「責められる」とはどのようなことか-質的分析を用いた検討-
	109	岸野	麻衣	福井大学大学院教育学研究科	保育を見合う研究会の変遷プロセス：複数園の置かれた状況の比較
	110	都築	幸恵	名城大学社会イノベーション学部	「なぜ公務員を志したのか」公務員試験合格者の就業動機に関するインタビュー」
	111	大塚	翔	筑波大学大学院人間総合科学研究科	発達障害をもつ子を育てる親の能力性を考える：新しい親子関係のパフォーマンスと情動性の発達
	112	永田	素彦	京都大学大学院人間・環境学研究科	長期的災害復興をめぐるノットワークキング：東日本大震災後のアクションリサーチをもとに
	113	小林	良介	東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース	日本におけるゲイ男性のパートナー関係の構築・維持プロセス-出会いの形態が多様化する中で－
3F廊下	114	佐藤	遊馬	東京大学大学院 教育学研究科	ゲイ・バイセクシュアル男性のポデリティイメージと精神的健康に関する質的検討－当事者に対する半構造化インタビューから－
	115	保坂	裕子	兵庫県立大学	女子高校生にとつての「友だちという存在」の意味
	116	田中	元基	東京都健康長寿医療センター研究所	認知症高齢者に対する絵本の読み聞かせはどのように行われるか：読み聞かせ場面における相互行為の分析
	117	堀内	多恵	東京大学大学院教育学研究科	スポーツ傷害治療における心理援助の可能性――院内勉強会を通じた臨床心理士の取り組み――
	118	升山	颯耀	國學院大学神道文化学部	坐禪初学者の坐禪に対する意味づけの多様性が生まれる経緯～JEMを用いて描く～
	119	飯島	千咲	京都大学大学院 人間・環境学研究科	広島県大島町における協働の実践研究－「大学」づくりの現場を読み解く－
	120	富山	大士	秋草学園短期大学	保育実習の経験を通して「危険」場面の認識の変容
	121	西村	次郎	岡山理科大学工学部	一人のD.M.D児の生きがい感の創造と家族の関わりについて
	122	天野	美和子	東京大学大学院教育学研究科	子どもにとつて魅力のある園とは？
	123	木下	寛子	九州大学大学院教育学研究科	小学校の風景：参与を通じた場の全体性理解の契機と展開
	124	齊藤	英俊	北陸学院大学人間総合学部	児童のディスコースの特徴に関する一考察 ～算数科授業を事例として～
	125	足立	にわか	白百合女子大学 生涯発達研究教育センター	企業で働く女性が妊娠するとき「働き手」/「妊婦」としての自己定義をめぐる調整と交渉－
	126	向後	裕美子	東京大学大学院	がんターミナルと告げられながら長期生存する夫婦との対話
	127	小島	康次	北海学園大学経営学部経営情報学科	ピアジェの発生的認識論のスピノザの解体 (4) ベルクソンによる記号論的場の構築

No001 **日本における現象学的看護研究の現況**
池口佳子（首都大学東京大学院・聖路加国際大学）

国内の現象学的看護研究の動向を知る目的で、医学中央雑誌 WebVer. 5 を用いた文献検討を行った。2016 年 12 月までに医学中央雑誌に収録されている現象学的看護研究論文数は、200 を超えている。現象学的研究方法については、ベナーの解釈学的研究方法も含め、ヴァン・マーンやジオルジ、パースィなど様々な方法論やワトソンの看護理論を枠組みにした報告がなされている。また、データ収集方法も、現象によりインタビューやフィールドワークなどの方法が選択されている。入手可能な現象学的看護研究文献に対し、年次推移などの動向とともに、研究分野・目的（探求する現象）・データ収集方法・研究参加者・分析方法などについて、現象学的な観点からの分類を試み、検討を行う。これらのことから、日本の現象学的看護研究の現況を明らかにし、現象学的看護研究方法に関する示唆を得ることとする。

No002 **越境によってコンテンツを生み出す学び：fluid（流動体）としての市民デジタルアーカイブ活動**
中村雅子（東京都市大学メディア情報学部）

市民デジタルアーカイブ活動は、それまでアーカイブという言葉から連想されてきた歴史研究や記録の専門家とは異なり、一般市民が立ち上げる地域の記録システムをめぐる活動である。関わる人々は多様であり、情報技術や新しいガジェットとしての情報システム、あるいはまちづくりといったテーマに興味がある人々、あるいは従来、郷土史グループなどの閉じたコミュニティを中心に活動していた人々が、「デジタルアーカイブ」というそれ自体、技術—社会的なオブジェクトを媒介として結びつくことで新たな学びや活動を見出す現象が生まれている。本報告ではとくに活動の流動性と変化という特色を顕著に示していると思われる事例を取り上げて、その中心人物の語りから、越境する学びの場としての市民デジタルアーカイブの可能性を考察する。

No003 **不登校女生徒支援の一事例—生活臨床における心理職の役割と多職種協働の実際—**
仲沙織（鹿児島純心女子大学）

近年、スクールカウンセラーの配置や、適応指導教室、フリースクールなどの個別支援の場の提供など、不登校対策が各地で進められており心理職が多く関わっている。しかしながら、現状の支援体制に乗ることができない子どもたちもまだまだ存在している。本研究では、不登校女生徒の一事例を紹介し、生活臨床を基盤とした心理的支援と家族支援を含めた多職種協働の実際を報告し、今後の課題について検討することを目的とする。

約 2 年間の不登校を経て浪人生活を送る女生徒を対象に、週 2 回各 1 時間ずつ、看護師と共に自宅へ訪問し、日常生活支援、家族支援を含めた心理的支援を提供した。支援の過程で、母親担当看護師との協働は欠かせず、当事者支援のみならず多職種協働のもと家族全体の支援が有効であると考えた。また、生活の場に出向くという倫理的配慮やリスクマネジメントの難しい枠組みの中で課題も多く、今後も研究を続けていく必要がある。

No004 **乳児は絵本をどのように体験しているのか —— 前言語期の乳児と絵本の関わりに注目して ——**
勝尾栄

2001 年以降、言語獲得以前の乳児に絵本を読む親が増加した。その要因のひとつに、2001 年に始まった日本ブックスタート運動（1 歳未満の乳児健康診査の会場で、親子に絵本を配布する）が挙げられる。こうした現状を受け「言語獲得期以前の乳児が絵本の内容にどう反応するのか」「読み聞かせを通じて母子の相互理解が深まるのか」という観点で、1 組の母子に対し継続的な観察研究（被験児が生後 3 ヶ月から 6 ヶ月まで）を行った。母子相互理解については、ヴァスデヴィ・レディ（2015）の提唱する「二人称的かわり」が絵本を読む母子間でどのように変容していくのかを捉えることとした。その結果「言語獲得以前の乳児が物語絵本に興味を示す」、「生後 4 ヶ月で 2 冊の絵本を比較して選ぶ」、「絵本の読み聞かせを継続する中で、母親は我が子が動作で気持ちを伝えていることに気づき、子どもの動きから気持ちを理解して対応できるようになった」ことを確認した。

No005 **親族による事業承継に関する事例的研究(1)**

：3名の承継者のライフストーリーとキャリア選択プロセスのTEMによる分析

石盛真徳(追手門学院大学経営学部), 朴修賢(追手門学院大学経営学部), 田淵正信(田淵公認会計士事務所・追手門学院大学)

近年、中小企業経営者の高齢化が進むに伴い、事業承継問題が注目されるようになっていく。中小企業の事業承継には、主として親族承継、内部昇進、外部登用の3つがあるがもっとも一般的とされるのが親族承継である。本研究では親族による事業承継のプロセスにおいて、承継者自身がどのような認識を持ち行動したのかを、事業環境に関わる客観的な状況とも照らし合わせながら、個別の事例ごとに検討を行う。具体的に着目する点としては、①事業承継に対する認識(子ども時代から事業承継の時期までの変化)、②後継者の決定手続き、③経営能力の開発(後継者としての教育等)、④資産・負債の承継、⑤ステークホルダーとの調整、⑥事業承継後の事業展開(事業ドメインの変更や拡大)などである。なお、今回の報告では、3名の事業承継者の事例について、個人の人生を時間と共に描くことを目標とする複線径路・等時性モデル(TEM)を用いて分析した結果について検討する。

No006 **非正規社員が正社員と同じ職務を担っているのではないかと認識する要因の検討**

ーパートから正社員へ登用された者へのインタビューからー

神野由香里(放送大学教養学部)

近年、非正規社員の中には正社員と同等の職務を担い(質的な基幹化)、待遇への不満が募っているといわれているが、非正規社員の「正社員と同じ職務を担っているのではないかと」という認識は、どのような要因から生じるのだろうか。そこで本発表では、パートから正社員へ登用された女性(A氏)を対象に、パート時と正社員時の両時点で自身の職務と異なる立場の職務、それぞれの認識について半構造化インタビューを実施し、SCATの手法(大谷、2008)を用いて分析する。インタビューでは、A氏はパート時に「正社員と同じ仕事をしている」と認識していたが、正社員時には「パートとは仕事が全然違う」と語り認識の変容が明らかになった。この変容に影響を与えた要因の1つとして、パート時は正社員を観察して自身と比較したのに対し、正社員時には両方の職務を経験したうえで比較していることが示唆される。本発表では、なぜ認識に変容が生じるのかを検討する。

No007 **愛着の安全基地機能が女子大学生のキャリア発達におよぼす影響についての質的検討(1)**

木川智美(昭和女子大学大学院)

女子大学生において、愛着機能の「安全基地」はキャリア発達の「計画・目標設定」と「実現・コミットメント」に影響を与えていることが示唆されている(木川、2016)。本研究では、半構造化面接を用い、上記の量的研究のモデルを質的なデータから検証することを目的とした。調査対象者は女子大学生8名で、実施時期は2015年4月であった。調査内容はモデルの各変数を参考に、予め質問項目を用意した。結果は、キャリア発達が成熟している対象者は、家族との関係性が良好で自身のキャリア探索行動について家族との十分なコミュニケーションがとれていた。特に、親から心理的に独立しており、なおかつ良好な関係性を持つ対象者がキャリア発達が成熟していたことから、モデルは支持されたといえる。木川智美(2016) 女子大学生における親への愛着がキャリア発達におよぼす影響 パーソナリティ研究、25(1)、89-92。

No008 **がん患者の心理過程**

大川満里子(中野区立教育センター教育相談室)

2000年以降、医療現場では、がんを患者に告知し、治療方針を決定する方向性が一般的となった。告知されたがんの内容により、患者の心理過程は異なってくるも、病気の特徴から患者の生死の価値観を揺さぶることは否めない。本研究は患者の心理過程を探り、当事者が病気の進行により何をどのように感じ考え行動選択をしたか、なぜそのように考えたかを、複線経路・等至性アプローチと脚本分析を使い、分析する。

No009 修正版グラントッドを用いた男性保育者に対する援助体制についてー職場での人間関係に着目してー
小沼豊 (東京純心大学)

本研究は、新任期の男性保育者に着目し保育実践の中で抱える困難を明らかに、援助体制の構築を実際のインタビューから検討した。その結果、男性保育者の困難は、《環境配慮(理解)》《男性性的役割(求められる保育技術)》《保護者との関係》《組織雰囲気》という要因であった。そして、援助体制の構築へのプロセスに関してはM-GTの分析から、風通しの良い《組織的雰囲気》に繋がっていった。そしてまた、援助体制の構築は良好な同僚性(園長・先輩保育者も含む)が大きな要因であった。すなわち、風通しが良く、困難に直面した際に何でも相談し援助を要請できるような組織雰囲気がカギになることが明らかになった。

No010 多重的な喪失としてのペットロスー老犬を介護し看取った中高年者の語りからー
二階堂千絵 (横浜国立大学大学院環境情報学府)

ペットブームと言われて久しく、伴侶動物としてのペットの喪失(いわゆるペットロス体験)とそれに伴う悲嘆についても、日常的に起こりうることととらえられるようになってきた。と同時に社会は高齢化の一途をたどり、ブームの中で家庭に迎え入れられた動物たちもまた、獣医療の進歩などにより高齢化している。ペットの高齢化問題や老犬介護、老犬ホームなどの話題がメディアで取り上げられることもあるが、飼い主による老いたペットの介護・看取りについての学術的知見の蓄積はほとんどない。そこで本研究は、老犬介護と看取りを経験した中高年期にある方の語りから、ペットを介護し看取るといふいわば〈緩やかなペットロス〉を、飼い主がどのように体験しているかを明らかにすることを目的とし、そこで聞き取った「私、何をなくすんでしょう?」という言葉キーセンテンスとして、「ペットを失う」とはどういうことなのか、改めて検討する。

No011 在宅療養超高齢者の老年的超越の意味付けのプロセスー100歳高齢者との対話によるナラティブの分析からー
鈴木美代子 (岩手県立大学看護学部)

日本の高齢者人口は、とりわけ85歳以上の高齢者(以下、超高齢者)人口が増加し、高齢者層の割合が増している。老年期は、65歳から100歳以上の幅広い年齢を含み、加齢に伴い認知・運動の身体機能や生活機能の低下は避けられず、疾患や障害を多重に有する割合が高くなることで、心理的危機に陥りやすくなるといわれる。その一方で超高齢者は、客観的機能側面の低下にかかわらず、主観的幸福感や心理的well-beingの大きな低下はみられず、主観的心理側面に影響する要因が前期・後期高齢者と異なることが示唆されている。増井(2013)は、この背景理論として、TornstamとEriksonの老年的超越(gerotranscendence)理論を論考し、生涯発達の観点から論述している。

本研究は、自宅で暮らす2名の100歳高齢者との対話によるナラティブの分析から、在宅療養超高齢者の老年的超越の意味を探究した。結果、100歳高齢者は、自らの生老病死を受容・統合し、現世を超えた人生の意味付けのプロセスが示された。

No012 不登校者の身体表現と教師による呼応ー不登校経験者受け入れ校におけるフィールドワーク
神崎真実 (立命館大学院文学研究科)、サトウタツヤ (立命館大学総合心理学部)

小中学校における不登校者数は12万人前後を推移している。いちど学校から離れた者にとって、同じ学校に戻ることに負担が大きく、支援の結果登校に至る者は3割にも満たない。そうした中で、不登校者の約85%が高校に進学している。高校への入学を機に学校に参与していく生徒もいる一方で、入学後に不登校が続く生徒も少なくない。そこで筆者は、不登校経験者等を受け入れる高校でフィールドワークを行い、教師の視点と支援方法を描いてきた。これまでは、言語でやりとりされた場面の記録を中心に、生徒や教師の行為の意味理解に努めてきた。しかし、生徒は、身体を通した無言の訴えも行っていた(e.g. カーテンに包まる、教師に抱きつく、泣き出す)。教師も同様に、身体を通して生徒に応じようとしていた(e.g. 生徒の肩を抱える、横から話しかける)。本報告では、不登校経験者による身体表現と教師の呼応についてまとめ、身体と呼応から不登校者支援について考察する。

No013 経験の語りにおいて人称代名詞の変化がもたらす語り及び想起の変化
横山克貴 (東京大学教育学研究科)

「人称代名詞」は語りの中で自己や他者を指す言葉で、自分自身を指す言葉としては1人称代名詞(「私」「僕」等)が用いられる。当然、自分自身を2人称代名詞や3人称代名詞を用いて語るとするのは不自然であるが、こうした特異な人称の語りは経験から距離をとる視点を促すとして、一部の心理療法的介入に導入されている(Seih et al., 2008; Chang et al., 2013)。しかし、この人称の特異な語り方が、どのような語りや想起を促すのかという部分についてはあまり検討されていない。本発表では、自分自身を指す言葉に2人称、3人称代名詞を用いることが、どのような語りの様相を生じさせるのかを探索的に検討したものである。具体的には、研究参加者に実際に自分自身を2人称や3人称を用いた語りを経験してもらった直後に得たインタビューデータから、想起体験や語りの体験において用いる人称代名詞の差異が語りのどのような体験を形作るのかを議論する。

No014 ボランティア活動の特性に関する探索的研究
櫻井由美子 (茨城キリスト教大学生活科学部)

近年、ボランティア活動に関する心理学的研究・検討が多岐にわたり行われ、一定の成果を上げている。しかしながら、ボランティア活動の何が、あるいはどのような側面が当の心的事象(動機・心理発達など)に関連するかについては、筆者が知る限りにおいては、いまだ研究されてはいない状況である。

このような状況を打破するためには、ボランティア活動の特徴や特性をとらえる軸や枠組みが必要であろう。もしもそれらが得られるならば、ボランティア活動と心的事象との関連をより仔細に検討することが可能となるのではなかろうか。

そこで、本研究では、ボランティア活動に関する論文や募集要項等の質的データを分析し、ボランティア活動の特性を多元的にとらえる枠組みを生成した。具体的には、「疾病・障害にかかわる活動」「異文化に関わる活動」「専門に関わる活動」「地域に関わる活動」「自発的関与による活動」「自然に関わる活動」等の枠組みが得られた。

No015 部活における先輩後輩関係規範の成立過程—Bukatsuの文化心理学(3)—
尾見康博 (山梨大学大学院総合研究部), 山崎雪奈 (相模原市立南大野小学校)

日本の中学校は、独特な先輩後輩関係規範の形成基地になっているように思われる。とりわけ部活がその形成に果たしている役割は大きいと考えられ、部活における人間関係の形成過程を把握することは、日本独自の人間関係を理解する糸口になるかもしれない。第二著者が、2015年12月から約1年にわたって、某中学校の女子バスケットボール部を対象に参与観察を実施した。その結果、先輩後輩関係規範は、新入生が入部してすぐに明示的に伝達されるものではなく、きっかけとなる出来事が生じることによって初めて伝達されていた。しかし、先輩からの伝達にはあまり効力がないことが多く、部活全体の規範として定着するには、顧問や教育実習生といった部員以外の年長者からの伝達が必要であった。また、小学生時に同じミニバスケットボールチームでプレーしていた先輩と後輩の間では、先輩後輩関係規範が適用されていなかった。もちろん、指導者や学校の違いなどによって多様な形態がありうるが、先輩後輩関係規範の維持や成立に主として貢献しているのは、当事者たちではない可能性が示唆された。

No016 職務内容および職場環境の変化に伴う給食スタッフの苦悩と意識変容のプロセス
境愛一郎(宮城学院女子大学教育学部), 栗原啓祥(認定こども園 清心幼稚園), 山田徹志(玉川大学 脳科学研究所)

本研究では、保育施設の給食スタッフを対象に、職務内容や職場環境の転換に直面することで生じる苦悩と自身の役割などに対する意識変容のプロセスを明らかにする。なお、本研究では、対象者の経歴を考慮し、栄養士、調理員等を給食スタッフとして総称する。

2005 年の「食育基本法」の施行を皮切りに、保育施設における食育実践やそれに関する研究が加速している(辻村・久保、2015)。こうした動向は、子どもや保育者だけでなく、給食スタッフの地位や専門性のあり方を揺さぶるものと考えられるが、そうした変化に晒された際の給食スタッフの経験については、子どもや保育者を対象とする研究の陰に隠れ、十分に検討されていない。本研究では、学校、児童福祉施設、認定こども園において給食スタッフとして従事してきた S 氏にインタビューを行い、その経験のプロセスを複線径路等至性モデル(サトウ、2009)によって描出することで、上記の課題についてアプローチする。

No017 震災によって身近な人の死別を経験すること——四川大地震を主要事例として PTG の視点から——
董健(茨城大学大学院人文社会科学部)

衝撃的な出来事で傷ついた人にその後肯定的な変化や成長が見られることは、「心的外傷後成長(PTG)」と呼ばれている。本研究では、こころの傷を乗り越えて、物事に対する考え方を変容させ、生活を再建した四川大地震の被災者、とくに身近な人との死別を経験した人を中心に調査を行った。震災後の心的回復過程、さらに自己意識の肯定的変化、心的成長につながる要因の検討を行うことを、本研究の目的とする。調査結果として、震災後、消費態度の変化および娯楽活動の変化がみられる。「物事の結末をよりうまく受け入れられる」という変化も共通していると思われる。そして、国家による復旧期以降の救済政策は自助が中心であり、「人を頼りにできる」という変化は少なかった。他の PTG に関する先行研究でよく見られる「人生に対する感謝」との変化はそれほど見られない。年配者の震災前後の変化は、他の年代の人より少なかった。

No018 ソーシャルワーカーの語りにみる専門性の認識——特別養護老人ホームの生活相談員を例に
植田嘉好子(川崎医療福祉大学), 山本玲菜(環太平洋大学)

本研究では、ソーシャルワークの理念や定義といったあるべき姿からではなく、現場実践の中でソーシャルワーカー自身がその専門性をどのように経験し、認識しているのかについて明らかにする。ソーシャルワーカーの専門性については、世界定義が 2014 年に見直され、また「施設ソーシャルワークの 9 機能」では入所型施設におけるソーシャルワークの役割が明確化された。しかし、現場のソーシャルワーカーは実際に、これらに示される機能や役割をどのように発揮しているのだろうか。本研究では、超高齢社会の中で重要な位置づけにある特別養護老人ホームの生活相談員に焦点を当てる。人生の最終ステージにある特養の利用者にとっては、身体機能の回復や、在宅復帰を目標とすることは現実的には難しい。生活相談員は日々の実践において何に価値を置き、自身の専門的役割をどのように認識しているのか、そのインタビュー内容を基に現象学的に明らかにする。

No019 臨床心理士の実践性と科学性の関連
小田友理恵(法政大学大学院人間社会研究科)

本研究では、反省性(reflexivity)の促進および他者との対話を開くことを目的として、臨床観とオリエンテーションという観点に着目しながら、臨床心理士の実践性と科学性の関連をインタビュー調査によって探索的に調査した。臨床心理士 8 名を対象に半構造化面接を実施し、語りの分析は事例コード・マトリックス(佐藤、2008)を用いて行った。その結果、4つのカテゴリーについて11の主要コードと20の下位コードが抽出された。(1)臨床心理士の専門的活動に影響する「ものの見方」の形成や変化、(2)オリエンテーションの志向のあり様と選好基準の多様性、(3)臨床心理士の専門性の発達における身体知の重要性、実践と研究を両立することについて見出されている倫理的な意味(特に「自分と向き合う」という意味)および教育的意味、そして(4)実践と研究の間の距離に研究嗜好性や現実的な制約が関連していることなど、今後検討すべきいくつかの論点が明らかになった。

No020 竹田による現象学を心理学の概念検討に用いる方法論的検討
小沢一仁(東京工芸大教職課程)

現象学は様々に捉えられているが、竹田青嗣によると現象学的方法とは、確信成立の条件を明らかにすることである。そこで、この竹田の捉え方を心理学における概念検討の方法論として用いる手順を明確にすることを試みる。

No021 サイエンスカフェにおける参与役割
小泉千尋(青山学院大学社会情報学研究科博士後期課程)

本研究のフィールドは、科学技術について専門家と非専門家がカジュアルな場所でお茶を飲みながら対等な立場で語り合うサイエンスカフェという対話イベントである。サイエンスカフェは双方向コミュニケーションによって参加者の社会的学習の場として位置付けられると述べている(Davies、McCallie、Simonsson、L. Lehr、& Duensing、2009)。だが、どのようにすれば、双方向コミュニケーションが可能となるのかは論じられていない。一般に専門家と非専門家という固定的な役割が変化することで双方向性は高まるのではないかといえるのではないだろうか。そこでビデオ分析を用い、サイエンスカフェ参加者の参与役割を明らかにし、またそのことがサイエンスカフェにどのような影響をもたらすのかを検討する。本研究は現在分析途中である。なお、調査にあたっては、対象者に事前に研究目的を説明し、撮影の許可、調査協力の意思を書面にて承諾を得た。

No022 児童のネガティブ情動の表出時における教師の意思決定プロセスの類型
芦田祐佳(東京大学大学院教育学研究科)

児童が教室で表出するネガティブ情動は、児童の学習や仲間関係における困難感を示す指標であり、教師による適切な支援を必要とする。そこで先行研究の多くが、児童のネガティブ情動に対する教師の支援が、児童の学習や発達にどのような影響を及ぼすのかについて検証してきた。しかし、支援を行う教師に焦点を当てた研究は少なく、教師がどのように児童の情動に対する支援を決定しているのかについては十分に明らかになっていない。

そこで本研究は、児童のネガティブ場面における教師の実践の映像を用いたインタビューを行い、児童がネガティブ情動を表出した際の教師の意思決定プロセスについて検討した。そして児童がネガティブ情動を表出する場面の特徴に応じた意思決定の類型を明らかにした。また本研究では、実践映像を用いた研究方法の可能性について考察した。なお、本研究は協力校が設置する倫理委員会の承認を得て実施した。

No023 **ピア・レスポンスにおいて日本語学習者が高く評価する点の変化**
石毛順子(国際教養大学国際教養学部)

本研究は学習者がクラスメートの作文のよい点を見つけ、言語化することにより相手のよい点を伸ばすこと、またよい点を参考にして自分の作文を改善することもピア・レスポンス(以下PR)活動の一環であると捉え、PRを経験していくことで学習者が高く評価する点が変わるかどうか検討することを目的とした。調査は中上級の日本語学習者を対象とした1学期13回の「作文」の授業で実施された。対象者には本研究の目的、参加拒否の権利、匿名性の確保、データの管理について説明し、参加同意を得た。PRはビデオとICレコーダーで記録し、発話プロトコルを作成した。初回のPRと最終回のPRにおいて学習者が他の学習者の作文を高く評価した理由を抽出し、言語形式・構成・内容・その他に分類し、初回と最終回を比較した。その結果、初回では「間違いの少なさ」に代表される言語形式が多く言及されていたが、最終回では全く言及されていなかった。

No024 **がんで身近な他者を亡くした人のレジリエンス—面接データを再分析する—**
渡邊照美(佛教大学教育学部)

人は身近な人を亡くしても、なお生きていく。身近で大切な人を亡くするという経験は辛く悲しい経験であろうが、本当に辛く悲しい経験でしかないのだろうか。近年、ストレスフルな体験をした後の変化として、レジリエンスが注目を集めているが、本研究では、死別経験後のレジリエンスについて検討する。2005年にがんで近親者を亡くされた方18名(男性8名・女性10名)に対し半構造化面接を実施した。そして①死別に対する積極的関与、②死別に対する主体的位置づけの2つから分類を試みた(渡邊・岡本、2006)が、その際のデータをレジリエンスの視点から再分析を行った。死別経験を自己を成長させる契機であったと主体的に位置づけていなくても、環境の変化に柔軟に適応し、喪失を語れること自体が死別後のレジリエンスではないだろうか。発表では結果の詳細を報告する。

No025 **フォークサイコロジーはどのようにナラティブに反映されるのか**
横山草介(東京都市大学人間科学部)

人々が日常生活の中で、互いの行為(action)や心的状態(mental states)について抱いている素朴理論のことをブルーナー(1990)はフォークサイコロジー(folk psychology)と呼んだ。彼は、フォークサイコロジーは文化を表象する機能を持ち、我々の言語行為の一つとしての「語り(narrative)」を介して他者と共有されると考えた。ブルーナーは、ナラティブには個人の志向的状态(intentional states)に付する側面と、個々の文化の中で正当とされる行為のパターンに付する側面とが混在して表れるとし、ナラティブの機能は、文化の中で正当とされる行為パターンからの逸脱を緩和し、理解可能にするような個人の志向的状态の有り様を見出すことにありと主張した。本研究は、その具体をいくつかの事例の検討を通して明らかにすることを目指すものである。

No026 **中国人学部留学生による対話的教室活動におけるルーブリック作成について—記述の分析を中心に—**
福岡寿美子(流通科学大学商学部)

原田・浅津・田中・中尾・福岡(2017)では、ルーブリックを用いた記述式内省活動を行い、評価活動に対する5大学共通の認識の変化のプロセスを探った。

本研究では、本学の中国人学部留学生による対話的教室活動(Peer Response)において、ルーブリックを作成し、その記述内容を分析することによって、本学の中国人学部留学生のルーブリック作成における記述内容の傾向と特徴が明らかになった。

今後は、テキスト分析も行い、中国人学部留学生によるルーブリックを用いた対話的教室活動の総合的考察を行いたい。

<引用文献> 原田・浅津・田中・中尾・福岡(2017)「ルーブリックを用いた記述式内省活動の分析—大学・留学生教育機関のアカデミック・ライティングでの試み—」『2017年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.142-147

**No027 多様な感情が生起する経験への語りー保育者は離職と再就職を結ぶ感情の変容をどのように語るのかー
香曾我部琢(宮城教育大学)**

資格を持っても実際に保育士として働かない人材が全国で約76万人いるといわれている。この潜在保育士の問題は、待機児童解消を目指し、保育施設が増えているものの、そこで働く保育士が不足という問題を生み、さらに、今、保育士として勤める者の疲弊という新たな問題をもたらしている。そのような状況において、保育職を離職や職業継続、そして一度離れたものの、再度、保育職へと戻ってくる再就職の経験が着目されている。本研究では、とくに離職と再就職の間に起る経験、とくに、そこで生じる反実仮想的な思考に伴い現れるさまざまな感情に焦点を当てて、それらの感情がその後の人生、その前の人生の選択や判断に与える影響について検討を行う。

**No028 体験イベントの中での雑談の展開要因：聞き手の働きかけに注目して
町田佳世子(札幌市立大学)**

雑談は場を和ませたり相手との心的距離を縮める効果をもつと言われている。しかし一方で何を話し、どう展開し、どこで終了するかのもつフォーミュラがないことから、雑談はむしろ難しいコミュニケーション課題の1つでもある。

雑談はインフォーマルなコミュニケーションの場だけでなく、討論や診療、ワークショップなど特定の目的を持った場においても生じる。しかし同じ目的で集まっても、雑談が生じ展開する場合と、それほど生じない、もしくは展開しないで終わる場合がある。その違いはどこから生じるのか。本発表は、同じ人が同じ状況で異なる相手と行うある体験イベントのやりとりの録音をもとに、参加者の一方が同一であっても、相手が異なればその最中に生じる雑談の量、話題の数や種類、深度などが異なることを示す。そしてその違いが生じる要因を、特に相手側の働きかけに焦点をあてて考察する。

**No029 アクションリサーチを駆動させる手法としての映像メディアー「名を呼ぶ日」の活動プロセスの報告と検討ー
高森順子((公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構), 青山太郎(名古屋文理大学情報メディア学部)**

映像機器の普及にともない、映像によって研究対象を記録し分析するというアプローチが人文・社会科学の様々な分野で用いられるようになってきた。しかし、映像によるリサーチと現場へのフィードバックあるいはベターメントが異なる水準の実践と捉えられることも少なくない。

本発表では、リサーチ過程での映像撮影を単なる資料収集として捉えるのではなく、研究者と研究対象者のあいだの協働実践として捉え直すことで、そうした制作行為や映像作品が両者の対話の触媒となり、アクションリサーチを駆動させることを報告する。具体的には、震災から22年目に行われた阪神・淡路大震災の追悼のあり方を再考するプロジェクト「名を呼ぶ日」において、その記録映像の制作プロセスを通じて参加者(研究者および対象者)間の対話が創出されたことを分析し、映像メディアの介入が萌芽期にあるアクションリサーチそのものを成立させる側面を有していることを論じる。

**No030 『植物メディア(紅ほっぺ)を介した正統的周辺参加と、参加者の学習過程の実態』
稲泉博己(東京農業大学国際食料情報学部)**

レイヴらの「正統的周辺参加」に則り、実践コミュニティとして、農産物(植物)を学びの『メディア』とする農業現場を取り上げ、参加と学習の過程について明らかにする。対象は新規参入8年目のイチゴ農園主、経験5年(熟練者)と新参のスタッフとし、方法は作業日誌の分析による。結果;①作業場所と内容は、熟練度に応じて農園主によって差配。②コメントには、質的・量的違いが存在。熟練者が新参の時と比べると、現在の新参者と共通するものが多く、植物メディアへの反応に成熟段階による共通性。③農園主の反応も新参者には共通するが、病虫害等植物メディアの状況によって違いが見られ、予測を超えた「状況に埋め込まれた」「インプロビゼーション」による学びが展開されていた。なお本調査では関係者にインフォームド・コンセントを実施し協力の同意を得ており、成果発表に際して必ず事前に公表内容を提示し、承諾を受けることを確認している。

No031 **自殺を美化するディスコースの分析—曾根崎心中**
川野健治（立命館大学総合心理学部）

日本には自殺に許容的な文化があり、それが自殺率の高さに結びついていると指摘されることがある。しかし世界価値観調査によると、日本人はむしろ自殺に対して非許容的であり、スウェーデンなど北欧諸国等のほうが自殺に対して許容的で、かつ自殺率は低い。また、われわれの調査でも、自殺を美化する表現に同意する人は必ずしも多くはない。自殺に対する日本人の態度は多元的であり、意識調査等では抽出されない構造があると考えられる。そこで本研究では、自殺の文化的表象として近松門左衛門作の曾根崎心中を取り上げ、ディスコースとして分析することで、自殺を美しく描く言説の社会文化的構築について検討する。曾根崎心中は、元禄から演じられる浄瑠璃であり、文楽、歌舞伎、映画、作品のプロットを利用した小説、漫画、音楽等として多様に表現され続けているが、鍵となる「心中」自体をディスコースの「消失点」とする構造によって美化されていた。

No032 **許容できない事象に対する共感の構造—コフト理論からみた「死にたい」に対する考察—**
中妻拓也（立命館大学総合心理学部）、川本静香（立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構）、サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

反社会的思想や行動、倫理観にもとる言動などの許容できない事象に対する共感の難しさが指摘される（角田、1998）なか、近年では対人援助の専門職でない、一般の地域住民にもそうした許容しがたい事象に対する共感が求められるようになってきた。その一例に、日本の自殺予防対策における地域でのゲートキーパー養成が挙げられる。

ゲートキーパー養成では、「死にたい」という声に対して共感的に傾聴できるよう訓練(研修)が行われるが、そうした研修を受けてもなお、「死にたい」という、一般には許容できない事象に対する共感に、負担感を感じる民生委員は少なくないのが現状である。このような非専門職が負担に感じる、許容できない事象に対する共感の構造の一端を明らかにするために、本研究では、民生委員を対象とした現行のゲートキーパー研修の内容に対して Kohut の共感理論からその構造を明らかにすることを試みる。

No033 **セクシャルマイノリティの当事者学生における被受容体験プロセス**
鳥越淳一（開智国際大学）、安田和善（開智国際大学リベラルアーツ学部人間心理学科）

セクシュアル・マイノリティの当事者学生がどのような「生きづらさ」を抱え、どのような過程を経て受け入れられたかという被受容体験プロセスを探索的に検討することを目的とした。首都圏の大学のLGBTサークルに所属する8名の学生に半構造化面接を行い、得られたデータはM-GTAを用いて分析を行った。その結果22個の概念、9個のカテゴリーが生成された。当事者の被受容体験へのプロセスに大きく貢献する役割として「LGBTサークルでの体験」がコア・カテゴリーとして見出された。そこには次の3つの特徴があることが分かった。(1) LGBTサークルが精神的居場所、排他的意識の強化、社会的学習の特性を有し、それらが相互作用している。(2) 社会的学習が、当事者の内在化された脅威を変化する。(3) LGBTサークルには精神的居場所や社会的学習の場としての役割があり、彼ら／彼女らのアイデンティティの形成に大きく関与している。

No034 「TEM 図の描き合い」による「転機」経験の反省的考察

土元哲平(立命館大学文学研究科), サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

「転機」は主観的な現象であり、当事者でしか理解し得ない感情や感覚的な経験を含んでいる。そのため「転機」研究においては、インタビューや質問紙調査といった「当事者に対する研究」だけでなく、経験の当事者が研究を行う「当事者による研究」の蓄積も必要である。

しかしながら、これまでの「転機」研究において「当事者による研究」はほとんど行われておらず、また「当事者に対する研究」と「当事者による研究」のそれぞれが、どのような「転機」経験の側面を明らかにするかについても十分に整理されてこなかった。そこで本研究では、2017年1月29日(立命館大学 大阪いばらきキャンパス)に実施された「TEM図の描き合い」ワークショップで得られたTEM図の分岐点に着目し、対話的自己(Hermans and Kempen, 1993)の概念を用いた反省的考察を行い、「当事者に対する研究」と「当事者による研究」の双方の視点から「転機」を記述した際の質的な異同を明らかにすることを目的とした。

No035 浄土真宗の僧侶におけるアイデンティティ形成の研究 ―世襲制の葛藤を中心に―

菅原圭(京都文教大学大学院臨床心理学研究科)

Erikson(1950/1973)は青年期を、アイデンティティを形成しようとする時期であるとしており、その中で重要なトピックをなしているのは職業選択と、それをめぐるモラトリアムである。しかし、我が国の僧侶は、親から家業を受け継ぎ、次世代に繋げるという役割を期待される。そのため、職業選択の自由が前提となっている一般的なアイデンティティ論が、必ずしも当てはまらない可能性がある。そこで本研究では、職業選択の余地のない業種の1つである僧侶が、どのように自らのアイデンティティ形成を行い、僧侶という職業を能動的に引き受けていくようになるのか、について検討してみたい。その方法として、浄土真宗の僧侶(男性17名)に半構造化面接を行い、そのデータをM-GTAを用いて分析した。その結果、8個のカテゴリ、28個の概念が生成された。本研究では「浄土真宗の僧侶」の視点から捉えた「浄土真宗の僧侶がアイデンティティを形成するための葛藤のプロセス」を提示した。

No036 看護専門学校における「社会人学生」像に関する研究

―社会人経験のある看護学生のインタビューの質的分析より―

堀智子(藍野大学医療保健学科看護学部), 宮元博章(兵庫教育大学人間発達教育専攻)

少子高齢社会で看護師需要が高まる中、看護専門学校においては高校卒業後の現役生の減少を受け、現役生以外の社会人の入試枠を設け、学校経営の安定化を図っている。この制度は学校側からの利点だけではなく、志願者側からもキャリア向上、安定的な職の確保などのメリットがあり、「社会人学生」は現代社会の様々な側面からの要請に応じて登場してきている。このような「社会人学生」たちのイメージとして「真面目」で「マメ」な学習姿勢を持つ一方、「頭がカタい」「手強い」人で、教育担当者から敬遠されている。先行研究においては「社会人学生」の学習特性などを基礎看護教育や病院現場での教育側からの視点で取り扱われることが多く、社会人学生が語る「社会人学生」像について語られたものはなかった。そこで本研究では自ら社会人学生と自覚のある看護学生のインタビューを質的に分析し、社会人学生が捉える「社会人学生」像を明らかにしていく。

No037 看護実践能力向上に寄与する主要因子の探求：看護実践における学習行動の観点から
今井多樹子，高瀬美由紀，川元美津子，山本久美子（安田女子大学看護学部看護学科）

看護実践能力向上に寄与する主要因子を検討するために、臨床看護師が認識する「看護実践能力向上に不可欠な職場での学習行動」を表す主要語と構成概念を明らかにした。臨床看護師522名を対象に自記式質問紙調査を実施し、「看護実践能力向上に必要な不可欠な職場での学習行動とは～である」という形式で記述を求めText Miningで解析した。質問紙は所属長の許可を得て対象者に配布し、回答後の質問紙は対象者の同意および自由意志によって無記名で返送された。なお、本研究は、安田女子大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した。回答は253名から得られ（回収率48.5%）、有効回答は227名（有効回答率89.7%）であった。5年以上の臨床経験を有する156名の記述文を解析した結果、言及頻度の高い主要語は『行動・行動する』『研修』『振り返る』『先輩看護師』『知る』などであった。主成分分析と階層クラスター分析により、構成概念として【自己の看護実践】【調べる・聞くことを通して知り得ること】【知識・技術・コミュニケーションの活用】【積極的な学習】【上司・先輩看護師が放つ職場環境下での学習】【素直な気持ちで失敗に向き合うこと】が判明した。

No038 子どもの非行や問題行動をどのように語ることができるのか
ーディスコースとエイジェンシーの視点からの検討ー
北村篤司（昭和音楽大学短期大学部），横山克貴（東京大学大学院教育学研究科），綾城初穂（福井大学大学院）

本発表では、親が子どもの非行や問題行動をどのように語ることができるのか、ディスコースおよびエイジェンシーという視点から検討する。子どもが非行などの問題行動を起こした場合、親を非難する社会的なディスコースが喚起される場合が多い。一方で、筆者が調査を行った「非行」の子どもと向き合う親たちのセルフヘルプ・グループでは、異なるディスコースが参照され、多様な意味づけをもつオルタナティブな語りが構築されていた。本発表では、語りが構築される際に参照されるディスコースのレパートリーを明らかにし、それらがどのように選択され、参照されているかを検討する。ナラティブ・セラピーの文脈では、好ましいディスコースを選択していく力をエイジェンシーと呼ぶが（国重、2013）、エイジェンシーという視点をを用いることで、多様な語りの構築のあり方を検討し、提示することが期待される。なお本研究では、データの収集・引用の際にプライバシーの観点に留意し倫理的配慮を行った。

No039 麻痺した「手」が「錆びたはさみ」で知覚する世界 ～急性期脳卒中者の語りの分析～
藤原瑞穂（神戸学院大学総合リハビリテーション学部）

本研究の目的は、脳卒中発症から半年以内の時期に焦点をあて、人は身体におこった変化をどのように知覚し、どのような経験によって世界に開かれなおしていくのかを記述することである。

研究協力者は、元大工の60代男性Aさん。5回の参与観察とインタビューを行い、その語りを現象学的方法論（村上、2013）を用いて分析した。はじめAさんの視線は麻痺した「手」に留まる。そのため「リハビリ」における改善はすぐに「悪い方に元通り」になるベクトルにかき消され、「絶望」していた。しかし「錆びたはさみ」を持って柘植の木を切ったときはじめて、麻痺した「手」は行為の背景に沈む。そして剪定を賞賛する他者の視線によって、人に「仕事を見せる」自身を捉え直した。逆説的だがAさんは、大事な仕事道具を燃やして世界から消してしまう。すると生活に「楽しみ」が現れ、娘たちに甘えながら暮らす自分を肯定し、「（恩を）返す」未来に、視線が向かった。

No040 重度心身障害児が選んだ「生きる道」を支える母親の語り

田村美子(安田女子大学看護学部), 木下八重子(安田女子大学看護学部), 久木原博子(福岡大学医学部) 藤堂美由紀(安田女子大学看護学部), 沖西紀代子(広島県立大学保健福祉学部), 船津守久(安田女子大学心理学部)

【目的】重度心身障害児を養育する母親がどのような思いで困難を乗り越えながら養育しているかを知り、支援の在り方を検討することである。【研究方法】人工呼吸器を装着している子どもの母親4名に、「困難と感じられたときのこと」「困難をどう乗り越えたか」について半構造化面接を90分行なった。インタビューを逐語録にした後、修正版グラウンデッドセオリーアプローチにより分析を行った。【倫理的配慮】研究への自由参加の保証、途中辞退も可能であること、プライバシーの保護について文書および口頭で説明し、署名によって同意・承諾を得た。安田女子大学倫理審査委員会承認を得た。【結果・考察】重度心身障害児を養育している母親は、子どもが選んだ「生きる道」をできる限りのサポートをしていた。また、子どもの障害をありのままに受け入れ、外に出て世界を広げる行動を取り、地域に受け入れられるように子どもの居場所づくりをしていた。

No041 国際結婚夫婦の海外移動に伴う夫婦関係の変容(2)ーキャリア形成の視点からー
矢吹理恵(東京都市大学メディア情報学部)

国際結婚夫婦では居住地域の文化と個人の文化の同一性において、夫婦間で差が生じる。すなわち、①居住国出身で居住地域の言語・習慣・社会事情に通じた側と②異文化出身のためそれらに通じていない側に分かれる。矢吹(2008、2009、2015)は、日本在住の日米国際結婚夫婦の地域社会での位置取りをa)「地域密着型」、b)「異文化を地域に発信型」、c)「地域離脱側」に分類し、a)とb)は日本人妻が、c)はアメリカ人夫が主導し、主導する側が家庭文化や家族のライフコースの決定に深く関与することを指摘している。

国際結婚夫婦は生涯発達を通じて夫の国、妻の国、第三国を「往還」するが(渋谷 2014、川上 2013)、それは夫婦関係及び夫と妻それぞれのライフコースにどのような影響を与えるのか。本研究では、日本人妻が高学歴・専門職の国際結婚夫婦が夫の国に移住した場合の夫婦関係の変容を、キャリア形成の視点から検討する。

No042 発達障害児の母親の迷いの語りー対話志向インタビューにおける他者の声、身体からの声、つながりの兆し
沼田あや子(首都大学東京人文科学研究科)

本研究は、発達障害児を育てる母親との対話を通して、「しなやかな実践の物語」(沼田、2016)を紡げずにいる母親のなかでなにがその妨げになっているのかを明らかにすることを目的とした。聞き取りの方法は、ボームの対話理論をもとに研究者も自身の思いを差し出す対話志向のインタビューを試み、母親の「声」の出どころ・向かうところの変化も考察の対象とした。倫理的責任から、まず研究者が協力者に再度インタビューをする理由を開示した。そのうえで、回答拒否の自由と個人情報に配慮した表記にすることを説明し、承諾を得た。語りの分析の結果、母親役割の囚われとケア経験による共鳴によって、引責・免責の線引きが困難になり、母親が子を過剰に引き受けていることが明らかになった。また、対話志向のインタビューのなかで、母親の言葉は、内在化した他者の声から始まり、身体からの声になり、最後にはインタビュアーに向けた声となり、対話による意味の共有の兆しがみられた。支援実践における「理解する」ということを問い直す研究となった。

No043 東日本大震災を日本の外で経験すること—震災という共同体体験の共有／非共有と経験の語りにくさ—
栗本綾子（一橋大学大学院社会学研究科）

大規模災害の心理的影響は、震源地から遠く離れた場所にも及ぶことが先行研究により示されているが、国境の外で母国の大規模災害を間接的に体験した人々について研究されたものは極めて少ない。本研究では、インターネットによる選択および自由記述式アンケート調査を行い、東日本大震災発生当時、日本国外に在住していた日本人 39 名から回答を得て、彼らの経験とその語りを分析した。分析の結果、調査協力者たちの語りからは、震災という共同体体験を共有しないことによる経験の語りにくさが浮かび上がった。そして彼らの経験の語りにくさは、日本への帰国時に周りの人々と震災についての会話をした際、あるいは、5 年後に自身の震災経験を振り返ったときにあらわれる。すなわち、経験の語りにくさは、一つには自分と比べてより直接的に震災を体験した人と話すとき、もう一つには、時間の経過とともに一層顕著に感じられるようになることが示された。

No044 論文内に生じたずれとその要因—あるケース・スタディ研究の分析—
香月裕介（神戸学院大学）、伊藤翼斗（京都芸繊維大学）、大河内瞳（立命館大学）

質的研究を行い、その結果を論文にまとめる際、論文に一貫性を保つことが重要であるが、様々な要因から一貫性を保てず、ずれが生じることがある。本発表では、発表者の一人が行ったケース・スタディ研究を対象に、論文内にどのようなずれが生じているかを分析し、その要因を考察した。

分析の結果、①協力者選定段階と調査及び分析段階における協力者の捉え方、②ケース内分析とケース間分析における研究者の立ち位置、③研究者の立ち位置が要請する記述と実際の記述の仕方の三点において、ずれが生じていた。これらのずれの要因は、現実的な制約に加え、分析方法の検討が十分でなかったこと、研究者がずれに無自覚であったことだと考えられる。

こうしたずれは、論文作成において避けたいものである一方、読み手の混乱を招きかねない。そのため、ずれが生じうることを自覚し、そのずれに適切に対処することが求められる。本発表をその際の一つの資料としたい。

No045 高齢者の戦争体験の語りから看護学生が学んだこと
稲垣絹代（聖泉大学看護学部）、吉岡萌（名桜大学人間健康学部看護学科）

超高齢社会を迎え、必然的に多くの高齢者が看護の対象になっている。看護学生にとって、高齢者理解が重要であるが、難しくもある。高齢者理解を促進するために、高齢者看護学概論の講義開始前に、1 人の高齢者の生活史のインタビューを課した。戦争体験の語りからの、学生の学びを明らかにすることを目的とした。データ収集は 2015 年 1 月、2 年次看護学生 16 名のレポートから研究目的に沿った内容を取り出し、質的統合法（KJ 法）で結果をまとめた。倫理的配慮として、授業終了し成績採点后、参加の自由意志、プライバシーの尊重などを説明して研究協力を求めた。沖縄・奄美の高齢者は 14 名、北海道 1 名、熊本 1 名であった。年齢は 79 才から 95 才、女性が 11 名、男性 5 名であった。高齢者が体験した戦争の悲惨さ、親族の死亡、自身の障害、現在まで残っている心の傷などが語られ、学生は生命の大切さ、戦争を繰り返さない決意などを学んでいた。

**No046 ある自閉症青年との融即体験—音楽運動療法における身体性—
勝浦眞仁（桜花学園大学保育学部）**

ある1人の自閉症を持つ青年の音楽運動療法場면을エピソード記述にて描き出す。療法場面では、発表者が彼とともにコンガをたたきセッション継続的に行ってきた。その中で、彼の動きと発表者の動きが同期する場面や、コンガを相互に叩き合う中で気持ちの高まりがみられる場面があった。そういった場面を詳細に描き出していく中で、音楽運動療法場面では身体性の問題が重要な位置づけにあることが見出されてきた。特にワロン理論の融即の観点から、セッションを検討していくことで、彼の身体性と発表者の身体性とが重なりと隔たりを繰り返していく中で、彼の意識体験に様々な芽生えのあることが見出せることとなった。以上から、本研究ではワロンの融即の観点から、発表者が自閉症の青年と行ってきたセッションを検討し、音楽運動療法における身体性について論じる。

**No047 祖母になった女性の認識—初めて祖母になった女性を対象として—
藍木桂子（新潟大学大学院保健学研究科）、坂井さゆり（新潟大学大学院保健学研究科）、
関奈緒（新潟大学大学院保健学研究科）、関島香代子（新潟大学大学院保健学研究科）、
宮坂道（新潟大学大学院保健学研究科）**

超高齢社会における寿命の延伸に伴い、祖母として過ごす期間が延びたことで、祖母になった女性の心身の健康維持が課題となっている。そこで、女性が祖母になった経験の認識を明らかにすることを目的とした。方法は文章完成法を用いた自記式質問紙調査とし、対象は初孫を授かって6年以内の女性65名とした。分析は質的統合法（KJ法）で、分析テーマは「祖母になった私の認識」とし、娘を持つ女性と息子を持つ女性に分類し、分析した。結果、娘を持つ女性の場合は、元ラベル275であり、類似するラベルを統合し、最終表札は7であった。「祖母になった私の認識」は【孫はパワーの源：充実した生活への感謝】を中心に、娘・夫との関係性を重視し、今後の生き方を見据え、娘や夫との関係を再調整していた。女性の今後のライフプランを踏まえた、家族との関わりの重要性が示唆された。

**No048 越境による「失われた場所」の回復——カルト体験者の退会後の回復プロセス——
廣瀬太介（滋賀県教育委員会）**

宗教カルトを退会した人は、それまで所属していた教団という共同幻想の場所を失っただけでなく、現実の世界に戻ろうとしても所属する場所を得られないでおり、二つの場所のあいだを漂うような体験をしている。カルト体験者が戻ろうとしている現実の世界は、入会する時に捨てた場所であるだけでなく、入会中に恐怖心を植えつけられ人や金などを搾取していた場所でもある。そのため、体験者にとっての現実の世界は、戻りたくても戻ることに抵抗のある場所でもある。本研究では、教団と現実の世界という二つの「失われた場所」のあいだを漂い続ける体験者がどのようにしてこの境界域を越えて生きる場所を獲得していくのかを、体験者が経験した心理過程を分析することで明らかにしたい。発表では、分析の方法として複線径路等至性アプローチ(サトウ、2009)と対話的自己(Hermans、1993)を併用して報告する。

No049 現場発看護学の実践知の集積を目指した事例研究(1)：事例研究の科学性についての検討

齋藤凡(東京大学医学部附属病院), 野口麻衣子(東京大学大学院医学系研究科), 山花令子(東京大学大学院医学系研究科), 辻村真由子(千葉大学大学院看護学研究科), 池田真理(東京女子医科大学看護学部), 山本則子(東京大学大学院医学系研究科)

看護とは、対象となる人の経験世界への深い理解と共感、ケアリングの態度に根差しつつ、心身をまたぎ高度に統合化されて提供される対人援助の実践である。また、目的達成のために多様な実践が組み合わせて提供されるばかりでなく、一つの実践が多様な目的達成のために提供されるという複雑な構造を特徴とする。

我々は、卓越した看護実践の知の構造を明らかにし、他者が学べるものにするを旨とし、現場発看護学の実践知の集積を目指してきた。このような統合化され特定の文脈の下で提供される看護のプロセスは、状況とともに生きた姿のまま取り上げ、解釈的説明を加えた形で提示することで、新たな実践の基礎となると考え、その方法として事例研究に取り組んでいる。

本発表ではこの現場発看護学の事例研究の方法を提示し、事例研究において議論的になりやすい科学性(一般化可能性、客観性、再現性、妥当性・信頼性など)について文献を踏まえて検討したい。

No050 現場発看護学の実践知の集積を目指した事例研究(2)：現象学との関連

吉田滋子(東京大学大学院医学系研究科), 山花令子(東京大学大学院医学系研究科), 村山陵子(東京大学大学院医学系研究科), 柄澤清美(新潟青陵大学大学院看護学研究科), 榊原哲也(東京大学大学院人文社会系研究科), 山本則子(東京大学大学院医学系研究科)

筆者たちは、臨床に即した看護の実践知を文脈と共に取り出し共有していくために、臨床看護の実践者と看護研究者が協同する形の事例研究に取り組みながら、その方法論を開発中である。本研究では、我々の事例研究の方法と現象学との関連について検討することを目的として、これまでの研究経過を振り返った。

卓越した看護師の実践はしばしば意識せずに行われているが、実践者と研究者との対話を通して意識化と言語化が進むことが明らかになりつつある。臨床場面での対象の捉え方や判断は各人の積み重ねて来た経験から生じるものであり、対話の中で互いの経験に基づいた理解の擦り合わせが行われることによって共通理解が得られていくということは、現象学の考え方に重なる。また、看護師が事例を語る際に主語が患者になり易く、対象を主体として捉え、かつ身体的に共鳴していることも、現象学で展開されている他者論や間身体性をめぐる議論に通じると考えられる。

No051 妊娠期に予想外の出来事を体験した一夫婦に関する現象学的記述

岡本留美(明治国際医療大学看護学部)

様々な出生前診断が広がる中で、通常の妊婦健診で予期せず胎児の異常を知る機会も少なくない。予期せず胎児の異常を知り出産・育児を行った一夫婦の体験を記述することを目的に夫婦個別に面接を行った。研究施設の倫理委員会承認後、対象者に文書及び口頭で説明し同意を得た。分析方法はGiorgiの現象学的アプローチを参考にした。研究参加者は、Aさん(40歳)と夫(38歳)で妊娠28週で水頭症疑いと診断されその後、専門医療機関で完全脳梁欠損症と診断。現在、子ども(1歳8か月)は発達遅延なく経過。Aさんと夫の体験は、1. 妊娠期における予想外の診断に衝撃を受ける、2. 生まれてみないとわからないと希望を抱く、3. 子どもが無事に生まれたことに安堵する、4. 子どもの健やかな成長に安心する、5. 人生観や夫婦関係が変容する：予想外の出来事を体験しながらも「生きているだけで素晴らしい」と捉え、互いをベターハーフと認識するなど夫婦関係の変容を遂げていた。

No052 **保育の場における「想定外」—子どもたちと保育者のいとなみ—**
山下愛実(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

本研究の目的は、保育の場における「想定外」で繰り返される、子どもたちと保育者のいとなみを明らかにすることである。ここで「想定外」とは、保育者の想定から外れた出来事により保育者に驚きと混乱がもたらされ、早急な対応が求められる状況を指す。本研究では、K幼稚園3歳児クラスにおいて1年間の参与観察と保育者へのインタビューを行った。分析では、まずインタビューによって得た保育者の語りから「想定外」に関する語りを抽出した。その結果、保育者はおもらしやお茶がこぼれるといった「想定外」の状況を、その対応に追われるがゆえにネガティブに捉えていたことがわかった。次にこの「想定外」の状況の中で子どもたちはどのように過ごしていたのかを、筆者の観察記録をもとに検討した。その結果、子どもたちはこの保育者にとってはネガティブな状況に対して遊び心をもってかかわったり、その状況と関係なく楽しんだりしていたことがわかった。

No053 **親は子どもとの遊びをどのように楽しむのか**
富岡麻由子(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

本研究では、親は遊びのなかでどのように子どもとかかわり遊びを楽しむのかを探索的に検討することを目的とした。子どもと遊ぶことが楽しいと話すある母親と子ども(6歳)の家庭での様子を2時間観察し、そこでみられたふたつの遊びのうちのひとつ「お人形隠し」(どちらかが部屋の中で人形を隠しもう一方がそれを見つける遊び)における親子の相互行為の分析を行った。結果、母親が肯定的な情動とともに子どもの隠し方の単純さを指摘したり、逆に隠し方の発想に驚き楽しむ様子がみられた。また、「大人」である自分はすぐに見つけられることに言及し、人形が見つかりにくい隠し方(音の立て方)を子どもに伝え母親自身もその隠し方を実践していた。このことから、「子どもらしい」といえるような子どものありように着目すること、同時に対等な遊び相手となるよう子どもを引き上げ、子どもと一緒に遊びそのものに取り組むことが、親が子どもとの遊びを楽しむ要因になることが示唆された。

No054 **パフォーマンスとしての英語絵本の読み合いの探索的記述：『演ずる』ことで何が生まれているのか**
佐藤由紀(玉川大学リベラルアーツ学部)、松本由美(玉川大学リベラルアーツ学部)、
梶川祥世(玉川大学リベラルアーツ学部)、

「パフォーマンス」を「一組の特定の観察者たちの前に継続的にいる期間に生じる「有る個人の挙動全体(ゴッフマン、1974)」であるとしたら、実験の場でおこなわれる実験対象者の振るまいは、実験者に対する「パフォーマンス」であると言えるだろう。

本研究は、養育者と子どもの英語絵本の「読みあい(石川、2014)」場面を対象に、初めて読み合いをした回とその2週間後では、養育者と子どもの「パフォーマンス」がどのように変化したのか、発話・視線・ジェスチャーに注目し、記述をおこなった。実験対象者は8名(親子4組)、子どもの平均月齢は20.5(SD=1.8)であった。

実験において養育者は、子どもを「共同参加者」として捉え、「チーム」として「絵本を読み終えること」を本実験の課題として理解し、時に協力的ではない「共同参加者」と懸命に「場(清水、2003)」を形成しながら、課題を達成していた。

No055 非言語的コミュニケーションを言葉にすることの意味ー大学生を対象としたスキグルの質的分析ー
小林規江(明治大学大学院)

スキグルとは、一枚の紙にセラピストとクライアントが線を放ちあって、一つの絵に完成させる、臨床現場で用いられることの多い、非言語的コミュニケーションが主体となる心理面接技法である。本研究では、大学生130名(有効回答率93%)を対象とした自由記述を採用し、スキグルにおいて線を描いた時、相手が仕上げている時、そして2人で仕上がった絵を眺めている時にどのような気持ちになったかを問うた。その結果、どんな線が相手にとって描きやすいだろうかと相手を思いやったり、難しい線を放って申し訳なく思ったりする気持ち、あるいは自分自身の中に沸き起こる困惑の感情が自由に記述されていた。これらの結果を、KJ法を用いて分類した。非言語的なコミュニケーションを言葉にすることの困難さも認められたが、体験に沿った言葉にできることによって、うまくいかなかったと感じられたスキグルでもスッキリする感じを得られることが考えられた。

No056 沖縄県離島における包括的心理支援モデル構築に向けた方法論の検討
楠本和歌子(神戸山手大学)

心理支援に関して、都市部では人材が充実している一方で、僻地では人材の確保と定着、支援の質の担保、他機関との連携方法など様々な課題が挙げられており、都市部の支援モデルが適用できない場合が多い。そのため、当該地域の歴史、地理的・気候的特性、文化的背景、生活様式に根ざした支援モデルの構築が急務である。発表者は、僻地の中でも沖縄県離島を取り上げ、医療、保健・福祉、学校・教育、労働・産業、司法・矯正領域の各現場でインタビュー調査を行い、木下(2003)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて現場のニーズに即した包括的心理支援モデルを構築する研究に着手している。本研究は、生成されたモデルを基に当事者たちと対話協働を行いながら具体的な実践方法を検討し、その知見を現場に還元するまでを目的としている。本発表では、研究全体のプロセスと方法論について検討を行う。

No057 沖縄の激戦地に生まれ、本土にて労働組合活動をした男性の病気の経験
吉岡萌(名桜大学人間健康学部看護学科)、大城凌子(名桜大学大学院看護学研究科)、
稲垣絹代(聖泉大学看護学部)

沖縄は他の都道府県とは異なる歴史的背景や文化、風習を持つ。先行研究では沖縄出身者の特徴と病気の経験とを関連させた研究はなかった。本研究は、高度経済成長期に関西に移住した沖縄出身者が病気をどのように体験し、その体験をどのように意味づけているのかを1名(A氏)へのライフストーリー・インタビューから検討した。本研究は所属機関の倫理審査委員会にて承認を得た。A氏(60代、男性)は定年後に前立腺がんと診断されたが、病気を前向きに受け止め、自分なりの方法で病気と向き合うことができていた。彼は本土で苦しい時期を労働組合活動に専念し、本土で安定した生活を築くことができた経験から導き出された、「人を大事にする」という価値観が、病気のときに活かされ力となったと考えられた。A氏は病気の経験を沖縄出身であることと関連して語りはしなかったが、沖縄での生活体験が病気の経験にも影響していることが示唆された。

No058 大学生の就職活動の語りにみる「揺らぎ」と青年期イニシエーション体験—複線径路・等至性モデルを用いて—
伊藤真平（東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科）

大学生が就職活動を経て社会人へ移行する中での心理的体験を「イニシエーション体験」として、分析心理学的視点から検討した。調査は、入社2年目までの社会人（男女各5人）に、心理的特性を見る質問紙、樹木画、就職活動に関する半構造化面接を行った。本論では、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model: TEM）を用いて体験過程の可視化を行った半構造化面接の結果を報告する。分析の結果、【Ⅰ期：就職活動の失敗体験で落ち込む時期】、【Ⅱ期：他者の影響を受けて生じた「揺らぎ」を感じながら就職先を決めた時期】、【Ⅲ期：自生した「揺らぎ」を感じながら社会参入を果たした時期】に分けられ、二度の「揺らぎ」が、力動的な成長促進的意味を持つことが考えられた。そして、女性群では明確に示されなかったものの、男性群の語りに、「揺らぎ」を契機とする親からの内的分離や、分析心理学的心理療法過程での「死と再生」に重なる過渡体験が見出され、男性の就職活動がイニシエーション体験として機能することが示唆された。

No059 東京都多摩地区のコミュニティスペースにおける活動のデザインに関する研究
篠川知夏（東京都市大学大学院）、篠川知夏（東京都市大学大学院）、小池星多（東京都市大学）

本研究の目的は、東京都多摩地区の複数のコミュニティスペースおよび人々の活動をフィールドワークし、人々の間でなされる行為を交換の視点で考察し、地域における新たな経済活動とワークスタイルの可能性を見出すことである。コミュニティスペースとは、地域で人々が集まる場所のための場所であり、人と人が交流し、つながることが目的とされる場所である。フィールドワークの結果、以下の3つのことが明らかになった。

（1）人々の間でなされる交換は、貨幣やモノだけでなく、技術や知識、情報、感情など様々なものを対象としている。

（2）コミュニティスペースは交換の拠点としての役割を持ち、コミュニティスペースに参加している人々の地域での働き方を変える場となっている。

（3）地域でなされる交換は、交換と同時に人々の活動や内面的な変化など、多様な変化を引き起こす新しい形態である。

なお、インタビューを行った対象者には発表の許可を得ており、インタビュー対象者の表記を明確にしないことで、プライバシーに配慮した。

No060 女性 Bi セクシャルを生きる—語る内容と語り合う行為の質的な検討から—
金智慧（東京大学大学院教育学研究科）

今日、性的マイノリティ研究の殆どはLesbianやGayを対象にしており、Bisexual（以下、Bi）を対象にした研究は、未だ置き去りにされている（Fox、2004）。このような現状により、Biの複雑な両性愛的傾向は単純化され（Klein、1997）、臨床心理学的な観点からはLesbianやGayよりも深刻かつ複雑なBiの心理的問題が注目されずにいる恐れがある（Cheryl、2009）。

本研究では、他の性的マイノリティとは異なる存在としてBiを捉え、特に心理援助が強く求められている女性Bi（Miller、2009）の自覚前から現在に至るまでの一連の時系列な体験の語りに注目した。その結果、三つの「女性Biの自覚モデルと特徴」と「その過程における心理的な悩み及び葛藤」に関する知見が得られ、今まで沈黙してきた女性Bi当事者達が、自分の体験を語るの意味について考察できた。また、Biとカテゴライズしながらも確信が持てずにいる「不確実な自分」に、当事者達が初めて気づき、向き合おうとする姿を捉えることができた。

**No061 発達障害当事者、保護者、研究者による語りの視点の比較—研究者が記述したエピソードを手がかりとして—
司城紀代美(宇都宮大学大学院教育学研究科)**

近年では成人の発達障害当事者による研究や、本人の語りを対象とした研究が数多くみられるようになった。一方で、小中学校における発達障害児やその特徴がみられる子どもに関する質的研究では、子どもたちの言動を研究者が観察し、事例やエピソードとして分析することが多い。本研究は、筆者が印象に残る場面として蓄積してきたエピソードを、小中学校時代を通じてかかわりをもってきた発達障害当事者である高校生、その保護者と共有し、研究者である筆者自身も含めた三者による語りを分析する。エピソードを手がかりとすることで、それぞれの視点からの体験の意味づけが行われると考えられる。それらの比較を通じて、研究者によるエピソードの記述の意味についても考察したい。なお、研究発表に際しては、本人、保護者の同意を得ている。

**No062 トランスジェンダーを生きるという体験の「こと」的側面
町田奈緒子(京都大学人間・環境学研究科)**

従来のトランスジェンダーに関わる研究は、彼らの実態について、悉皆的・量的に把握することを目的として実施され、当事者の主観的な体験世界については、十分に明らかにされてきたとは言えない。しかしながら、生育史などを踏まえて彼らの体験を理解することは、当事者の実感に沿った支援を考えるにあたって重要である。

そこで、本研究は、戸籍上男性として生まれ、現在は女性ホルモンを投与中の協力者1名の語りをもとに、トランスジェンダーを生きるという体験の豊かな諸相を描き出すことを目的として実施された。インタビューの結果、自分にとっての理想に向かって外見を作り上げることが一種の「擬態」であると眼差されることに伴う苦痛や、他者から眼差される身体と生きる身体、性の複層性といった作業概念が抽出された。

なお、本研究を行うにあたり、本人に書面にて確認をし、研究目的以外では使用しない旨を伝え、署名をもって同意を得た。

No063 **授業における教師と子どものずれ**
塩野入愛（お茶の水女子大学大学院修了）

ヴィゴツキー（2013）は、子どもの個人的な経験を通して発達する概念を生活的概念、学校教育の中で教科教育を通して発達する概念を科学的概念とし、その両者が結びつくことで概念は発達するとしている。実際に小学校の教育現場では、体験的な活動を通して学ぶことと体系的な知識を得ることの両方を大切にしている。しかし、その両者はすぐに結びつくものではなく、実際には教師と子どもがコミュニケーションをとる過程でお互いのずれを認識し調整していくと考えられる。そこで、本研究では授業における教師と子どもの間の科学的概念と生活的概念のずれがどのように生じ、調整されるのか検討した。方法として、小学校4、5年生の算数の授業の事例を収集し分析を行った。なお、倫理的配慮として事例に登場する児童名はすべて仮名とした。授業中の子どもの視点からどのように教師とのずれが生じていることを認識し、これを調整し、乗り越えようとしているのか考察する。

No064 **参加観察とインタビューの順序性に注目した研究方法の検討ー看護師長の看護実践の分析からー**
菊地ひとみ（東京医療学院大学）

本研究は、病棟で看護師長（以下、師長とする）がいかに実践しているかを探究した研究のフィールドワークとそのデータの分析の特徴を検討することを目的とした。

フィールドワークは、最初に師長に同行して参加観察を行い、その直後に師長に経験を語ってもらったり研究者が参加観察で気になったことを問う非構造化インタビューを行った。フィールドノーツには、師長のふるまいや行動が研究者の視点で記述された。そのふるまいや行動のいくつかは、インタビューでの研究者の発問や師長自身の語りを契機に想起され語られた。師長の視点での語りは、参加観察では記述されなかった看護実践の意味やはっきりとは自覚されずに行われていた実践を浮かびあがらせた。このような実践とその意味は、参加観察で記述されたこととその後のインタビューデータを組み合わせ比較したことにより明らかにできた。

本研究は、所属機関と調査施設の研究倫理審査の承認を得て実施した。

No065 **フィールドノーツとインタビューデータのずれを活かした分析方法の検討ー救命救急センターにおける家族への看護実践の記述に注目してー**
伊田裕美（首都大学東京大学院人間健康科学研究科）

筆者は、救命救急センターにおける家族への看護実践がどのように成り立っているのかを、現象学を手がかりに記述的に探究することを目的として研究に取り組んだ。救命救急センターに勤務する看護師4名に対し、勤務中の参加観察とその後インタビューを行い、フィールドノーツ（以下FN）とインタビューデータ（以下IN）の2種類のデータからの実践の記述を試みた。本研究は、所属機関の研究倫理審査の承認（15091）を得て実施した。本報告では、FNとINという異なる2種類のデータを組み合わせた分析の実際と、組み合わせたからこそ浮かび上がる実践を検討した。その実践はFNとINとの間にずれを生じさせ、そのずれが実践の背景にあるものや行為の先にあるものを明らかにした。また、問いかけに対し、言いよどみがみられることもあった。その語り方が実践のあり方を表し、意図的に行っている実践とはっきりと自覚するその手前の実践の違いを浮かび上がらせた。

**No066 現象学的研究におけるクリティークの視点—読む、書く、読まれる—
村上優子、羽川綾子、池口佳子、伊田裕美（首都大学東京大学院）**

質的研究の論文を吟味するために、これまでに論文の構成要素にそったクリティークの基準や評価の視点がいくつか提示されている。それらには、基準や評価の視点を満たしているかを判断するための具体的なチェック項目や判断基準が示されている。これらは、質的研究を吟味する一つの手がかりにはなるが、同一の判断基準で評価することは難しい。特にあらかじめ決まった手順やマニュアルのない現象学的研究は、方法や結果の記述も多様であり、どのような項目があるかということよりも、どのように考えたかという思考の道筋が吟味されなくてはならないからである。実際に、既存の評価基準をもとにクリティークを行なったが、現象学的研究として論文をクリティークしたことになるのだろうかかと疑問をもった。そのため、既存の基準や評価の視点を参考にしつつ、現在、試行錯誤しながら現象学的研究に取り組んでいる私たちの視点から判断の手がかりを創ることを試みた。

**No067 同じ場面における2つの「データ」が意味すること—外傷性脊髄損傷患者についてのフィールドノートと録音データ—
村上優子（首都大学東京大学院）**

外傷性脊髄損傷患者は、突然の受傷を機にこれまでの当たり前が一変する。特に、受傷後間もないこのような患者は、どのような経験をしているのだろうか。臨床現場での患者とのかかわりから、振り返って語ってもらうことだけでは汲み取れない患者の経験があることを実感した。そのため、研究参加者と同じ場に身を置き、同じ時間を共有することにより研究参加者の経験に立ち会いながらデータ収集ができるよう、フィールドワークを実施している。今回の研究では、同じ場面について、2つの「データ」が存在することになった。一つは、フィールドノート、もう一つは、録音データである。それでは、これらの「データ」は、どのような意味をもっていることになるのだろうか。本稿では、それぞれの「データ」を示しつつ、このような「データ」の質の違いが患者の経験の探究にどのようにかわるのかを検討する。

**No068 夫の海外赴任に同行する妻のキャリア
鈴木清美（藤沢市保健医療センター）、青柳美樹（国際医療福祉大学）**

女性は、ライフサイクルの中で、結婚・出産・夫の転勤など、周囲の「重要な他者」によって自己を根こそぎにされる可能性が大きいと言われている。先行研究の事例においては、夫の海外赴任に同行する妻は、「現地社会から孤立して疎外感を感じ、自分は成長していないと自己不全感に悩む」「夫から独立できなくて主体性を失う」「社会的役割を失うことでQOL（クオリティオブライフ）を下げたり自己肯定感を低くする」などの問題が報告されている。

これらの問題の実態調査をするために、2016年7月～8月にH国とI国において12人の妻にインタビューを実施した。本研究においては、12人の中で、キャリアに係る話題を多く話してくれた妻のインタビュー結果をもとに、実際に海外において妻はどのようにキャリアを紡いでいるか、キャリア継続についての困難、キャリア構築への思い、海外赴任に同行することの意味づけなどを明らかにする。

No069 **「Xがない。YがXです。」の意味とは何か～高知県黒潮町を事例に～**
李勇昕(京都大学防災研究所), 矢守克也(京都大学防災研究所)

近年、地域の発展において、「地域主体」が求められている。しかし、地域における財源不足、人口流失、高齢化などの問題により、「地域主体」の実現は困難である。この問題の背景には、国が地域に「Xをあげましょう、Xを援助しましょう」というパターンリズム(温情的庇護主義)の構造が存在している。本研究は、このような構造を打破するために、高知県黒潮町の「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」という町の「哲学」の事例研究を行った。この「哲学」は、地域が単に国からXの援助をもらうことではなく、地域自身が生み出したYをXにすることを意味している。本発表は、インタビュー調査、参与観察および文献収集の研究方法を用いて、黒潮町から生まれた「Xがない。YがXです」の言葉およびその事象を、真木悠介の「Xからの疎外/Xへの疎外」のコンセプトに基づいて考察し、「地域主体」の新たなモデルを提示する。

No070 **看護師の直観に基づく意思決定に関する文献レビュー**
山田理絵(西武文理大学看護学部), 岩沢純子(西武文理大学看護学部)

目的: 看護師の直観に基づく意思決定の特徴について整理し、今後の研究課題と示唆を明らかにする。

方法: PubMed、MEDLINE、CHINAL、医学中央雑誌 Web版を用いて”intuition(直観)”、“intuitive”、“decision-making(意思決定)”、“nursing(看護)”、“nurses(看護師)”をキーワードに2017年4月までに発表された論文を検索した。抽出された315件のうち採用条件を全て満たした24件をレビューの対象とした。

結果: 経験年数や熟達レベルとの関連をみた研究やクリティカルケアに携わる看護師に焦点を当てて研究が約半数を占めていた。初心者から達人まであらゆるレベルの看護師が精通している場面で直観に基づく意思決定を行っていた。看護師はそのストラテジーを信頼し、育む方法を見出していた。

結論: 熟達レベルにより、直観に基づく意思決定を育む方法が異なることが推察された。初心者が、より早い段階で卓越したストラテジーを活用できるプログラム構築の必要性が示唆された。

No071 **医学的理由により人工妊娠中絶をした母親の「我が子」への体験のあり方**
管生聖子(大阪大学大学院人間科学研究科)

妊娠経過中に重篤な医学的問題が見つかり治療法がない場合、人工妊娠中絶を選択するケースがあるが、その際の心理的支援を提供するためには、当事者にとって人工妊娠中絶体験がどのようなものであるか知る必要がある。

本研究では倫理的配慮に留意し、妊娠中期に人工妊娠中絶をした一人の母親の語りを現象学的手法により分析した。調査では、母親が夫や家族に求めるものは「我が子」への眼差しであり「この子がちゃんと居た」ことを共有できる関係であることが語られた。また、人工妊娠中絶の語りでは行為主体者が変化してゆく。「手術」という第三者が主体となる表現から「生まれる」という赤ちゃんが主体となる可能性を含む表現に変化し、語りが進むと「産んだ」という母親自身が行為主体者となる表現をとる。同時に「出てきて」と赤ちゃんが行為主体者となる語りへ変化した。語りに現れる主体の変化は母親の体験と心理に大きく影響していることが示唆された。

No072 高齢者と非高齢者におけるインプロ（即興演劇）の意味づけの乖離：「ボケ防止」をめぐる園部友里恵（三重大学教育学部）

本研究は、高齢者インプロ劇団「くるる即興劇団」を対象に、非高齢者である主宰者（＝発表者）と高齢者である参加者のインプロの意味づけの乖離とその変容を、自己エスノグラフィーにより明らかにするものである。

発表者は、高齢者の演劇活動が「介護予防」という観点から意味づけされることに違和感を持ち、既に要介護の者も含め多様な高齢者を包摂し得る演劇活動としてインプロに着目し、「高齢者だからこそできる即興表現の探究」を目的とする「くるる即興劇団」を結成した。

一方で、劇団員である高齢者は、「ボケ防止」のためにインプロを続ける者も少なくなかった。発表者は、当初そうした考えに違和感を持ち、劇団員が「ボケ」を「防止」すべき対象とみなさなくなることを目指して活動を進めてきた。しかし、劇団員の「老い」に対する思いを見聞きする中で、そうした思いから生まれる表現も「高齢者だからこそできる表現」であると捉えるに至った。

**No073 自死遺族が望むように生活できる自分になる過程
桐谷麻美（京都大学医学部附属病院）**

【目的】親、配偶者、きょうだい、子どもを自死で亡くした遺族が望む生活を回復・維持するための工夫の探究【方法】東京大学医学部倫理委員会で承認された後、自死遺族24名を対象として面接調査を実施しグラウンデッドセオリーアプローチを用いて分析した【結果】自死遺族は望ましいと感じる生活を続けようとするが、喪失感によって度々《望むように生活できず苦しい》状態に陥る。その状態から逃れようともがくうち《望むように生活させてくれる行為が見つかる》。世間体などの理由で躊躇する行為には、《心と身体の調子を整える》ことで楽になって気力をやや回復してから踏み出す。遺族がこれらの《望むように生活させてくれる行為を組み合わせて活用する》ようになると何度も戻ってくる《望むように生活できず苦しい》状態に対処できる機会が増し《望むように生活できる自分になる》。苦しさが弱まる日が来るのか、遺族には予測できない。

**No074 幼少期テレビアニメーション視聴習慣についての語りにみられる「終了」の意味
松石真理子（九州大学人間環境学府）、佐々木玲仁（九州大学）**

本研究では、幼少期テレビアニメーション視聴習慣の終わりを採り上げ、人生において何かを終了させることが後にどのように捉えられ意味づけられていくのかを検討し、「終了」という事象についての知見を得ることを目的とした。データ収集として20代女性協力者10名に対し、同一の作品を起点とした非構造化インタビューを行った。分析は協力者の語りに含まれる内容や時期、終了についての語りの形式の共通性や差異性に着目して行った。この分析より、終了に至る理由や経緯については様々な出来事との複雑な関係のもと多様に語られた一方で、終了という出来事それ自体は具体的に想起されず、単純で類似した形式を用いて語られたことが明らかになった。また、語りの時間的範囲は習慣自体と必ずしも一致せず、前後の時期も含まれていた。「終了」という事象自体は語り得るものとして心の内に残されるが、その具体的内容は語られないこと、そして、語りの結末が習慣自体の終了と必ずしも一致しないことが示唆された。

No075 **保護司と大学生による更生保護についての交流の場の変容**

齋藤絢子（立命館大学文学研究科）、川野健治（立命館大学総合心理学部）

保護司は、更生可能性を考慮した秘匿のために日陰の存在でありつつも、地域の犯罪予防のために更生保護の理解の普及を率先してきた市民ボランティアである。従来の研究では、保護司の働きかけ先である地域に集う人々が、保護観察対象者を地域の一員として受けとめ、非行犯罪の抑止へとつなげる過程は明らかにされていない。本研究では保護司と大学生が交流する場を設定し、その場の相互交渉を観察することで、更生保護への理解の過程を明らかにすることを目的とする。特に、1) 学生が更生保護についての知識を主体的にどのように獲得していくのか、2) 学生が知識を得ること（エンパワメント）で、地域コミュニティへどのような志向を示すのかを検討した。なお、交流場面において残虐性のある話題や、離婚および発達障害などの身近な話題が心理的侵襲性を伴う可能性があり、研究参加と辞退が自由意思に基づくことを事前に参加者へ説明した。

No076 **整形外科看護領域における質的研究の前提とは**

齋藤貴子（日本赤十字秋田看護大学）

整形外科は医療者の中でも「たいしたことない」「命に直結しない」疾患とされ、手術をすれば「いいでしょう」と思われがちであるが、命に直結せずとも運動器の障害は生活を営む上でやっかいなこととしてQOLに関わり、要介護の大きな原因となっている。現在整形外科の領域の看護に関心を寄せ研究を進めている。この領域では質的研究によつて、整形外科の疾患や治療を受けた患者の経験や、看護師のアセスメントやかかわりを明らかにしようとしていた。今回、整形外科看護の質的研究について文献検討を行った。この度の発表ではそれぞれの研究の序論やはじめにの段階で「前提」「条件」「設定」としていることがいかに研究疑問や研究目的を成り立たせているかについて焦点を当てる。整形外科看護であたりまえに「前提」としていることが何か、そして研究の前提が研究目的にどのように影響し、研究目的を成り立たせているか議論できることを望んでいる。

No077 **インタビューイのインタビューイとしての特性**

荒川歩（武蔵野美術大学造形学部）、白井美穂（株式会社ネオマーケティング）、松尾智康（株式会社ネオマーケティング）、加藤賢大（株式会社ネオマーケティング）

質的研究を行うときに、調査対象者は、リサーチクエッションによって定められ、そのインタビューイとしての資質は問われない（あるいはインタビュワー側のスキルの問題に帰せられる）。しかし、実際には対象者としての条件にあっているインタビューイの中にも、引き出される内容に影響する特性差が存在するだろう。例えば、ある人は自分の感情を語る語彙が豊富で、またそのように語る志向性の高いが、別の人は聞かれたことには短く答えるが自発的にはあまり語らず、事実については語るが、感情や動機などの説明は曖昧であったり、本人にとっても不的確なものであったりすることがあろう。そこで本研究では、既存の質的研究で引用されているインタビューを分析し、どのようなインタビューが注目される知見をもたらしているのかについて検討し、そこからインタビューイのインタビューイとしての特性について考察する。

No078 結婚移住女性の異文化適応過程におけるライフイベントと保護要因—TEMを用いて
一條玲香(東北大学大学院教育学研究科震災こども支援室), 上埜高志(東北大学大学院教育学研究科)

本研究では、日本人男性と結婚した女性の異文化適応過程におけるライフイベントと保護要因について明らかにすることを目的とした。日本滞在歴が概ね10年以上で、日本語で面接可能な結婚移住女性に協力を依頼し、来日から現在までのライフストーリーの聞き取りを行い、一人一人のTEM図を作成した。次に、抑うつが疑われないことを条件とし、5ヵ国9名(欧米・南米・東アジア・東南アジア、30代~50代)のTEM図を一つのTEM図に統合した。なお、本研究は東北大学大学院教育学研究科倫理審査委員会により承認を受けた。本研究から外的保護因子として日本人・同国人によるサポート、日本社会との接触の少なさ(限定された状況で)、ソーシャルネットワーク、仕事/学業、母国からのサポート、異文化への配慮と取り込みが、内的保護因子として、日本語能力、異文化の一般化と強調の認知的コーピング、母国との関係の捉え直しなどがあることが明らかとなった。

No079 脳梗塞後軽度右片麻痺男性の在宅生活再建プロセス—複線径路等至性アプローチを用いた分析—
長尾宗典(介護老人保健施設国立あおやぎ苑リハビリテーション科), 小林隆司(首都大学東京大学院人間健康科学研究科)

脳卒中者への地域でのリハビリテーション(以下、リハ)には、外出頻度の増加を図る等、より主体的で活動的な生活段階を目指す支援が求められる。本報告の目的は、50歳代脳梗塞後軽度右片麻痺男性がどのような経験を経て活動的な生活を獲得したか、通所型リハ施設の利用とその後に焦点を当て明らかにすることである。男性には口頭及び文書でプライバシー保護のための措置等を十分説明し、同意を得た上で4回のインタビューを行い、家族等にも聞き取りを行った。分析には、複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach:TEA)を用いた。結果、受動的なリハサービス受療状態から、身体・生活能力の改善実感と共に自己の意思判断が明確化し、自身の健康を維持しながら母をサポートする家族内役割を獲得するプロセスが可視化された。また、男性の自己決定には周囲が持つ障害者観も影響していた。

No080 統合保育における自閉症児の対人関係の発達に関する検討
横山佳奈(名古屋大学大学院教育発達科学研究科), 永田雅子(名古屋大学心の発達支援研究実践センター)

本研究では、統合保育の場面における自閉症児の社会性の発達における保育者・定型発達児の役割や、自閉症児との社会的相互作用が促進される定型発達児の関わり方について検討を行った。年少で入園となった4歳の自閉症児を対象に、計31回の観察を行った(X-1年6月~11月、X年7月~11月)。対象児と保育士または定型発達児が関わる場面を中心に主要なエピソードを抽出し、エピソード記述として分析を行った。その結果、対象児の初期の人間関係は保育者に依存したものであったが、保育者との関係が構築され安定化していくにつれ、定型発達児との関わりが増加していることが示された。また、定型発達児の関わりとして、指示的なものよりもその場に合わせた柔軟な対応によって相互作用が促進されていることが示された。加えて、定型発達児は保育者が対象児に対して行っている行動をモデルとして関わり方を学習していることが示唆された。名大教育 ERB 承認番号: 16-794

No081

演題取り下げ

No082

メイクアップ動画のナラティブ分析

木戸彩恵（関西大学文学部）、サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

本研究では、メイクアップ動画のナラティブ分析から人気動ガールとファンとのコミュニケーション過程を明らかにすることを目的とした。調査対象は、8名の動ガールがYoutubeにアップロードしている32本の動画の発話とした。調査1として、発話を元に4つのカテゴリーに基づく動画マップを作成した。ここから、視聴者登録数と動画投稿の傾向の関連を見出した。調査2ではYoutubeのコメント欄に着目して分析を行い、コメント数と返信率に負の相関があることを明らかにした。一連の研究から、動ガールのコミュニケーションスタイルは大きく、直接的なコミュニケーションをするブロガー的動ガールと、間接的なコミュニケーションをするカリスマ的動ガールに分けられることが明らかになった。

なお、本研究は立命館大学研究倫理指針に従い実施した。特に、個人情報の保護の観点から調査対象者の名前は匿名にすることとした。

No083

**経営者スタッフから女性性産業従事者へのフォローについて～元スカウトマンへのインタビューから～
鍛冶葉子（姫路獨協大学看護学部）**

現在、貧困女性のセーフティネットのひとつとして性産業が挙げられている。しかし性産業は、社会からのスティグマや、従事する女性の心身への負担が少なくない。

本研究では、元・風俗スカウトマンT氏に、個人情報保護について・成果の学会発表について口頭で説明を行い、書名により同意を得た上で、インタビュー調査を行った。

T氏は、「性産業は、ひとつの独立したジャンル。業態や地域により、内容は様々ではないが、稼げる女性の一部に限られ、‘堕ちて来る’仕事ではない」と考えていた。またT氏は、「刑罰を受けず、稼げるうちに稼げるだけ稼ぐ」というのが、従事女性へのフォローも含めた働き方であった。

T氏が、従事女性のフォローを行うのは、女性のためでもあり、店舗の評判を落とさないためでもある。女性の自己責任による部分と、プライベートまで干渉される部分がある中で、どのように健康を維持していくかが課題であると考えられた。

No084 津波災害についての絵画の分析～高知県幡多郡黒潮町を例に～

杉山高志(京都大学大学院情報学研究科)、矢守克也(京都大学防災研究所)

2012年3月に南海トラフの巨大地震による震度・津波高の推計が内閣府から公表された。その想定で、高知県幡多郡黒潮町では最大震度7、最大津波高34.4mという厳しい数字が示された。そのため、黒潮町ではあきらめの気持ちが蔓延し、津波避難を放棄する住民も現れた。本研究は、津波災害の想定が住民にいかなる影響を及ぼしたのかを分析することを目的に、黒潮町佐賀地区に在住するN氏が作成した、3枚の津波についての絵画に対する半構造的なインタビュー調査を行った。その結果、N氏が作成した津波の絵画には、津波が黒潮町を襲うという未来がいかなる手段によっても回避できないどころか、年月を経るごとに一層現実的なものとして立ち現れているものの、その津波から救済される方策についても数多の方策を見出していることがわかった。N氏の考え方は、通常の「リスク論」とは異なる、デュピュイの「賢明な破局論」に通じる新たな視座を提示した。

No085 ニューカマー青年の「移動」経験とアイデンティティ形成過程

ーエスニシティをめぐる自己アイデンティティの層化的な拡張に焦点を当ててー
相良好美(東京大学大学院)

本研究は、日本に就労目的で来日した定住外国人のうち、親の移動に帯同するかたちで異文化間移動を経験し、日本で教育を受けた外国にルーツを持つ青年(以下「ニューカマー青年」とする)が、その成長過程でいかなる自己アイデンティティを獲得していくのかについて、TEA(複線径路・等至性アプローチ)を用いて検討するものである。

本発表では特に、ニューカマー青年の自己アイデンティティの基盤をなす価値観や信念の変容過程に焦点を当てる。「移動」を起点として引き起こされる様々な人生の出来事に直面するなかで、彼らのエスニシティをめぐる自己アイデンティティは再帰的に構築され続け、最終的には「日本人か外国人か」という二者択一ではなく、両方の要素を内面化しながら層的に拡張していくことをA.ギデンズのアイデンティティの層化モデルを用いて説明することを試みる。

No086 日常生活における日本人大学生の本来性の在り方：折り合うことと心のバランス

石川清子(東京福祉大学・大学院 心理学研究科)

現代青年達は心理的に辛く苦しい体験をどの様に受け入れていくのか。人にとって日常生活体験は、多くのことを知らせてくれる現実であり、また同じ現実が自己の弱さを示す材料となれば、時には受け入れがたいものとなりその自己を疎開することにつながる。人が持つパーソナリティ特性であるAuthenticity(本来性)は、理論的にはそのような苦しい現実を成長エネルギーに変換できるものである。本研究は、大学生9名のインタビューを通してM-GTAにより概念化し本来性の特性を検証した。

日本人青年は、他者の期待に応えようと努力する結果、本来的自己をストレートに表すことを躊躇する傾向にあり、本来的自己として日常を送れない自分や、力不足の自分を見ないようにする自己疎外感を持っていた。しかし、支障を感じることなく日常生活を過ごすために、心のバランスを確保する必要があった。例えば、Aさんは、いつでも削除できるデジタル化した人との関わりに、心のバランスを見いだしていた。

No087 重度障害者きょうだいの心理的葛藤体験の変容過程：母親と障害者との関係に着目して
高野恵代（愛知淑徳大学）

近年、障害者とその主なケアラーである両親が高齢化する“老障介護問題”が深刻化している。高齢化した親の代わりに、もしくは親亡き後の障害者の世話を担う存在としてきょうだいに注目が集まるようになった(e.g., Hodapp, Glidden, & Kaiser, 2005)。本研究では心理的葛藤体験に焦点を当て、きょうだいがどのような葛藤を体験し、その葛藤が発達に伴いどのように変容しているのかを、母親と障害者ときょうだいの関係性に着目して検討することを目的とした。青年期きょうだいを対象に半構造化面接を行った結果、母親との関わりでは、幼児期や学童期では〈否定的感情〉を体験するが、青年期以降になると〈母親を理解〉し支え合おうとする姿勢が見られた。障害者との関わりでは、よくも悪くも周囲の環境の影響を受ける様子が見られ、〈関係の模索〉を通して障害者理解が進んでいることが示された。Negativeな葛藤だけでなく、自己成長を実感する葛藤もあることが示唆された。

No088 中国農村における住民主体地域活性化の切口－義理人情の若者グループを起点に－
叶好秋（京都大学人間・環境学研究科）、永田素彦（京都大学人間・環境学研究科）

現在の中国ではトップダウンの地域管理が限界を迎えている。それを解消するため、行政から住民主体の地域活性化運動を奨励した。しかし、行政主導を色濃く残しており、住民主導が進んでいないのが現状である。多くの地域では、地域活性化を担う住民組織を設立する段階で挫折している。

発表者は地域活性化運動を住民主体で行っている先進的な事例——厦門市院前社済生縁合作社の活動をフィールド調査し、初期の組織形成プロセスを明らかにした。済生縁合作社は厦門市の住民主体地域活性化運動奨励政策のもと、住民の共同出資による社会的企業である。その組織は地域活性化運動を住民の手で、2年という短い期間の中、院前社を一新し、産業まで立ち上げた。

済生縁合作社初期組織成立の特徴は「義理人情の若者グループ」を中心に置いたことと考察した。その新たな切口を、住民主体の地域活性化を目指す他地域に発信したい。

No089 父親は息子との「男としての生き方の違い」をどのように体験してきたか—成人した息子がいる父親の語りから—
厚澤祐太郎（上智大学大学院総合科学研究科）

本研究は、現代の父親が抱える諸問題に注目し、男が生きる上で「父親がいる」「父親になる」ことの意味を探究したものである。そのため今回は、父親と息子の関係に焦点を当て、父親が息子との「男としての生き方の違い」をどのように捉えてきたかを検討した。成人した息子がおり、関係が良好な8名の父親を対象に、関係をどのように捉えてきたのか、今それをどのように意味づけているのかについて半構造化インタビューを行い、TEMを用いて「違い」を感じた過程に注目し分析を行った。結果、父親は息子への期待を表出した後や、進路選択・就活前後で特に「違い」を感じていた。また父親は「違い」を認めようとして葛藤を体験していた。この時父親は、社会人男性であり親であるという、両面を揺れ動き生きる自分を強く意識すると考えられる。この揺れ動きによって父親は、社会人だけでなく親でもあるという自分のあり方にそれぞれ意味を見出していくと考えられる。

No090 NIPT（無侵襲的出生前遺伝学的検査）受検の経験についてのインタビュー調査

山本佳世乃（岩手医科大学医学部臨床遺伝学科）、福島明宗（岩手医科大学医学部臨床遺伝学科）

【背景】出生前検査は、生命の選択に関わりかつ義務的検査ではないため受検経験には家族を含めた他者や社会的要因が影響を与えていると考えられる。本研究では妊婦のNIPT受検経験をインタビューにより調査した。【方法】対象者は家族歴・胎児異常なしの陰性例の妊婦11名。各語りの内容をカテゴリ化して共通点・相違点を比較し、他者や社会への言及部を抽出し分析した。【結果】共通性の高いカテゴリには、「年齢への言及」、「胎児への思い」、「家族」、「周囲との関わり」、「ダウン症について」等があった。「夫」との関係を軸に、子どもがいる場合には、妊婦にとって夫と子どもが「家族」として受検に関与していた。「妻や夫の母親」が影響してる例が多数であった。多くの妊婦が「インターネット」から情報を得ていた。

【倫理的配慮】氏名や市町村名、病院名等の固有名詞は匿名化している。発表に際し引用する語りについて、語り手からの使用許可を得ている。

No091 べてるの家の当事者研究における自己病名と研究テーマのテキストマイニング：

メンタルヘルスマガジン『こころの元気+』を分析対象にして

小平朋江（聖隷クリストファー大学）、いとうたけひと（和光大学）

当事者研究は本人の苦労の研究で、科学論文と同じ体裁（大高・いとう・小平、2010）をとる。研究テーマは「悩みや行き詰まり」（向谷地、2009）で、自己病名は「自分たちで一番実感できる自己流の病名」（伊藤、2007）である。自己病名と研究テーマの表現の特徴を明らかにすれば、当事者視点からのリカバリーに示唆が得られると考える。雑誌に連載中の120回分の「べてるの家の当事者研究」から、自己病名と研究テーマを抽出しテキストマイニング分析した。その結果、自己病名や研究テーマにより当事者視点での苦労が可視化され、成長と発見がなされることで、生きづらさを仲間と共有し、「人としてのリカバリー」（Slade、2013/2017）のプロセスに役立つ意義があると考察した。倫理的配慮：分析対象の雑誌は一般に出版・公開されており、著作権に配慮し、著者の表現や言葉など改変せず、引用部分を明示し、出典を明記した。

No092 福島第一原子力発電所の事故を契機に被災地を離れ、避難先での生活を継続する母親

—複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA)—

松永妃都美、石橋秋奈、福山由美、野中良恵、田中沙恵、新地浩一（佐賀大学医学部統合基礎看護学講座）

（目的）福島第一原子力発電所の事故から自主避難を継続する母親の心理と行動を可視化し、母親達が自主避難を継続することの意味を理解する。

（方法）震災行政・民間団体を介して、避難先での生活を継続する母親に研究案内の送付と連絡を依頼した。結果21名の母親より協力が得られ（全員が自主避難）、半構造化面接を実施した。分析にはTEAを採用した。本研究は佐賀大学倫理審査委員会の承認を受けた。

（結果）『東日本大震災の発生』～『避難先での生活を継続する』までの母親らが置かれた心理や社会的背景等を時系列としたTEM図を作成した結果、夫の放射線リスク意識や原発避難への理解度により、自主避難後の家族の形が類型化された。母親らは自主避難に「覚悟」をもち臨んでおり、自分らしい生き方や子育てを獲得または奪還した自主避難という選択に「納得」しつつも「揺れ」ながら、避難先での生活を継続していることが明らかになった。

No093 地域保健活動の運営へ男性が参加する過程における意味づけの変化
駒崎俊剛(東京医療保健大学)

『みんなの保健室』は、退職看護師が中心となり、地域包括ケアシステムにおける住民と行政の橋渡しを目的とし、健康保健に関わることを話題にした集いである。2016年4月から毎月開催されている。当初、来客者として参加していた男性が、運営側へ移行していく過程において、彼らにとってのこの活動に関わることへの意味づけの変化を明らかにする。そこで、途中から運営側に加わった男性2名(若年、老年)と当初からの運営側である男性1名(中年)を対象に「復興曲線インタビュー(宮本、2015)」を参考に、現在までの時間軸上にエピソードをプロットしながらインタビューを行った。この結果から、地域活動へのかかわりの意味づけの変化を考察する。なお、倫理的配慮として、本研究への参加は、自由意思によるものであり、いつでも参加の中断・辞退ができること、それにより何ら不利益を被ることがないことについて研究同意書に記載し、説明した。

No094 保育者の語りから考える絵本を用いた表現活動の意義
増山由香里(旭川大学短期大学部)

絵本や物語は読んでもらったその場限りのものでなく、子どもの内面世界に根付き、その後の表現活動につながる可能性を持っている。子どもが絵本を仲立ちに遊びを通して他者とつながる体験をすることは、子どもの成長発達にとって意義あるものである。では、保育者にとって絵本活動はどのような意味を持つのだろうか。ある保育士の語りを通してその意義を検討した。

絵本を重要な環境として位置付け、クラスで絵本をくり返し読み、約1年を通して遊んだ“からすのパンやさん”を振り返るなかで、保育者は「からすのパンやさんに助けられた」と語った。保育者は子どもの遊びを支えつつ共に楽しむなかで、子どもとのつながりを感じ、また子どもたちは保育者の期待に応えるかのようにからすをテーマに遊び続けた。この絵本活動の実践と保育者の語りから、子どもの成長発達を支えるものとしての絵本が、保育者にとっても大きな支えとなることが示唆された。

**No095 保育者の大学院進学が子どもを能動的な存在として捉える視点へどのように影響を与えたか
～保育場面での葛藤・揺らぎや事例に基づく語りのTAE分析～**
潮木玲奈(大妻女子大学)、田島大輔(お茶の水女子大学こども園)

本研究の目的は保育者が大学院へ進学し、大学院での学びと実際の保育現場の往還を行うことで、子ども理解にどのような変容があったかを検討することである。目的を遂行するにあたり2名の保育者(30代・40代)が大学院での学びにおいて、子ども理解を研究と実践のなかでどのように往還していたかを2名の論文執筆時における葛藤・揺らぎや事例に基づく語りをTAE分析にて検討した。その結果、①子どもの身体から表現される行為を肯定的捉える視点②保育者自身が自らの身体を省察すること③自身の実践を実践行為の中で主体者・俯瞰者として捉える行為④子どもとの関係性を開き、物語ることの重要性が見えてきた。

このことから、現場に身を置く保育者が大学院進学により、保育における先行研究や専門書に出会い学ぶことで保育の要である、子どもと関わるものとして子どもを能動的な存在として捉える視点や保育を物語ることで変容したと示唆される。

No096 **文化的透明性の不透明さ：芝居がかったふるまいと逃げるための越境**
小林恵子（青山学院大学社会情報学研究科）

経営危機に直面し現在も再建中の企業組織が、業績回復を目指し、かつて危機を何度となく救ってきた伝統的な販売強化活動を再開する。「我々はお荷物」という発言も聞かれた事業部から、部署や役割を越えて参加した人たちがチームを結成し、集中的に販売活動に従事する。

販売経験のない彼らが体験したことは、過酷な訪問販売を含む多くの非合理性と曖昧性を内包した活動である。元の職場を離れ、一時的に組織化された共同体に所属し、不慣れな活動に戸惑う人々とそれを支える周囲とのやり取りから見えてきたのは、厳しい目標達成のための悲壮感や不安だけではなく、意味を明確に問わないまま続ける儀式や作法、可視化されていない阿吽の呼吸で進める実践である。

彼らの様々な活動への参加を通して筆者が感じた違和感やズレ、結束や矛盾、筆者に対する警戒感の変化を、香川（香川・青木、2015）の越境的対話実践の多様性を土台に整理し、新たな問いを立てる。

No097 **日本の「こころ」についての土着的思想と心理学の土着化**
黄信者（立命館大学文学研究科）

本研究では、近年、非西洋文化で起こった「心理学の土着化運動」が起こっていることを踏まえ、日本における心理学の土着化過程、特に日本心理学の展開期の土着化過程を中心に検討した。本研究は、学問史の方法論-ヒストリオグラフィを用い、日本心理学会が発行した『心理研究』、『日本心理学雑誌』、『心理学研究』を一次資料とし、質的・量的に分析した。その結果、「こころ」についての土着的思想と近代心理学を関連づけて検討する傾向は、制度化されていない段階であったが、日本心理学の制度化の完成によって衰退し始めた。「禅」という土着的テーマは、科学的な研究方法が開発されたため、一時的に復活したが、他の学問的な「こころ」についての従来の考え方は「心理学」の研究範囲から排除された。また、結果を踏まえ、日本心理学の土着化の時代区分を検討し、「こころ」についての土着的思想の未来を考察した。

No098 **ホームレス高齢者のセルフネグレクト化要因に関する一考察－自己防衛手段としての「拒否」－**
高桑郁子（横浜国立大学大学院 都市イノベーション学府）

路上生活者は高齢化し、長期層ほど「今の生活でいい」と考え、アパートに入居しても再び路上生活に戻る人がいる（厚生労働省 2012）。筆者は、池袋のホームレス支援活動の炊き出し・夜回り・医療相談会を参与観察し、路上生活者の様相や、支援を拒む様子を明らかにしてきた（高桑 2016、2017）。本研究では、路上生活者と支援者の「語り」に着目し、路上生活者が何ゆえ支援を拒むのかを明らかにした。研究方法は、ホームレス高齢者（7名）と支援者（4名）に半構造化インタビューを行い、逐語録を作成し分析を行った。インタビューーには事前に文書と口頭で説明し了承を得た。調査結果より、9つの小カテゴリー及び2つの大カテゴリーにまとめ、支援を拒む要因を「情報関連のリテラシー不足」と「社会が路上生活者に向ける眼差し」とし、彼らを取り巻く環境が「セルフネグレクト化」を招き、感情の鈍麻より消極的な拒否（変化に対する抵抗）を引き起こすことを示唆した。

**No099 生活を<問い直し>、家屋を<なおし>、家族を<つくる>—居場所型デイケアを通して—
近藤真帆(京都大学人間・環境学研究科)**

精神科デイケアにおける居場所型は、長期利用や目標の不明瞭性がしばしば批判され、施策にも反映されている。しかし、ある場所が安らぎの場になるにも、それが本人の重要な変化につながるにも、本来は時間がかかる。ある精神科デイケアαを約10年利用するNさん(40代男性・うつ)。彼はデイケアαを通して、今まで見向きもしなかった「生活」の楽しさやその重要性を徐々に<問い直し>ていく。そして彼は現在、実家の家屋の改修を通して、家族との関係を丁寧に編み直し、<つくって>いこうとする。本研究はその過程をエピソード記述法(鯨岡、2005)を用い、考察する。なお、協力者が特定されうる情報の改変、本人及び医療機関の承諾、本人の不利益を生まないことの保障等、倫理的配慮の上に研究・発表を行うものとする。

**No100 数学教師になる大学生の極限概念認識における学習経験の持つ意味—解釈学的現象学的分析から—
茂野賢治(立命館大学)**

本研究の目的は、数学教師になる大学生の学習経験から数学的概念の一つである極限概念を見つめ、経験の意味を現象学的に解釈することである。そこから数学教師養成の新たな視座を得ることを試みる。数学教師として着任する直前の大学生1名の小学校入学から大学卒業直前までの極限概念に関する学習経験に対して、計5回の半構造化インタビューを実施した。得られたデータと学習活動で学生が記述した図や数式などと照らし合わせ、解釈学的現象学的分析を用いて、学生の学習経験の意味を解釈した。結果、極限概念認識は、実際・理論・形式の数学三世界(Tall、2016)の段階を踏むことが示された。数学教師養成の視座として、数学計算の答えが「出せる、出せない」に固執するのではなく、極限概念を包括する媒介としての身体感覚を学習者が持ち、他者との談話によって極限概念に切り込んでいく経験の多様性を支援する学習環境が極限概念認識には、重要であることが示唆された。

**No101 保育実践の熟達とは何か—18名の保育者との対話的ビジュアルエスノグラフィー—
古賀松香(京都教育大学教育学部)**

保育の多様化の時代を迎え、保育者の質が一層問われるようになった。小学校以上の教育と異なり、遊びを中心とした指導をその教育方法とする幼児教育は「見えない教育」と言われ、その専門性の検討が困難であるとされる。本研究では、初任期から熟達期の18名の保育者を対象として、それぞれの保育者が実践時においてどのような専門的な知を用いて実践を行っているかを検討する。その際、観察者が録画したその日の保育実践の画像を用いて、保育終了後に保育者と観察者が相互の見方を交流させながら語り合う、対話的ビジュアルエスノグラフィー(古賀、2017)を方法として採用した。分析においては、中村(1992)の「臨床の知」の概念を用い、何が変容することが保育実践の熟達ととらえられるのか、検討を行う。

**No102 中等教育から高等教育への学びのトランジションに関する研究
時任隼平(関西学院大学)**

本研究の目的は、中等教育における「学び」と高等教育における「学び」のトランジションの詳細を明らかにする事である。具体的には、2014~2017年度の間に中~大学一貫校の私立Z高校を卒業し現在Z大学に入学した学生を対象に質問紙調査とインタビュー調査を実施し、中等教育時代に学んだ事が高等教育段階の受講内容やその成績にどのように関連しているのかを分析した。インタビューでは(1)高校時代に自分の成長に繋がったと考えられる授業及び(2)その要因、(3)大学在籍中に自分の成長に繋がったと考えられる授業及び(4)その要因を基本の質問項目とし、相手の回答に応じて柔軟に項目を追加する半構造化の形式を取った。インタビュー記録を逐次文字化し、M-GTAを援用して分析した結果、授業内容そのもののトランジションではなく、「学び方」や「学習内容の嗜好性の理解」など汎用的な要素に関するトランジションが明らかになった。

No103 **「異文化適応」再概念化の試みー異文化アイデンティティの現象学的分析**
高本香織（麗澤大学外国語学部）

従来、異文化適応研究においては、「異文化適応」は国や文化の境界線を超えて移動した短期滞在者(Sojoyners)や移民(immigrants)の受け入れ文化・社会へ「同化」として概念化されていたが、本研究では「異文化適応」という現象を、移動者とホスト(受け入れ側)がコミュニケーションを通じて協働的に作り出し経験する現象として再概念化した。特に異文化適応過程によって変容していく「アイデンティティ」に着目し、米国の大学で学ぶ留学生と留学生の友人を持つアメリカ人学生を対象に聞き取り調査を行った。記号現象学的分析の結果、留学生とアメリカ人学生両者において、文化的アイデンティティの変容は「規範/自己ー異質/他者」の境界線の曖昧化、それによる「規範」「異質」という概念自体の意味・地位・価値の変化と喪失、さらに「同化主義的意識」と「周縁主義的意識」の揺らぎとして経験されていることがわかった。

No104 **インタビュー会話における打ち合わせと本番のズレが微視的に発生する機序に関する研究**
門田圭祐（早稲田大学人間科学研究科）、古山宣洋（早稲田大学人間科学学術院）

私たちの会話の中には、事前の打ち合わせに沿って行われる会話がある。
しかし、本番で打ち合わせたことをそのまま話すことは難しい。
その難しさとして、本番では予定されなかった話題が話されることや、予定された話題が話されなかったりすることが挙げられる。
こうした打ち合わせと本番のズレは如何にして生じるのであろうか。
本研究の目的は、インタビュー会話において打ち合わせと本番のズレが発生する機序を明らかにすることである。
本研究は、研究参加者に、インタビュアー役とインタビュー役を割り当て、打ち合わせを行なった後にインタビューの収録を行う会話課題を行わせて得られた会話データについて分析する。
分析の結果、本番では、打ち合わせの内容が参与者たちの発話の中に打ち合わせとは異なる形式で織り込まれていることが明らかになった。そして、それらの織り込みが打ち合わせと本番のズレを発生させている可能性が示唆された。

No105 **適応的な生きる意味に関する検討ー生きる意味への問い、その問いに対する答えに着目してー**
福田律子（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

生きる意味に関する先行研究では、生きる意味への問い方に着目した研究と、生きる意味の内容を扱った研究とに大別されて行われてきた。そこで、本研究では生きる意味への問い方とそれに対する答えの両方を扱い、それぞれの内容について検討した。オンライン調査によって「生きる意味を考えたことがある」と答えた男女 174 名を対象に、生きる意味への問いおよびその問いに対する答えについて自由記述を求めた。KJ 法の結果、生きる意味への問いについては 5 つの上位カテゴリー、問いに対する答えは 9 つの上位カテゴリーが生成された。さらに、抑うつ尺度を用いて各上位カテゴリー別の抑うつ得点を算出した。以上の結果と各カテゴリーの内容を吟味した上で、適応的および不適応的な生きる意味の問いと答えを検討した。本研究は名古屋大学倫理委員会の承認を得た上で行なわれた（承認番号 16-873）。

No106 臨床心理士養成指定大学院の修士論文作成が臨床活動に与える影響
福里翔吏, 福田景 (文教大学大学院人間科学研究科・臨床心理学専攻)

臨床心理士が心の専門家として対人援助に関わっていくうえで人間的資質や倫理観が問われてくる。その責任を果たすために臨床心理士は個人的な経験や情熱だけで心理療法を行うのではなく、科学的に効果が証明された治療方法によって心理療法が行わなければならない。また臨床心理士資格認定協会における臨床心理士の専門業務では臨床心理査定や臨床心理面接などだけでなく、臨床心理的調査や研究活動が挙げられている。つまり臨床心理士にとって臨床実践と研究を両立させる科学者実践家モデルが求められている。しかしながら臨床心理士養成指定大学院の大学院生が考える修了後に役立つ学習と体験の先行研究において〈演習や実習の体験〉、〈ケース検討〉などが挙げられ、修士論文という研究活動と実践活動の間にかい離が起きていることがわかる。そこで本研究では指定大学院を修了した者にインタビュー調査を行い、論文作成が臨床活動に与える影響を検討する。

No107 一対一のピアノレッスンにおける演奏表現の伝達方法-相互行為資源の構造化への着目-
山本敦 (早稲田大学大学院人間科学研究科), 古山宣洋 (早稲田大学人間科学学術院)

演奏運動には個々の身体-楽器の関係による制約から一義的正解が存在しうるが、演奏表現の正解は他者との合意に基づくため一義には定まらず、社会的な望ましさに依存する。そのため演奏表現の伝達においては、演奏の望ましさの共有の確認と生徒の身体に固有な演奏運動の探索とが同時に行われる必要があるといえる。この方法を明らかにするため、本研究ではプロの演奏家による音大生に対する一対一の指導場面をビデオカメラを用いて収録し、相互行為の構造を分析した。なお、研究参加者に対しては匿名性と秘密の保持を口頭と書面で説明した。また、得られたデータは学会発表・論文投稿などに用いられる可能性があること、本研究への参加は自由意思に基づくものであることを説明し、途中で同意を撤回しても不利益が発生しないことを説明した。分析の結果、①教師が提示する多重な相互行為資源の構造の特定要素に対して、生徒が選択的に身体的同期を行うことで、望ましさの共有のためのアイコンが生成されていたこと、②そのアイコンを教師が生徒の演奏への介入に利用することで望ましさの共有が確認され、③アイコンを用いた身体同期的介入によって生徒の演奏運動が教師との共同的な達成として変容していたことが示された。

No108 レイプ被害者が「責められる」とはどのようなことか-質的分析を用いた検討-
福崎咲綾 (東京大学教育学研究科)

レイプ被害者においては、被害を受けることだけでなく、被害後に心無い言葉をかけられる等の二次被害が問題となっている。二次被害、特に被害者を責めること(blame victim)についての研究は行われてきているが、「責める」ということの定義が曖昧であり、プロセスとしての検討がなされていないという課題がある。本研究では、被害者の立場から「責められる」ということについて質的に検討し、その要素やプロセスについて明らかにすることを目指す。

No109 保育を見合う研究会の変遷プロセス：複数園の置かれた状況の比較
岸野麻衣 (福井大学大学院教育学研究科)

幼児教育の現場において、保育者同士で保育を見合い検討しあうことが重要とされ、さまざまな園で行われている。その効果的な方法についても先行研究ではさまざまに提案されてきている。しかし、園内研究の方法において一律に効果的なものではなく、園の置かれている状況によって調整し開発していく必要のあるものでもあると考えられる。報告者は、6つの幼稚園・保育所・認定こども園において、2年以上にわたって継続的に、保育者同士で保育を見合い検討しあう研究会に参加してきた。それぞれ研究会を推進する立場の保育者と会の持ち方について相談しながら進めてきており、形態が少しずつ変わり、それに伴ってそこでの保育者たちの語り方も変わってきた。これらのプロセスについて、それぞれの園の置かれている状況を比較しながら、研究会の記録をもとに振り返り、研究会の変遷プロセスを検討し、そこでの研究者の参与の在り方についても考察したい。

No110 「なぜ公務員を志したのかー公務員試験合格者の就業動機に関するインタビュー」
都築幸恵（成城大学社会イノベーション学部）、浮ヶ谷知奈（春日部市役所）

大学生はどのような動機で公務員を志すのであろうか。日本においては、公務員志望者の就業動機、また、公務員と私企業勤務者との動機付けの差異に関する実証的な研究はこれまであまりなされてこなかった。一方、海外では、public service motivation (PSM) に焦点をあてた公務員のモチベーション研究が蓄積されてきている。Perry (1996)は、PSMの測定尺度を開発し、PSMは、「政策作りへの関心」「コミュニティへの関心」「弱者への思いやり」「自己犠牲的博愛精神」の4要素から構成されるとした。本研究では、公務員試験に合格した大学4年生11名（男性5名、女性6名）に、公務員を志望した動機について半構造化面接を行った。回答を分析した結果、「社会の現状に対する問題意識とコミュニティへの関心」「よりよいコミュニティづくりのための政策決定への関心」「住民の生活の向上に貢献したいという意欲」などのモチベーションが多く参加者の回答に共通しており、PSMの先行研究と合致していた。しかし海外の先行研究とは異なる回答も得られ、日本における公務員の就業動機について更なる検討の必要性が示唆された。

No111 発達障害をもつ子を育てる親の能動性を考える：新しい親子関係のパフォーマンスと情動性の発達
大塚翔（筑波大学大学院人間総合科学研究科）、茂呂雄二（筑波大学人間系）

発達障害をもつ子を育てる親（発達障害児の親）に関する研究では、親が常に葛藤やストレスを抱え支援が必要な弱い存在としてのみ描かれてきたことが批判され、近年では、親の能動性に着目することが強く主張されるようになってきた。しかしながら、発達障害児の親の能動性をどのように考えるか、能動性の質とそれを捉える枠組みに関する議論は十分になされてはいない。これに対し本研究では能動性の概念を、今までにない対話や関係性をパフォーマンスし、新しい情動性を創りだすこととして捉える。本発表では、親の会の運営や趣味、仕事などに励む発達障害児の親への面接調査（面接では、個人情報取り扱いについて個人を特定できる形でデータを公表しないこと、面接の回答内容によって不利益を受けないことを伝え、調査協力の同意を得た）の分析を通して、そうした生活がもたらす、親子を取り巻く新しい関係性の広がりや情動性の発達について報告する。

No112 長期的災害復興をめぐるネットワーキング：東日本大震災後のアクションリサーチをもとに
永田素彦（京都大学大学院人間・環境学研究科）

東日本大震災津波から6年が経過した。復興の課題は人生のあらゆる面に及ぶとともに、長期化する復興状況の進捗に伴って変化する。したがって、災害ボランティアには多様性、継続性、柔軟性が求められる。エンゲストロームの「ネットワーキング」の概念は、災害復興に必要とされるそのような特徴を検討するのに有用である。筆者は、東日本大震災後の直後から、ボランティアネットワーク「チーム北リアス」を結成し、岩手県九戸郡野田村において復興支援のアクションリサーチに従事してきた。本研究ではそれに基づいて、災害復興のネットワーキングを促進する条件を検討する。あわせて、ネットワーキングが被災地の内発的復興に寄与することを論じる。

**No113 日本におけるゲイ男性のパートナー関係の構築・維持プロセス—出会いの形態が多様化する中で—
小林良介（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース）**

不可視のマイノリティであるゲイ男性は日常生活で互いを認識し出会うことは難しく、さまざまな形で出会いが発展してきている。本研究では、20歳から41歳の日本人のゲイ男性21名にインタビュー調査を行い、出会いの形態が多様化する中でゲイ男性がどのようにすればパートナー関係を長く続けることができるかについて、関係の構築段階と維持段階に分けて探索的に調べた。個人的で繊細な内容であるため、研究参加の任意性とプライバシー保護に関して十分に説明を行い、書面にて同意を得た。結果として、構築段階においては、交際までに相手をよく知る上ではオフラインでの出会いの方が効率が良いことが示唆された。維持段階においては、日本のゲイ男性はパートナー以外との性交渉を許容しやすいこと、パートナー以外との性交渉が関係解消につながらないために出会い方を工夫してパートナー以外との性交渉をコントロールすることが重要だという示唆を得た。

**No114 ゲイ・バイセクシュアル男性のボディイメージと精神的健康に関する質的検討
—当事者に対する半構造化インタビューから—
佐藤遊馬（東京大学大学院 教育学研究科）**

近年、LGBT(Lesbian、Gay、Bisexual and Transgender)を始めとする性的少数者の総称)に対する心理学的関心が高まっている。海外の先行研究では、LGBT当事者は異性愛者と異なるボディイメージやそれに関連する特有の精神的問題を抱えているという結果が多数報告されている。その一方で日本では、LGBT当事者のボディイメージと精神的健康に関して検討を行った研究は見られない。本研究はLGBT当事者(本研究においてはゲイ・バイセクシュアル男性)に対して半構造化インタビューを実施し、その結果を質的に検討することで、LGBT当事者がどのようなボディイメージを内在化し、それが彼らの精神的健康にどのような影響を及ぼしているのかについて新たな知見を提供することを目的とする。倫理的な配慮として、研究参加の任意性とプライバシー保護について十分に説明し、書面にて同意を得るものとする。

**No115 女子高校生にとっての「友だちという存在」の意味
保坂裕子（兵庫県立大学）**

「友だち」は、とりわけ青年期以降の自己形成において重要な役割を担うと考えられている。では、「友だち」は多ければ多いほどよいのかというとそうではなく、大切なのは<数>ではない、といわれる。それでは問題は<質>で、「友だち」との関係が深ければ深いほどよいのだろうか。近年の若者の友人関係の特徴は、広く浅いものとなっており、互いに気を使い、適切な距離を探りあっているとも指摘されている。また、友だちであるか否かは自分にとって役に立つ存在かどうかによって判断されるといった指摘もある。「友だち」や友人関係についての研究は多く見られるが、そもそも「友だち」がどのような存在として認識されているのかを検討していくと、その多様性が見えてくる。そこで本発表では、女子高校生を対象としたインタビュー調査によって得られたナラティブ分析をもとに、彼女たちにとっての「友だち」とはどのような存在であるのかについて、検討してみたい。

No116 認知症高齢者に対する絵本の読み聞かせはどのように行われるか：読み聞かせ場面における相互行為の分析
田中元基（東京都健康長寿医療センター研究所）

本発表では、認知症者への絵本の読み聞かせ場면을対象とした相互行為分析の結果を報告する。認知症者に対するボランティアによる読み聞かせ実践が増え、読み聞かせによる肯定的影響なども指摘されている。しかし、読み聞かせ場面そのものが検討されることはほとんどなかった。本発表では、認知症者への読み聞かせがどのように行われるかについて、認知症者へ週1回、8週間にわたって発表者が読み聞かせを行い、読み聞かせ場面の相互行為分析を行った。なお、倫理的配慮として認知症者及びその後見人から研究についての同意を得た上で研究を行った。分析の結果、読み聞かせの進行が読み手と聞き手（認知症者）と協同的に行われることが明らかになった。聞き手は、読み聞かせ行為の進行を調整していた（絵本を見る・聞く姿勢を示すことで読み手に読むことを促す等）。一方、読み手は、絵本の物語の進行を調整していた（ページをめくり、物語を進行させる等）。

No117 スポーツ傷害治療における心理援助の可能性——院内勉強会を通じた臨床心理士の取り組み——
堀内多恵（東京大学大学院教育学研究科）

スポーツ傷害の治療における心理援助の重要性・有効性はかねてより指摘されてきた。近年の治療動向では、医師や理学療法士、看護師、臨床心理士らの専門職が協働し、目標や課題を共有したうえで、全人的な援助をしていくことが目指されている。しかし、心理援助に関する先行研究は、リラクゼーションや認知行動療法といった特定の技法単独の有効性について論じられることが多く、多職種協働に基づく心理援助という視点からは十分に検討されてこなかった。

そこで本研究は、筆者（臨床心理士）が勤務する整形外科病院にて実施している院内勉強会での記録（フィールドノート・勉強会資料）を手掛かりとして、心理援助が院内で取り入れられていく初期段階における、各職種の問題意識やニーズについて検討した。その結果、各職種において心理学の知見に関する情報的なニーズがあることが明らかとなり、情報提供を通じた多職種協働に基づく心理援助の土台作りの必要性が示唆された。

No118 坐禅初学者の坐禅に対する意味付けの多様性が生まれる経緯～TEMを用いて描く～
升山顕耀（國學院大学神道文化学部）、木戸彩恵（関西大学文学部）、佐藤達哉（立命館大学総合心理学部）

元良勇次郎をはじめ、現代のマインドフルネスまで、坐禅は多くの心理学者たちの興味の範疇にあった。また坐禅等を研究対象とする禅心理学のこれまでの主たる研究は生理学的指標に基づくものが多かった。しかし、坐禅は極めて内的のものでもあり、個人の主観的部分にも注目する必要がある。そこで筆者は、第一に個人の語りを尊重し、具体的な時空の人間を対象とする質的研究法によって禅心理学の研究を行おうとし、坐禅初学者たちの語りデータを基にしてKJ法による研究を行った。本発表は、第二の研究として、第一の研究でKJ法によりまとめられた坐禅初学者たちの坐禅に対する意味付けをTEM化し、意味付けのプロセスがどのように進むのかを探ろうとするものである。そこには、坐禅初学者ならではの坐禅経験に対する意味付けがみられ、その多様性がうかがえる。また、それらの多様性をもとにして、坐禅に対する見方や考え方の相対化を図るねらいも含まれている。

No119 **広島県大崎上島町における協働的实践研究—「大学」づくりの現場を読み解く—**
飯島千咲(京都大学大学院人間・環境学研究所)

杉万(2006)は、社会構成主義に基づく協働的实践を通じたフィールドの改善を、研究者の使命として指摘する。本研究は、2013年より広島県の離島・大崎上島町に新しい「大学」を創ることを目指して活動する民間団体、その「大学」のモデル且つパートナーであるアメリカの大学、そして地元行政を中心としたプロジェクトに著者自身が関わりながら、当事者とのインタビューや対話を通じて、これまでの活動プロセスを整理する。

共に活動をする中で、『大学』づくりの意義や将来性を理解してくれない」といった行政に対する批判や、『大学』づくりの計画に具体性や一貫性が見られない」といった行政からの不満・不安の声が頻繁に聞かれた。こうした対立の場面や了解不能点に焦点を当てつつ、共通する出来事の意味付けを探ることによって、それぞれのグループで共有されている規範や価値観を明らかにし、フィールドの改善に向けた今後の課題と展望について検討する。

No120 **保育実習の経験を通じた「危険」場面の認識の変容**
富山大士(秋草学園短期大学), 丸橋聡美(秋草学園短期大学), 茗井香保里(秋草学園短期大学)

保育者養成課程においては、学生の安全意識を着実に形成していく必要がある。保育実習Ⅰ及び保育実習Ⅱを経験した学生が「危険」と認識する場面の認識の変容について明らかにすることを研究の目的とした。A保育者養成短期大学学生を対象に、保育実習Ⅰ及び保育実習Ⅱ終了後に「実習期間の中で、一番危険を感じた場面について記入してください」と質問して、「子どもの行動」「保育者・実習生の行動」「行すべき配慮事項」の3項目について自由記述で回答を求めた(N=146)。得られた質問紙調査結果について、テキストマイニング計量解析を行った。3項目について、頻出ワード上位150項目および共起ネットワークを導出し、「危険」に関する実習生の視点を考察した。保育実習Ⅰ及び保育実習Ⅱの経験を経て、学生の「危険」への視点が多様になるとともに、「危険」と「見守り」との関係を意識するようになってきたことが示唆された。

No121 **一人のD.M.D児の生きがい感の創造と家族の関わりについて**
西村次郎(岡山理科大学工学部), 松本典子(大阪府立枚方支援学校)

D型筋ジストロフィー症(DUCHENNE MUSCULAR DYSTROPHY 以下D.M.D)は、進行性の難病であり、非常に過酷な疾患である。そのような状況のもとで、将来に対する絶望感、無気力、死への不安感などから、思春期には心の荒廃した状態に陥るD.M.D児が多いとされている。

このようなD.M.D児の幸福・最善の利益を追求し、生命力に直結した生き生きとした自己存在感の認識を育てるという視点から、D.M.D児と家族との関わりについて半構造化された面接法により考察した。D.M.D児の場合、進行する疾患という極限状態にあり、共に生きるという観点から、相手の自己開示性を尊重しながら面接し、弾力的に実態を明らかにすべく留意した。

日常の全生活において介護を必要としており、母親を中心に、毎日24時間、24年間の日々であった。そのため母親においては、D.M.D児への介護が母親自身の生きがい感となっている。姉においては、自分自身の生きがい感の確立を図りながら、D.M.D児(弟)の生きがい感の創造に関わっていることが明らかになった。

No122 子どもにとって魅力のある園とは？
天野美和子（東京大学大学院教育学研究科）

昨今、待機児童対策として保育所等の急速な増設が進んでいる。保育所不足は、特に乳幼児の子育てと仕事との両立をする親にとって避けることのできない問題である。政府も新たな保育の受け皿を確保する等、待機児童解消のために積極的な取り組みを行ってきた。

その一方で、どの保育施設においても、乳幼児期の子どもの育ちを保障した環境が整っているのかという懸念もあり、「保育の質」に関する研究も行われるようになった。これらは、子どもの育ちを保障する立場である“大人”側の動向である。

では、実際に保育所等で過ごす子どもたちは自身が日々生活したり、遊んだりしている保育環境をどのように捉えているのだろうか。本研究では、園の子どもたちに、自分が通っている園の「お気に入り」の場所や遊具や遊びについてインタビューし、子どもたちが好む園環境には、どのような要素があるのかを探り、子どもにとって魅力のある園づくりのための示唆を得たい。

No123 小学校の風景：参与を通じた場の全体性理解の契機と展開
木下寛子（九州大学大学院人間環境学研究院）

本発表は、参与したある小学校でのその時々を経験が、いかに学校の場の全体性理解に繋がるかを問い、既知の場に参与するフィールドワークの意味とその基本性格を論じる試みである。

発表者は、2001年6月から毎週半日ある小さな公立小学校で過ごしてきた。参与する以前には分かり切った自明の場と見えた小学校だったが、その日々の在り方を十分に受け止め、そこで適切かつ自由に行うことができるまでには長い時間を要することになった。そしてその経過は、振り返ると、学校の風景が全く別様に見えてくるという、印象的な経験と同期するように展開したように思われる。本発表では参与を、ごく単純に「ある場所に（他者と共に日々を過ごして）居る」と見て、その一定の実現に至る17年間を「風景の変転」という経験を中心に記述する。それを通じ、場の全体性理解の契機と展開、およびその解釈の可能性を開く、基礎的事態としての参与の在り方を明らかにしていきたい。

No124 児童のディスコースの特徴に関する一考察～算数科授業を事例として～
齊藤英俊（北陸学院大学人間総合学部）、下村岳人（北陸学院大学人間総合学部）

本研究の目的は、授業にみる児童のディスコースの特徴を明らかにすることである。そこで本研究では、二つの学級で別々の授業者によって行われた第3学年の「分数」単元の導入場面の授業をもとに調査を行った。対象とした授業のねらいは、量分数という新しい概念の獲得を目指すものであった。授業場面の記録を行い、記録をもとに内容分析を行った。また、授業者のインタビューも行い、教師の授業への考え方と児童のディスコースとの関連性についても検討した。分析結果から、どちらの授業も、授業の終盤には、本時のまとめが板書され、教師のたてた内容の目標が達成された授業であった。しかし、授業のねらいが達成された授業であっても、そこに辿り着くまでの子どもの様相は様々である様子が明らかとなった。さらに、授業後に実施した授業者へのインタビューからは、教師の授業に対する考え方の違いによって、発問の仕方に特徴がある様子を明らかにした。

**No125 企業で働く女性が妊娠するとき—〈働き手〉／〈妊婦〉としての自己定義をめぐる調整と交渉—
足立にわか(白百合女子大学 生涯発達研究教育センター)**

日本社会の労働力人口総数における女性雇用労働者数の増加にともない、働く女性を対象とした妊娠・出産に関する法整備が進められてきたが、働く女性たちは今なお妊娠・出産に関わる様々なトラブルに直面している(杉浦、2002; 吉朝、2014)。加えて、近年、職場にも能力主義や成果主義(東野、2011; 熊沢、1997)が導入されるようになり、〈働き手〉であることを一層積極的に示すことが求められるようになったため、女性たちは妊娠しても〈働き手〉から〈妊婦〉になることに逡巡して、あるいは、他者による〈働き手〉／〈妊婦〉定義に抗えず、深刻な身体上のトラブルに見舞われる事例が数多く報告されている。本研究ではインタビュー・データを用いて、〈働き手〉だった女性が妊娠することで遭遇する〈働き手〉／〈妊婦〉としての自己定義場面に焦点化し、そこに絡む諸要因やそこから派生する問題を報告する。

**No126 がんターミナルと告げられながら長期生存する夫婦との対話
向後裕美子(東京大学大学院)**

医療の進歩に伴い、がんを抱えながら生存するケースも増えているが、がんは現在でも日本人の死亡原因として最も多いものであり、厳しい宣告を受けることもある。今回の報告では、筆者が2011年から定期的にインタビューを行ってきた、9年前に末期がんと告げられた厚子さん(仮名)と、その夫であり14年前に末期がんと告げられた史哉さん(仮名)との対話を通して、がんのターミナルであると医師から伝えられながら長期にわたって生存するという経験について考える。

調査開始にあたっては、研究の目的や発表の方法等について文書と口頭で説明した上で文書による同意をいただき、その後も継続的に口頭で説明を行い研究協力の意思を確認してきた。また、分析結果に大きな影響を与えない範囲で、個人特定につながりうる情報を改変するなどの倫理的配慮を行っている。なお、本研究は東京大学倫理審査専門委員会の承認を得たものである。

**No127 ピアジェの発生的認識論のスピノザ的解体(4) ベルクソンによる記号論的場の構築
小島康次(北海学園大学経営学部経営情報学科)**

ピアジェの発生的認識論に関する一連の理論的考察「ピアジェの発生的認識論のスピノザ的解体」の中で、昨年、本学会で発表した「(3) ベルクソンによる意味の身体性」に続いて、「(4) ベルクソンによる記号論的場の構築」すなわち、〈わたし〉という記号論的場の構築に関する考察として展開したものである。ピアジェ理論における認識のプロセスは、同化、調節、均衡化というスキーマの活動によるものと考えられる。しかし、ベルクソンによれば、認識とは、純粹持続であるはずの時間の流れが、記号によって、数的な多様体の場において認識されるプロセスであるとされる。これが可能となるためには、認識主体としての〈わたし〉と、認識される〈わたし〉とが分裂しなければならない。このような自己分裂によって認識の構造そのものが成立するメカニズムについて考察する。

精神病と統合失調症の新しい理解

—地域ケアとリカバリーを支える心理学— 英国心理学会・臨床心理学部門監修 A. クック編 国重浩一・バーナード紫訳 A5・224頁・本体3200円＋税 最新の研究や当事者の体験談を豊富に引用し、精神疾患の心理的・社会的な側面に光を当てる。生活上の影響を踏まえた支援のあり方を探り、多角的・複眼的視点からメンタルヘルスの制度改革を説く。

ふだん使いのナラティブ・セラピー

—人生のストーリーを語り直し、希望を呼び戻す— D. デンボロウ著 小森康永・奥野 光訳 四六・344頁・本体3200円＋税 ト라우マ、虐待、個人的な失敗、悲嘆、老いなどの困難に対峙するためのユニークな質問や道具、アイデアを提供。「問題の外在化」や「リ・メンバリング」など、人生のストーリーを書き換える方法を実践的に解説する。

シシリー・ソンドース初期論文集1958-1966

—トータルペイン 緩和ケアの源流をもとめて— C. ソンドース著 小森康永編訳 四六・264頁・本体2800円＋税 近代ホスピスの設立と普及に尽力し、死にゆく人の「痛み」を捉えようとした著者の思想を再訪。1958年の第一論文「がんが死ぬこと」をはじめ、8つの初期の論考を収録。編訳者の解説を通して、晩年に至るまでの思考の軌跡を辿る。

心の科学のための哲学入門4 生きられた〈私〉をもとめて

—身体・意識・他者— 田中彰吾著 四六・264頁・本体2300円＋税 現象学的な立場から、アイデンティティを「私が私であること」とし、根源的な場面まで遡ってその根拠を考える。ラバーハンド・イリュージョン、離人症、ブレイン・マシン・インタフェース、心の理論など、「心の科学」のトピックを織り交ぜながら、常識を揺さぶる思考実験を行う。

北大路書房

〒603-8303

京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

振替 01050-4-2083

心理学って面白そう！
どんな仕事で活かされている？

シリーズ 心理学と仕事 (全20巻)

シリーズ 監修 太田信夫

●A5判・約160～220頁・予価2000～2600円＋税

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|----------------|
| 1 感覚・知覚心理学 | 2 神経・生理心理学 | 3 認知心理学 | 4 学習心理学 | 5 発達心理学 |
| 6 高齢者心理学 | 7 教育・学校心理学 | 8 臨床心理学 | 9 知能・性格心理学 | 10 社会心理学 |
| 11 産業・組織心理学 | 12 健康心理学 | 13 スポーツ心理学 | 14 福祉心理学 | 15 障害者心理学 |
| 16 司法・犯罪心理学 | 17 環境心理学 | 18 交通心理学 | 19 音響・音楽心理学 | 20 ICT・情報行動心理学 |

ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111 〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095 http://www.nakanishiya.co.jp/ (表示は税抜価格)

早わかり混合研究法

J・W・クレスウェル 著
抱井尚子 訳

2～3時間の読書でつかむエッセンスと手順。
予価2500円

基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法

高梨克也 著

会話を理論的・体系的に説明しようとする人のための入門書。2400円

文系のためのSPSSデータ解析

山際勇一郎・服部環 著

人文系領域で必要となるデータ解析法を基本から学ぶ。
2700円

コミュニケーション研究法

末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 編

研究倫理・心構えから、フィールドワークや実験法、質問紙法、統計まで、多彩な研究手法を解説。
3200円

Rで多変量解析

渡辺利夫 著

重回帰分析、因子分析、MDS、クラスター分析、判別分析、数量化理論、分散構造分析等、丁寧に解説。
2200円

社会調査のための計量テキスト分析

樋口耕一 著

◎内容分析の継承と発展を目指してデータ分析フリーソフトKH-Coderの開発者による解説と事例。
20800円

グラウンデッド・セオリーを構築する(第2版)

キャシー・シャーマズ 著／岡部大祐 監訳

初版の議論をより詳細に、より丁寧に解説。
予価7000円

リフレクティヴ

矢原隆行 著

◎会話についての会話という方法。まったく新たなコミュニケーション空間の創出方法を導く。
2000円

テーマティック・アナリシス法

土屋雅子 著◎インタビュデータ分析のためのコーディングの基礎

透明性・厳密性を確保する。
2200円

子ども理解のメソッド

中坪史典 編◎実践者のための「質的実践研究」アイデアブック

エピソード記述やKJ法など、子ども観察の手法を事例で紹介。
2000円

ゼロからはじめる統計モデリング

堀裕亮 著

実際にRを使いながら学べるような基礎から具体的に解説。
2200円

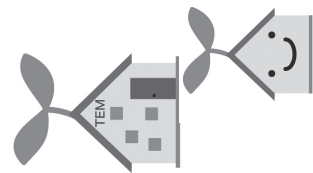
最強の社会調査入門

前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆 編

◎これから質的調査をはじめよう人のために社会調査の極意を、気鋭の社会学者たちが伝授。
23000円

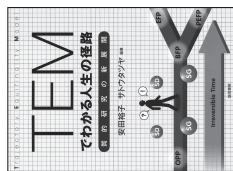
TEM でひろがる社会実装

—— [ライフの充実を支援する]



安田裕子・サトウタツヤ編 今やTEMは、質的研究法としてひろく用いられるに至っている。シリーズ第3弾となる本書では、外国語学習および教育、社会人のキャリアデザイン、看護・保健・介護などの支援に焦点をあてた論文に加え、学生相談での応用事例や臨床実践のリフレクションでの活用事例を収録。その汎用性の高さを明らかにし、TEMによる社会貢献の広がりをめざす。序章と終章で改めて基本概念の検討を行い、収録論文の読解を助けるとともに今後の展望を指し示す。

A5判・上製
近刊

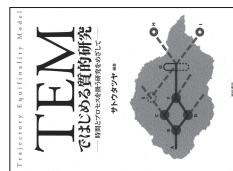


A5判・上製
3400円

TEM でわかる人生の怪路

—— [質的研究の新展開]

安田裕子・サトウタツヤ編 質的研究に時間の概念を導入し、視覚的に理解を促す試みの集大成。誰もが自分自身の人生の怪路をTEMに描くことができ初学者でも簡単に質的研究用のデータを拾っていくことが可能になる。

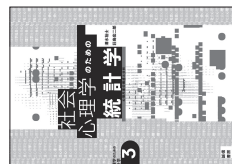


A5判・上製
3000円

TEM ではじめる質的研究

—— [時間とプロセスを扱う研究をめざして]

安田裕子・サトウタツヤ編 質複線経路・等時性モデルを使用して、従来なかった時間の観念を心理学にもたらす。人間の多様性や複雑性を扱うための新しい方法論。臨床心理学分野でも導入が進む画期的手法。



B5判・並製
2800円

心理学のための統計学③

社会心理学のための統計学—心理尺度の構成と分析

清水裕士・荘島宏二郎著 自尊心、対人魅力、関係へのコミットメント等々、社会心理学理論や概念をジャーナルに掲載された論文に似せたストーリーに盛り込みつつ、各種分析法を解説した2色刷りテキスト。



A5判・並製
1700円

日本心理学会監修 心理学叢書⑥

地域と職場で支える被災地支援

—— [心理学にできること]

安藤清志・松井 豊編 被災者への支援として心理学に何ができるか。本書では東日本大震災時の活動例や被災者研究を紹介。今後に活かせるものが見えてくる。



A5判・並製
1800円

家族と向きあう不登校臨床

—— [保護者の積極的な関わりを引きだすために]

中西康介著 保護者の役割に特に着目した不登校臨床の手引き。信頼される接遇の仕方、初回面接の進め方、積極的な関与を引きだす「3つの治療契約」まで徹底解説。NG対応集などのお役立ちコラムも多数。



A5判・並製
1700円

日本心理学会監修 心理学叢書⑦

震災後の親子を支える

—— [家族の心を守るために]

安藤清志・松井 豊編 東日本大震災により、被災地の親子をめぐる環境が急変するなか、家族の心と生活を支えるため、心理学ができることを多面的に考える。

山誠信書房 1955年創業
SEISHIN SHOBO

〒112-0012 東京都文京区大塚3-20-6

TEL 03-3946-5666

FAX 03-3945-8880

【価格は税別】

<http://www.seishinshobo.co.jp/>

「看護研究」誌のご購読を!

看護学の発展に向け、研究の充実がますます欠かせない時代。看護とは? 研究とは? 原点を常に見つめ、変わらない知を再発見し、変わりゆく知を先取りしながら、すべての研究者に必要な情報をお届けし、ともに看護学のこれからを考えていく、わが国唯一の研究誌。

2017年(Vol.50)特集一覧

- No.1 DNPの理念と実際ー専門看護師をさらに育てる博士課程教育
- No.2 若手研究者育成のさらなる進展ー海外大学の視察を中心に
- No.3 質的統合法の現在ーグラウンデッド・セオリーとの比較を中心に考える
- No.4 **増刊号** 看護学の知をどう構築するか 第2特集 若手研究者が描く未来
- No.5 事例研究をどうみだすかー事例がもたらす知の可能性
- No.6 看護を変革する看護実践研究の可能性(仮)
- No.7 理論家ロイと理論分析家フォーセットの対話(仮)



2017年年間購読料

(本体価格, 送料弊社負担)

冊子版	12,060円	学生割引	9,720円
冊子+電子版	個人 15,060円	学生割引	12,720円
電子版	個人 12,060円	学生割引	9,720円

●2017年(増刊号を含む年7冊)
1部定価: 本体1,900円+税
増刊号定価: 本体1,900円+税

◎あの人はなぜ「できる」のか?



シリーズ
ケアをいらい

介護するからだ

細馬宏通

目利きで知られる人間行動学者が、ベテランワーカーの「神対応」をビデオで分析してみると……そこにあったのは“かしい身体”だった! ケアの現場が、ありえないほど複雑な相互作用の場であることが分かる「驚き」と「発見」の書。なぜ真似で関係が動き出すのか、延長ジェスチャーとは何か、ズレと転用のテクニックはどう使われるのか、そしてマニュアルがなぜ現場で役に立たないのか——。暗黙知を言語化するとこうなる。

●A5 頁288 2016年 定価: 本体2,000円+税 [ISBN978-4-260-02802-8]



医学書院

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 [WEBサイト] <http://www.igaku-shoin.co.jp>
[販売部] TEL: 03-3817-5650 FAX: 03-3815-7804 E-mail: sd@igaku-shoin.co.jp

山岸明子 著

つらさを乗り越えて生きる

伝記・文学作品から人生を読む

子どもはつらさにどう対処しているか。心から離れない罪悪感にどう向きあったか。うまくいかない母娘関係を和解に導いたものは？ 誰もが人生のどこかで、つらさを乗り越える困難と向き合う。そんな時、何が生きる力となるのか。心理学者が文学作品、伝記やエッセイから読み解く。四六判上製208頁/2200円＋税

ブライアン・ラドクリフ 著／佐々木英子 訳

ドラマ教育ガイドブック

アクティブな学びのためのアイデアと手法

ドラマは学びを刺激し、教室の協働を促し、学びの質を高めるアクティブラーニング！ 常駐のドラマ専任教師と専用スタジオが設置されている学校も多いドラマ教育先進国イギリス。その現場で活用されている、すぐに使えるアイデアと手法、アドバイスがぎゅっ詰まった実践の手引き。四六判並製136頁/1600円＋税

ニール・J・サルキンド 著／畑中美穂 訳

心理学研究法のキホンQ&A 100

いまさら聞けない疑問に答える

帰無仮説？ 有意？ 基本的な概念ほど、理解するのも教えるのも難しい。初心者の誰もが疑問に思う重要な100のトピックを、Q&A形式で分かりやすく、簡潔に解説。研究法のキホンを学びたい、分からない用語を調べたい、理解を深めたい人のための、これまでになかったガイドブック。A5判並製168頁/1800円＋税

A・M・スレーター & P・C・クイン 編／加藤弘通・川田学・伊藤崇 監訳

発達心理学・再入門

ブレイクスルーを生んだ14の研究

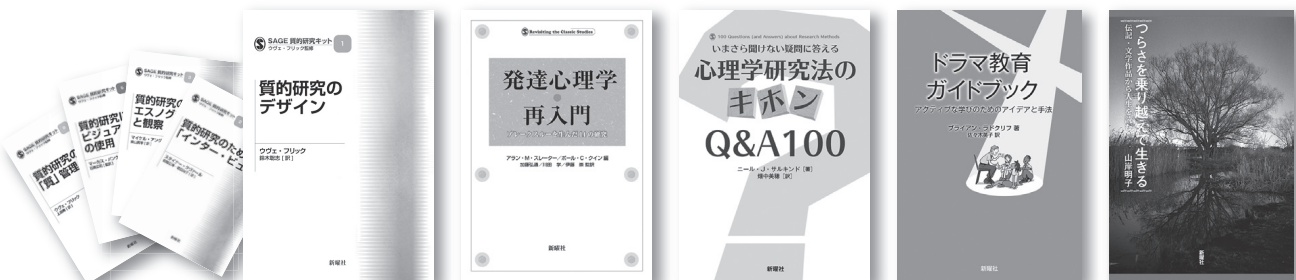
発達心理学の形成に貢献し、今も論文やテキストに引用され続けている重要研究は、どのように登場し、批判され、乗り越えられようとしているのか。私たちの認識をどのように深め、広げたのか。誰もが立ち戻って学ばべき鍵となる研究を精選、理論的・実証的な見地から解説した入門書。A5判並製292頁/2900円＋税

日本質的心理学会 編

質的心理学研究 第16号

特集 質的研究における映像の可能性

調査分析における映像の活用が急速に広がりを見せるなか、映像から質的なものをどのようにすくいあげ、議論の俎上にのせるのか。映像の力を媒介に現実に鋭く切り込み、質的研究と映像との関わりを深く考えさせられる魅力的な論考の数々を通して、その本質的な問いに挑戦する。B5判並製252頁/3000円＋税



ウヴェ・フリック 監修／A5判並製 SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック 著／鈴木聡志 訳

1 質的研究のデザイン

アイデアからリサーチクエスションへどう発展させるか。サンプリングをどう考えたらよいのか。研究者がフィールドで出会う障害とは？ 質の高い質的研究をデザインするための基本知識と勘所を、実例を用いて丁寧に解説した質的研究入門必携。196頁/2100円＋税

スタイナー・クヴァール 著／能智正博・徳田治子 訳

2 質的研究のための「インタビュ」

インタビュー実践の具体的なノウハウを余すところなく伝えつつ、質的研究におけるインタビューのあり方を奥行きをもって考察。インタビュー研究の初心者がまず読むべき入門書であり、経験者にとっても、実践を振り返り発展させる契機となる一冊。272頁/2700円＋税

マイケル・アングロシノ 著／柴山真琴 訳

3 質的研究のためのエスノグラフィと観察

客観的なデータ収集と主観的な洞察とのバランスをとりながら、人々の日常生活を参与観察するエスノグラフィ。フィールドサイトの選定から報告書の作成まで、エスノグラフィ研究の鍵となる基本的事項を、具体例を示しながら掘り下げて解説。168頁/1800円＋税

マールカス・バンクス 著／石黒広昭 監訳

5 質的研究におけるビジュアルデータの使用

写真、映画、絵等、ビジュアルデータは情報豊かではあるが多義的で曖昧でもあり、扱うのが難しい。その特質を踏まえてどう収集・分析し、結果を研究参加者、視聴者、社会に還元するか。倫理的問題も含め、研究例を引きながら周到に解説した待望の書。224頁/2400円＋税

ウヴェ・フリック 著／上淵寿 訳

8 質的研究の「質」管理

質的研究の高い質をいかに確保し、いかに評価するか。質的研究の特質である多様性を確保し、研究を拡張する方法としてのトライアンギュレーションを中心に、質的研究の質を管理するにあたっての問題とその解決について丁寧に解説した必携の書。224頁/2400円＋税

ロザリン・バーバー 著／大橋靖史 訳

4 質的研究のためのフォーカスグループ

グラハム・R・ギブズ 著／砂上史子・一柳智紀・一柳精 訳

6 質的データの分析

8月刊行・最新刊！
ティム・ラプリー 著／大橋靖史 訳

7 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析

株式会社
新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-9 幸保ビル

TEL: 03-3264-4973 (代) FAX: 03-3239-2958

E-mail: info@shin-yo-sha.co.jp URL: http://www.shin-yo-sha.co.jp

(表示価格は本体価格)

日本質的心理学会第14回大会 実行委員会

大会長	首都大学東京	教授	西村ユミ
大会実行委員長		教授	山本美智代
実行委員		准教授	福井里美
		准教授	種吉啓子
		准教授	飯塚哲子
		助教	坂井志織
		助教	高嶋希世子
	共立女子大学	教授	河原智江
		教授	田口理恵
	東京医科歯科大学	教授	大久保功子
	東京医療保健大学	教授	久保恭子
	茨城大学	教授	伊藤哲司
	湘北短期大学	講師	沖潮満里子
	帝京平成大学	講師	荘島幸子
	早稲田大学	研究員	鷹田佳典
当日運営委員	首都大学東京	准教授	清水準一
		准教授	三浦里織
		助教	新井清美
		博士後期課程	池口佳子
		博士後期課程	伊田裕美
		博士後期課程	齋藤貴子
		博士後期課程	栩川綾子
		博士後期課程	細野知子
		博士後期課程	村上優子
		博士前期課程	松崎かさね
	東京医療学院大学		菊地ひとみ
	藤沢市保健医療センター		鈴木清美

クッキー・パウンドケーキ販売

社会福祉法人トラムあらかわ 「荒川ひまわり第2」「荒川ひまわり」

広告・展示

株式会社 新曜社
 株式会社 医学書院
 株式会社 誠信書房
 株式会社 ナカニシヤ出版
 株式会社 北大路書房
 株式会社 ライトストーン
 株式会社 QRS International Japan
 ユサコ株式会社
 法政大学出版局
 東洋羽毛首都圏販売株式会社